

## 序にかえて

東京文化財研究所では、平成 10（1998）年度より、全国各地の無形民俗文化財の保護に資することを目的として、各行政機関の文化財担当者、無形民俗文化財の保存団体及び研究者等の参加を得て、「無形民俗文化財研究協議会」（平成 17・2005 年度までは「民俗芸能研究協議会」）を開催してきました。今年度は、「新型コロナ禍の無形民俗文化財」をテーマとし、オンライン配信という新たな形態で開催いたします。

現在、新型コロナウイルス感染症（covid-19）の影響が続いています。4 月に緊急事態宣言が出されたこともあり、多くの人が密集する可能性がある祭礼や行事は、中止や規模縮小を余儀なくされました。こうした制限を受け、無形民俗文化財の伝承者は従来通りの活動が出来ない状況にあります。このような新型コロナ禍において、どのようにすれば地域の無形民俗文化財を持続的に守っていくことが出来るでしょうか。また、こうした状況を逆に利用し、無形民俗文化財の魅力を広く発信するなど、地域を盛り上げるために活用していくことは出来ないでしょうか。

以上を踏まえ、今回の協議会は、9 月 25 日に開催された「シリーズ 無形文化遺産と新型コロナウイルス フォーラム 1 『伝統芸能と新型コロナウイルス』」に続く第 2 弾として、無形民俗文化財に焦点を当てて開催いたします。本フォーラムでは、ご登壇の皆様と一緒に、新型コロナ禍において無形民俗文化財を次の世代へとつなげていくためのより良い方法を考えていきたいと思います。

東京文化財研究所 無形文化遺産部



# 目 次

## はじめに

- |                           |    |
|---------------------------|----|
| 1. 趣旨説明 コロナ禍における無形文化遺産    | 1  |
| 今石 みぎわ（東京文化財研究所 主任研究員）    |    |
| 2. 無形民俗文化財とコロナ禍           | 3  |
| 鈴木 昂太（東京文化財研究所 研究補佐員）     |    |
| 3. 無形文化財とコロナ禍             | 19 |
| 前原 恵美（東京文化財研究所 無形文化財研究室長） |    |

## 第1部 報告「各地の現状・課題と対応」

- |                                |    |
|--------------------------------|----|
| 1. 無形文化遺産における新型コロナウイルスの影響      | 23 |
| －滋賀県の事例－                       |    |
| 矢田 直樹（滋賀県文化スポーツ部文化財保護課主査）      |    |
| 2. 疫病退散の祭礼とコロナ禍                | 29 |
| －千葉県の場合と博物館－                   |    |
| 小林 裕美（千葉県立中央博物館歴史学研究科長）        |    |
| 3. 観光の島におけるコロナ禍                | 41 |
| －山口県周防大島の無形民俗文化財・資料館－          |    |
| 高木 泰伸（周防大島文化交流センター・宮本常一記念館学芸員） |    |

## 第2部 報告「伝承団体の取り組み」

1. 大償神楽の伝承地外在住者に対する「能動的な」演者獲得の試み  
－「通い神楽」の実践から－  
吉田 真彦（花巻市地域おこし研究所班員）49
2. 島根県大元神楽の取り組み  
宇都宮 将（市山神友会事務局長）57
3. 福島県浜通りのじゃんがら念仏踊りの取り組み  
田仲 桂（いわき市文化財保護審議会委員、磐城じゃんがら彩志会会員）63
4. コロナ禍における讃岐の獅子舞と「獅子舞王国さぬき」  
十川 みつる（讃岐獅子舞保存会会長、さぬき市造田中組獅子舞保存会所属）77
5. 東京讃岐獅子舞のオンライン活用  
中川 あゆみ（獅子舞応援団団長、東京讃岐獅子舞代表）87

## 第3部 総合討議91

参加者 吉田 真彦・宇都宮 将・田仲 桂・十川 みつる・中川 あゆみ  
司 会 久保田 裕道（東京文化財研究所 無形民俗文化財研究室長）

## 参考資料108

## はじめに

## 趣旨説明 コロナ禍における無形文化遺産

今石 みぎわ（東京文化財研究所 主任研究員）

東京文化財研究所の今石です。コロナウイルスの第3波が猛威を振るっていますが、思い返すと、ちょうど昨年の暮れ、12月31日に原因不明の肺炎が発生しているという第一報があったかと思います。それから丸1年たったわけですが、特に4月の緊急事態宣言以降は、全くこれまでの暮らしとは違う新しい日常、「新しい生活様式」という言葉も生まれましたが、そうした暮らしを強いられている方が多いのではないかと思います。

私たちの協議会も、今回は完全にオンラインということで、リモートで行うことになりました。テーマを「無形民俗文化財とコロナ禍」として、1年たってどういう影響が無形文化遺産に対して表れているのか、それに対してどう対応してきたのか、今見えている課題や展望は何かといったことを、テーマにしていきたいと考えています。

## 1. 影響の範囲と無形文化遺産の分野

はじめに趣旨説明として、今回の討議の前提となることを2点だけお話ししたいと思います。まず1点目として、同じ無形文化遺産といっても、コロナによる影響の範囲や質はさまざまということが挙げられると思います。特に強い影響を受けたものは、やはりなりわいとして経済活動に組み込まれているもの、それから実践の形態が密になるもの、この2つではないかと思います。

特に無形文化財の古典芸能の分野、これは現在も非常にひっ迫した状況が続いています。公演ができない、あるいは稽古ができないということで、こうした分野の現状については、当研究所の前原室長より報告がありますので、後ほどご覧いただければと思います。それから無形民俗文化財の中でも、祭りや芸能といったもの、それから一部の観光化が進んだような民俗技術に関しても非常に大きな影響が出ています。また祭りや芸能そのものだけではなく、それに使う道具や衣装を作るような方々、あるいは素材を採取したり加工するような方々にも、大きな影響が出ているところだと思います。

特に祭りや芸能に関して、今回大きな特徴の

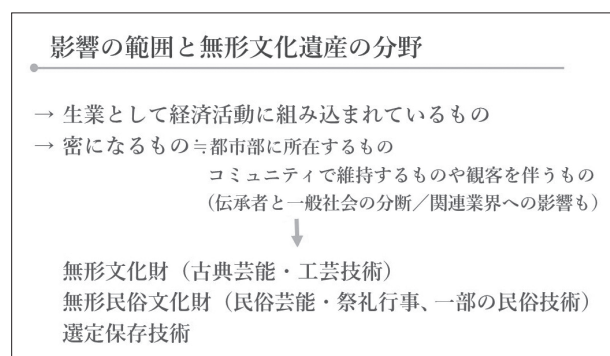


図1

一つと言えるのは、東日本大震災以降さまざまな災害があったわけですが、これまでの災害復興においては、演ずる側、伝承者の側が芸能や祭りをやりたい、復活させたいといった時には、一般社会の方々はどちらかというと支援する、応援する、見守るという立場でいてくださったと思います。しかし今回のコロナに関しては、演ずる側がどれだけ演じたいと思っても、一般社会がそれを許さない、どうしてこんな状況の中で祭りをやるんだというような声もありました。つまり、一部ではありますが、伝承者と一般社会の分断が見られたということが特徴としてあったのではないかと思います。

## 2. コロナ禍で見えてきたもの

それから第2点目です。これは東日本大震災の後も繰り返し言われたことですが、今回のコロナで見えてきた問題というのは決して急に出てきた問題ではなく、それまで日常の伝承の中において内在していた、内包されていた問題が表に出てきた、ということが言えるかと思います。

もうひとつは、今回たしかに非常事態ではあるのですが、歴史的に見ると無形文化遺産とい

うものは、そもそも数々の非常事態を乗り越えて伝えられてきているということです。様々な災害や今回のような疫病、あるいは近代以前では飢饉や戦乱という問題もありました。加えて、人や村が移動、移転するといった状況、そうしたさまざまな危機的な社会情勢の中で、形を変えながら伝えられてきたのが無形文化遺産です。ですから長い目で見た場合には、この非常事態というのは、伝承にとってはいわば当たり前の、織り込み済みの事態だと考えることもできるわけです。別の言葉で言うと、私たちはこのコロナの問題を考える際に、過去の事例から学ぶこともできますし、あるいは今回得た教訓というものを未来に残すこともできると思います。

ですから、今回の協議会はコロナに焦点を当てるわけですが、それを特殊な問題としてではなく、日常の伝承を考えるような機会にしたいと考えています。

以上を踏まえ、本日はまず私たちから無形文化遺産をめぐる動向について話題提供を行なった後に、第1部のご報告と第2部の総合討議という形で進めたいと思います。まず報告については、「無形文化遺産を支える立場から」ということで、行政や博物館から3名の方にご発表いただきます。祭りや芸能が、疫病などの災厄に対してこれまでどういった社会的役割を果たしてきたのかといったところから、現在コロナによってどういう影響が出ているのか、そういったことも含めてご報告をいただきたいと思います。

次に「実践する立場から」として、5名の方にご報告をいただきます。こうした厳しい状況の中でどのように伝承活動を続けているのか、あるいはどういった新しい試みを行っているのか、そうしたことをご報告いただきまして、第2部の総合討議では、この5名の方を中心に討議を行いたいと思います。

足早になりましたが、以上で趣旨説明を終わります。

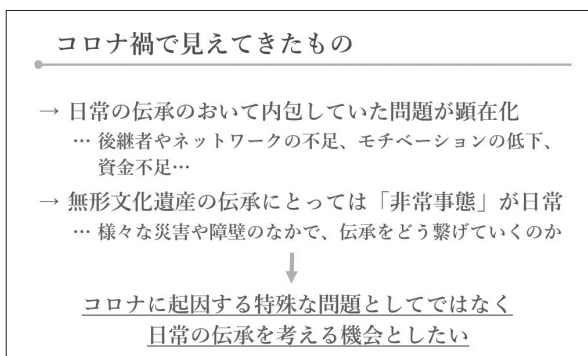


図2

# 無形民俗文化財とコロナ禍

鈴木 昂太（東京文化財研究所 研究補佐員）

皆さまこんにちは。東京文化財研究所無形文化遺産部研究補佐員の鈴木昂太と申します。

本日は「無形民俗文化財とコロナ禍」という題で、新型コロナウイルス感染症が流行してから、各地の民俗文化財がどのような影響を受けたか、またどんな新しい動きがあったのかについてお話しさせていただきます。ですが、今年はコロナ禍ですので、各地の伝承者の方々の状況については十分な調査ができませんでした。そうした各地の事例については、後ほどの各発表でお話しいただくことにしまして、本発表ではメディアに表れた情報を中心に、総論的なお話をさせていただきたいと思います。とはいえ短い時間ですので、ほかの発表者の方と被らない、ガイドラインの策定と民俗芸能大会という、2つのテーマでお話をさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

## 1. コロナ禍における無形民俗文化財の新たな活用

まずコロナ禍の推移ですが、1月に日本国内で初めての患者が発生して以降、3月頃から三密を避けることが盛んに提唱され始めると、民俗文化財の伝承活動は停滞の傾向を見せ始めます。そして4月に緊急事態宣言が発出されると多くの祭りが中止を余儀なくされました。

こうした時期の状況として挙げられるのが、青森ねぶた祭や京都祇園祭など大規模な都市祭礼の中止や延期です。このような不特定多数の人を多く集める可能性がある大規模な祭りは、すべて中止・延期となりました。そして、そのイメージに引っ張られて日本全国どの祭りも、人が集まる祭りは全て悪い、自粛すべきだという風潮が出てきてしまいました。

その一方、無形民俗文化財の伝承活動における新たな動きと言えば、無観客での動画配信の始まりです。私が知る限り早い事例としては、2020年の3月22日に、島根県益田市の石見神楽保存会くしろ久城社中が地元の神社で行ったものです。疫病退治を主題とする「鍾馗」がYou Tubeで生中継され、その様子は現在もYou Tube上にアーカイブとして残されています（スタジオヤング studioyoung (2020/03/22)「疫病鎮静祈願神楽 無観客ライブ配信『鍾馗』」YouTube [https://www.youtube.com/watch?v=bSR2lex3VCM&t=3608s] 最終閲覧日 2020年12月15日）。

次に目に留まったのが、4月19日に岩手県北上市の北上鬼剣舞連合会おにけんばいの13団体が、同時刻に各地で別々に疫病退散の舞を舞ったことです。この様子は東北文化財映像研究所が撮影し、そのYou Tubeチャンネルで見ることができます（Japanese folk performing arts 東北文映研ライブラリー

映像館（2020/04/19）「2020年4月19日疫病退散の舞」北上鬼剣舞連合会（二子鬼剣舞）4K」YouTube〔<https://www.youtube.com/watch?v=ShjM1Yhpy7Y>〕最終閲覧日2020年12月15日）。

また外出の自粛が強いこの頃、家の中で楽しめる民俗文化財の活用が新たに試みられました。たとえば、福島県田村市のホームページでは、福島県指定の無形民俗文化財である「お人形様」をモチーフにした、「お人形様で疫病退散」という塗り絵の配信が始められました。お人形様は、集落の境に鎮座する魔よけの神様だとされており、コロナを防ぐという意味で注目を集めたのだと思われます（福島県田村市「お人形様で疫病退！」〔<https://www.city.tamura.lg.jp/soshiki/18/oningyousamanurie.html>〕最終閲覧日2020年12月15日）。

また同じ福島県の事例ですが、南相馬市のホームページでは、国指定重要無形民俗文化財の「相馬野馬追すごろく」が配信されています。今年度の野馬追は、コロナにより大部分が中止となってしまいましたが、家で遊べるすごろくを配信するという形で情報発信をされています（福島県南相馬市「福島県相馬野馬追すごろく」〔[https://www.city.minamisoma.lg.jp/portal/culture/museum/stay\\_home\\_museum/11895.html](https://www.city.minamisoma.lg.jp/portal/culture/museum/stay_home_museum/11895.html)〕最終閲覧日2020年12月15日）。

## 2. 祭り開催のためのガイドラインの策定

その後、緊急事態宣言は5月14日に39県で、25日には全て解除されました。これによってイベントの開催制限が徐々に緩和され、祭りなども開催できるようになっていきます。こうした時期における新たな動きとしては、地域の祭り開催に関するガイドラインの策定ということが挙げられます。

たとえば香川県は、6月22日付で「感染予防対策期における地域の祭り等の開催にかかる留意事項等について」を発表しています。このガイドラインで注目されるのは、太鼓台、獅子舞という香川の祭礼に欠かせない要素に対して、詳しく注釈を付けていることです。ただしその内容を読むと、獅子舞はなんとか工夫すればできそうなのですが、「太鼓台は実施を控えることを含めて慎重に検討してください」というように、厳しい態度を示しています（香川県「第19回香川県新型コロナウイルス対策本部会議の概要について」〔<https://www.pref.kagawa.lg.jp/kenkosomu/kikikanri/w3zhuy200619112514.html>〕最終閲覧日2020年12月15日）。

次に神奈川県横浜市が6月11日に出した「自治会町内会における新型コロナウイルス感染症の拡大防止に向けた情報提供について」を見てみます。この中の「地域のお祭り等の開催について」のところでは、「中止や延期などを含めて、慎重にご検討くださいますようお願いいたします」というように、地域の祭り開催に対して慎重な判断を求めています（横浜市「自治会町内会における新型コロナウイルス感染症の拡大防止に向けた情報提供について」〔[https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kyodo-manabi/shiminkyodo/jichikai/korona\\_jichikai.html](https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kyodo-manabi/shiminkyodo/jichikai/korona_jichikai.html)〕最終閲覧日2020年6月15日）。

こうした文字でガイドラインを出したところもあれば、佐賀県は7月7日に「お祭り開催のポイント」という資料を出しました。この佐賀県の資料は、非常に絵が多くて分かりやすく、また笛の取り扱いや、獅子舞では観客をかまないようになど、具体的な点まで言及しており、参考になる事例です（佐賀県「【7月7日更新】佐賀県『地域のお祭り』開催のポイント」〔<https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00375338/index.html>〕最終閲覧日2020年12月15日）。

さらに、これは時期が進んだ11月の事例ですが、秋田県の男鹿市は「なまはげ行事の実施へ向けてのお願い」を出しました。このように、「なまはげ」という個別の民俗行事に関する詳細なガイド

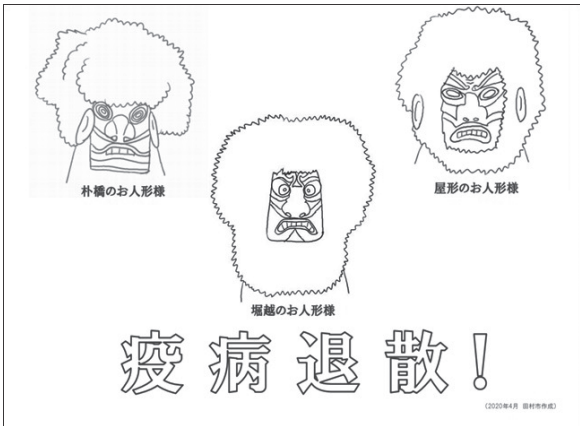


図1 福島県田村市「お人形様で疫病退散」

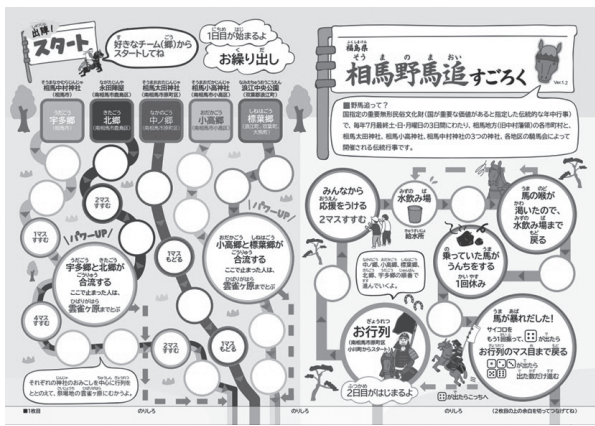


図2 福島県南相馬市「福島県相馬野馬追すごろく」

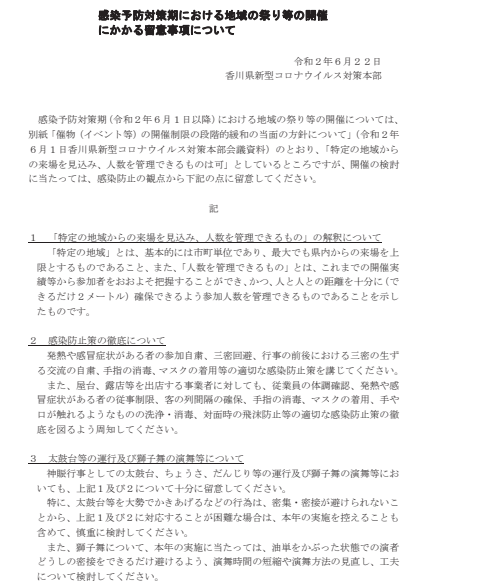


図3 香川県「第19回香川県新型コロナウイルス対策本部会議の概要について」

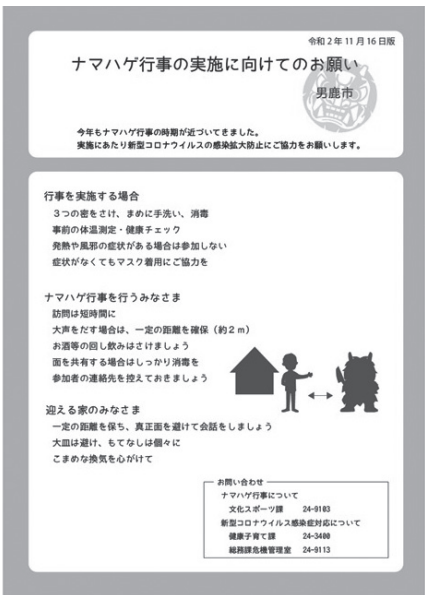


図5 秋田県男鹿市「ナマハゲ行事実施に向けてのお願い」

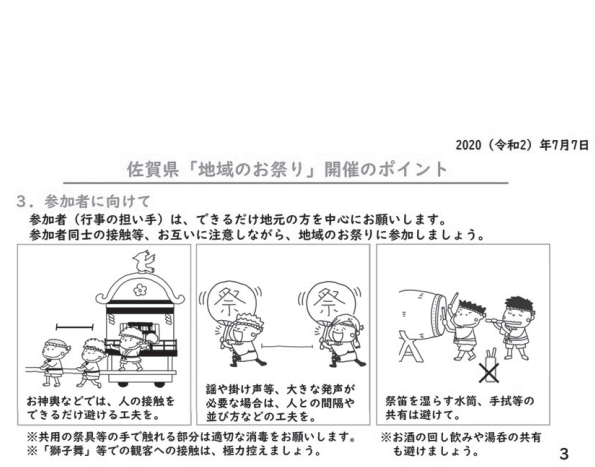


図4 佐賀県「佐賀県「地域のお祭り」開催のポイント」

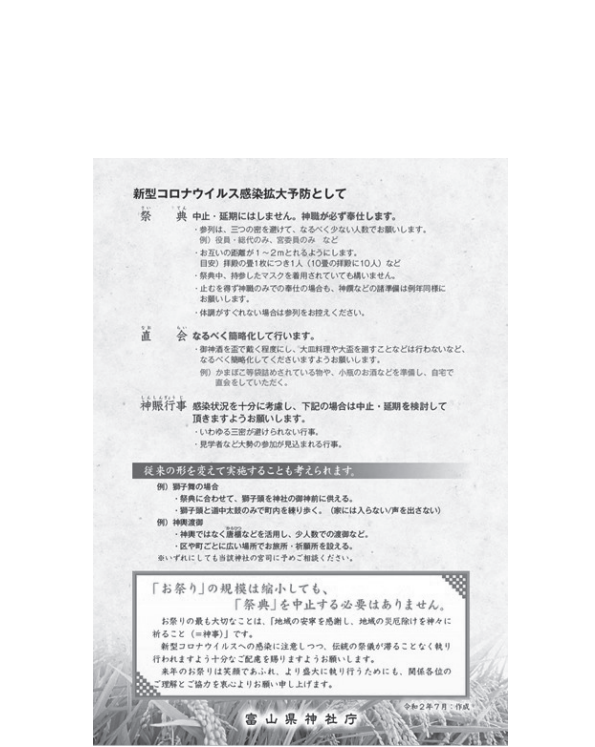


図6 富山県神社庁「神社のお祭りについてお願い」

ラインも発行されるようになりました（秋田県男鹿市「ナマハゲ行事実施に向けてのお願い」〔<http://www.city.oga.akita.jp/index.cfm/14,24057,52,html>〕最終閲覧日2020年12月15日）。

以上ご紹介してきたような自治体だけではなく、祭りの関係者や伝承者がガイドラインを策定する事例も出てきました。たとえば富山県神社庁は、「神社のお祭りについてのおお願い」というチラシを作成し、神輿渡御の方法についてだけではなく、富山の祭りに欠かせない獅子舞の奉納についても指針を出しています（富山県神社庁「神社のお祭りについてのおお願い」〔<https://toyama-jinjacho.sakura.ne.jp/> 神社のお祭りについてのおお願い〕最終閲覧日2020年12月15日）。

また、広島県では神楽が盛んで、神社の祭礼だけではなく、年中通してホールや舞台上で神楽の公演が行われています。そうした主に都市部での神楽の公演活動を支援する「ひろしま神楽復興支援事業実行委員会」は、7月4日に新型コロナウイルス感染拡大防止対策ガイドライン講習会を開催するとともに、コロナ禍で神楽をどのようにして舞っていくのかについてガイドラインを作成しました。この資料は、ウェブ上で公開されていますが、実際に伝承者が気を付けるべきチェックリストも付いており、実際に現場で使える内容になっているというのが特徴です（公益財団法人ひろしま文化振興財団 ひろしま神楽復興支援事業「広島神楽の練習再開に向けた新型コロナウイルス感染拡大防止対策ガイドライン」〔[http://www.npo-hiroshima.jp/2020kagura\\_promote/pdf-data/20200704-guideline.pdf](http://www.npo-hiroshima.jp/2020kagura_promote/pdf-data/20200704-guideline.pdf)〕最終閲覧日2020年12月15日）。

以上見てきたようなガイドラインの策定の動きを見てみると、作成者には大きく2つあることが分かりました。1つ目は自治体、つまり管理者で国の指示を現場へ分かりやすく伝える、翻訳するために作成するものです。そのため、どちらかというと大まかな内容で、自治体ごとに判断が異なる場合もありました。また、祭りの開催に対しては慎重に制限する傾向が見られます。2つ目は、伝承団体や関係者といった実践する人たちが作るガイドラインです。彼らは安心安全に活動を行うために、実演や練習の現場に即した具体的なルールを定めていました。

この後のご発表でも、ガイドラインの話は出てきますけれども、こうしたガイドラインの策定は、周りに対策していることをアピールし、信用を生み出す効果がありました。しかしながらガイドラインの内容に正解はないため、ほかの事例を参考にしながら作っていくしかないと言えます。

### 3. コロナ禍における無形民俗文化財の伝承活動

祭りの開催に関するガイドラインが定められると、実際に祭りを開催しようという話になっていきます。しかしながらこのコロナ禍においては、なかなか従来のとおりには祭りは開催できません。例年どおりに開催できた事例はほとんどありませんでした。そうしたコロナ禍における祭りの開催パターンを図8にまとめましたが、奉納行事の中止・規模縮小であったり、参列者を限ったり、また無観客でのオンライン配信で祭りをすることも行われました。

広島県 新型コロナウイルス感染症に対する安全対策シート（広島神楽練習版）		別 紙
対策責任者・担当者		策定/更新日
本講習会で取り組む対策：「はい」または「いいえ」のいずれかをチェック		
必 須	対策責任者・担当者を選任する。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
	発熱、風邪等の症状がある場合は、練習に参加しない。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
密閉空間を作らない。		
(1)	窓や出入口ドアを常に開放し、換気を行う。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
(2)	冷却時は、定期的に窓や出入口ドアを開け換気を行う。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
密集場所を作らない		
(3)	練習前後に不要な密着を避けてください。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
(4)	当面の間、神楽団員以外の見学者等の入場は控える。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
(5)	休憩時もお互いの距離を保つ。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
(6)	練習終了後は長居しない。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
密接場面を作らない		
(7)	マスク等の着用が困難な場合は、対面を避け、できるだけ3m以上離れる。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
(8)	適切な距離が確保できない場合は、透明ビニールシート等で仕切る。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
(9)	近接（1m以内）する場合は、お互いがマスクやフェイスシールドを着用し、直視禁止を要する。互いの顔を直接見ない。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
(10)	会話を控えるとともに、大声での会話は自粛する。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
マスクの着用		
(11)	練習参加者は出来るだけマスクやフェイスシールドなどを着用する。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
手洗等の消毒		
(12)	練習参加者は、練習前・練習後など、こまめに手洗い等を行う。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
(13)	アルコール手指消毒液の出入口に設置する。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
(14)	当面の間、面や衣装等の共用を避け、共用する際は3日間開燗を要する。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
(15)	練習場内で複数の人が接触する箇所は、こまめに消毒する。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
(16)	鼻水、唾液などがついたゴミを含め、自分で出したゴミは自ら持ち帰る。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
(17)	清掃やゴミ廃棄作業を終えた後は、必ず手洗いを行う。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
(18)	練習開始前・終了後に、トイレを含め、丁寧に消毒を行う。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
その他		
(19)	スマホの「コロナ接触確認アプリ」を活用する。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
その他		
※本シートはガイドライン記載事項を大きく項目分けし、簡略に記載したものであり、大項目（上記表中太字）毎に出来る対策を練習参加者で話し合ってから、出来るだけ複数の対策を選択し、協力して実施していくこと。		

図7 ひろしま神楽復興支援事業実行委員会「広島県 新型コロナウイルス感染症に対する安全対策シート（広島神楽練習版）」

また注目されるのは、中止した祭りの代替行事を開催する事例です。現在多くの伝承団体さんが、学校の郷土学習の時間で子どもたちに民俗芸能を教えられていると思います。子どもたちにとって祭りの中止は、日頃の成果を発揮する場がなくなることでありました。そのため、祭りの代替行事として、保護者のみなど参加人数を限ったかたちで、運動会や学習発表会などにおいて披露の場を設けるといった試みも見られました。民俗文化財の伝承者の方々は、活動を継続する、次世代の育成のために、さまざまな工夫をされていたことが分かります。

こうした寺社の祭りとは別に、特に民俗芸能の伝承においては、民俗芸能大会が大きな役割を果たしています。貴重な披露の場である民俗芸能大会は、新型コロナウイルスの流行によりどのような影響を受けたのでしょうか。図9に主な民俗芸能大会の実施状況をまとめましたが、九州地区民俗芸能大会以外は全て中止という結果になりました。

このような全国、ブロック別の大会もあれば、各県、市町村を単位とする民俗芸能大会も数多く開催されています。その一例として、2020年12月時点の神奈川県における民俗芸能大会の開催状況をご紹介します。なおこのデータは、神奈川県教育委員会生涯学習部文化遺産課の高久舞氏よりご提供いただきました。図10を見ていただくとわかるように、神奈川県内でも多くの大会が開催されませんでした。

複数の伝承団体や多くの観客がホールなどの室内の会場に集まる民俗芸能大会は、三密を生み出す危険性があると判断され、中止や延期される事例が多かったことがわかります。そうした中、九州地区の民俗芸能大会は大分県の中津市で開催されました。なぜ大分県では、ブロック別の民俗芸能大会を開催できたのでしょうか。こうしたことを、大分県教育庁文化課文化財班の高宮なつ美氏からご提供いただいた資料および私が実際に現地に赴いて見聞したことを基に、お話をさせていただきたいと思います。

まず開催に至るまでの経緯ですが（図11参照）、6月以前、緊急事態宣言が明けるかどうかという時

## コロナ禍における祭りの開催パターン

- A) 奉納行事の中止（儀礼のみ）
  - B) 奉納行事の規模縮小
  - C) 参列者を制限して開催（関係者のみの公開）
  - D) オンライン配信
  - E) 代替行事を開催（ex.郷土学習で学んだ子供のための披露の場）
- ・例年通りに開催できた事例はほとんどなかった。そのため、祭りの関係者や民俗文化財の伝承者は、活動を継続しようとさまざまな工夫を行っていた。
- ここからは、コロナ禍における工夫の一つであるオンライン配信の事例について見ていきたい。

11

図8 コロナ禍における祭りの開催パターン

## コロナ禍の民俗芸能大会

大会名称	会場	日時
第69回全国民俗芸能大会	日本青年館（東京）	2020年10月31日（中止）
第28回地域伝統芸能全国大会「地域伝統芸能による豊かなまちづくり大会しずおか」	静岡市民文化会館（静岡）	2020年11月28・29日（中止）
世界無形文化遺産フェスティバル2020	日比谷公園（東京）	2020年4月18・19日（中止）
第62回北海道・東北ブロック民俗芸能大会	青森県三沢市	2020年11月1日（中止）
第62回関東ブロック民俗芸能大会	群馬音楽センター（群馬県高崎市）	2020年11月8日（中止）
第62回近畿・東海・北陸ブロック民俗芸能大会	富山県	中止
第62回中国・四国ブロック民俗芸能大会	徳島県	中止
第62回九州地区民俗芸能大会	中津文化会館（大分県中津市）	2020年11月8日（開催）

図9 コロナ禍の民俗芸能大会

## 神奈川県における民俗芸能大会の開催状況

- 【実施】  
ひらつか民俗芸能まつり 2020年11月15日（日）12時半～16時半
- 【中止】  
かながわ民俗芸能祭（神奈川県民俗芸能保存協会主催）  
厚木市郷土まつり  
茅ヶ崎市郷土芸能大会  
一宮町民俗芸能祭のつどい  
小田原民俗芸能保存協会後継者育成発表会  
川崎市民俗芸能大会  
鎌倉郷土芸能大会
- 【不明】  
相模原市民俗芸能大会
- 【隔年開催】  
横須賀市民俗芸能大会（2020年はもとも実施しない年）

神奈川県教育委員会生涯学習部文化遺産課 高久舞氏提供・2020年12月時点

図10 神奈川県における民俗芸能大会の開催状況

## 開催にいたるまでの経緯

日時	状況
6月以前	他ブロックの開催状況の確認、県文化財保護審議会の民俗文化財担当委員に相談、九州各県の団体推薦状況についてアンケート調査、文化財課内で協議を重ねる。
6月下旬	出演団体推薦締切までにブロック内全県から推薦があったため、感染症対策を徹底した上で開催の方向に進む（一県でも推薦がなければ中止した）。
7月6日の第1回実行委員会	担当県としての考えを伝え、開催の方向で了承を得た。開催の最終判断は10月2日とし、中止判断の基準も提示した。 ※感染対策ガイドライン等の資料は事前にメールで配布。
9月	夏の第2派流行を受け、各県に出演可能かどうかのアンケート調査を実施。いずれも特に問題なしとのことだったため、大分県内での流行がなければ開催すること。
10月2日	特に大分県内での流行拡大も見られなかったため、予定通り開催とした。
10月15日	大分県教育委員会HPでの開催告知、応募フォーム、電話またはFAXでの観覧募集の開始。
11月8日まで開催後	大会当日まで大分県内で流行拡大が無かったため、開催できた。 関係者で新型コロナウイルス陽性と診断された人は出ていない。

13

図11 第62回九州地区民俗芸能大会開催にいたるまでの経緯

を、大分県教育庁文化課文化財班の高宮なつ美氏からご提供いただいた資料および私が実際に現地に赴いて見聞したことを基に、お話をさせていただきたいと思います。

には、他ブロックの開催状況を確認したり、九州各県の担当者と協議を重ね、各県の意見をうかがうことが行われていました。その後、6月下旬にブロック内の各県から例年通り民俗芸能大会への出演団体の推薦があったため、大分県の教育委員会としては感染症対策を徹底した上で開催する方向にまとまりました。そして、7月6日の第1回実行委員会で担当県として考えを伝え、開催の方向で了承を得たということです。

その時に配られた資料では、会場の入場制限など、運営側の感染対策の具体例が示されました。また、実際に現地に来られる出演団体へのお願いとして、最小限の人数で来てください、2週間前から検温を徹底してください、検温の記録を報告してください、ほかの演者と接しないよう入退場は一方通行にしてくださいなど、細かく感染対策も提示されました。

注目したいのは、こうした開催に向けたガイドライン（参考資料1、2）だけでなく、大会中止の基準も示されていたことです。9月以降に第2波が来たら、第3波が来たら、流行がまたぶり返したらどうするかを、流行していない段階で決めておくことが行われていました。また、「映像出演について」という項目も設けられました。無理をして出演団体の方々に来ていただくのではなくて、映像出演も可能ですよというかたちで、それぞれ出演団体さんに判断の余地を残すことも行われていました。このような、開催に対して前向きでありつつも冷静に中止の可能性を頭に入れておくこと、開催判断の基準を明確化すること、映像出演など例年の形式からの変化を恐れないことは、コロナ禍において民俗芸能大会を開催するうえでは重要なことだったと言えます。

こうした判断の根拠となる資料を会議の場で示すことによって、実際に開催しても良いんだ、開催しようという方向でまとまったそうです。それ以降、9月、10月、11月というように時間が経っていくわけですが、流行の拡大が見られなかったために、10月15日に教育委員会のホームページで開催が告知され、応募フォームが開設されました。その後、参加希望者とのやり取りや会場準備を行い、当日を迎えたということです。

こうした運営側からとは別に、参加者の視点から、九州地区の民俗芸能大会についてお話をさせていただきたいと思います。私も応募フォームの開設を受けて、情報を入力した後に、実行委員会から来場者へ感染対策をお願いする文書（参考資料3）と、座席番号が書かれている指定券が送られてきました。これを持って会場に赴くと、会場となる中津文化会館の入口で検温と消毒を受けてから入場します。受付では、指定券を見せて袋にまとめられた資料をもらうだけで、ペンで書くなどの作業はありませんでした。ホール内の座席もひとつおきにひもで縛っており、1席空けての使用しかできない



図12 会場受付



図13 会場入口での検温



図 14 会場の様子



図 15 代表者のインタビュー

ようになっています。図 14 は、開演後に一番後ろの席から撮った写真ですが、間隔を空けて配置されており、密にならないように対策されていることが分かります。

図 15 は、沖縄県南<sup>なんじょう</sup>城市<sup>とうま</sup>の当間の獅子舞の方々が出演されている時の写真で、出演前に代表者の方がインタビューを受けている様子です。司会者、インタビューを受ける伝承者が双方ともにフェイスガードをつけており、感染対策をしていることが分かります。この後、ステージで実際に芸能を演じる際には、図 16 のようにマスクなしで演じられていました。



図 16 舞台での実演（当間の獅子舞）

最後に、コロナ禍でもなぜ開催しようとしたのかについて、主催者の思いとして大分県教育委員会の高宮氏からいただいたメールを紹介したいと思います。

大分県教育委員会としては、万全の対策を講じてやれることはやるというスタンスでした。大会開催が、民俗芸能団体の方々にとって励みになればという思いもありました。日頃地域の文化を守り伝えてくださっている方々の活動支援になればと。

今回九州地区の民俗芸能大会が開催出来た要因のひとつとして、こうした地域の文化を守ることへの強い思いの存在を挙げることができます。しかしながら、その思いを抱きつつも、冷静に状況を判断し、慎重に協議を重ね、さまざまな対策を講じた結果、開催が実現したのだと思います。やはりコロナ禍における民俗芸能大会の開催には、熱い思いだけではだめで、まわりの理解を得るために周到に準備を進めることが必要でした。

このようにしてなんとか大会を開催することができたのですが、出演団体の中には、小中学校や勤務先からの制限があり、出演予定の伝承者が来られずに特別編成で披露される団体もありました。たとえば、熊本県阿蘇郡南小国町<sup>みなみおぐに</sup>の中原楽<sup>なかばるがく</sup>は、コロナのために小中学生とその保護者は参加できないため、高齢者、中年のメンバーだけで出演されていました。そのため保存会長さんが、実演前のインタビューの中で、今回は太鼓の役など本来子どもが担う一部の役をお見せすることが出来ず申し訳ありませんと謝罪されていたのが、強く印象に残っています。

やはりコロナ禍では、民俗芸能大会も例年どおりには開催できなかったということになります。

## 4. おわりに

長々とお話してまいりましたが、まとめさせていただきます。

まず祭りの関係者や民俗文化財の伝承者は、簡単に行事や活動を中止するのではなく、何らかの形で実施・継続するために工夫を行っているということです。今回その工夫の一端をご紹介させていただきましたが、こうした工夫の情報をみなで共有し、無形民俗文化財を未来へつなげていくために役立てていくことが必要なのだと思います。

そして今年の特徴としては、披露する場が減少した一方で、魅力を発信する場が増加したことが挙げられます。祭りが開催できない、民俗芸能大会もなくなった。けれどもデジタル技術を用いた情報発信であったり、外出自粛下での民俗文化財の活用など、新しい動きも見られました。

ただし、今回の協議会でご紹介するような、コロナ禍という新しい状況に対応し、新たな試みを実践することができた団体は、実際は少なかったと思われます。やはり無形民俗文化財の伝承者間における IT 技術・情報の格差は大きいです。時代に対応できずに苦境に陥る可能性がある、そうしたごく普通の団体の存在も忘れてはならないと思います。

以上で私の発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

## 九州地区民俗芸能大会 コロナウィルス感染症対策ガイドライン

2020. 7. 6

(2020. 10. 1 改訂)

第 62 回九州地区民俗芸能大会実行委員会

## 1. はじめに

本ガイドラインは、第 62 回九州地区民俗芸能大会（リハーサル：令和 2 年 11 月 7 日、本大会：令和 2 年 11 月 8 日、会場：中津文化会館、以下「大会」）の開催にあたり、新型コロナウイルス感染拡大予防対策として遵守すべき事項を整理し、全ての大会関係者の安全を確保し、適切に対応するために作成するものです。

## 2. 感染防止のための基本的な考え方

主催者及び施設管理責任者は、施設の特性や大会の規模・形態を十分にふまえ、施設内及びその周辺地域において主催者、出演者、大会運営に携わる委託業者（以下「委託業者」）、施設管理責任者、及び大会観覧のために施設に来場する者（以下「来場者」）への新型コロナウイルス感染拡大を防止するため、必要となる負担を考慮に入れながらも最大限の対策を講じる必要があります。

特に、①密閉②密集③密接という 3 つの条件のある場では、感染を拡大させるリスクが高いと考えられ、こうした環境の発生を極力防止するため、大会関係者が相互に感染回避に取り組むことが重要です。全ての関係者が咳エチケット、マスク着用、手洗い・手指の消毒を徹底して行うとともに、以下の具体的な対策を講じていただくよう提唱します。

## 3. 具体的な対策

## 【主催者】

## 〈大会前〉

- ・大会の企画にあたって、密集を回避する方策や密な状況を発生させない工夫の導入を検討

開場・休憩時間の延長  
 入場時のチケット確認（もぎり）の簡略化  
 入場待機列の設置  
 日時や座席の指定予約による人数調整  
 大人数での来場の制限 等

- ・特に高齢者や持病のある方が多数来場すると見込まれる場合は、感染した場合の重症化リスクが高いことから、より慎重な対応を検討
- ・関係者及び来場者の氏名及び緊急連絡先を事前に把握し名簿を作成  
 ※関係者及び来場者に氏名及び緊急連絡先の情報が必要に応じて保健所等の公的機関に提供され得ることを事前に周知

- ・関係者及び来場者に来場前の検温の実施の要請のほか、来場を控えてもらうケースや注意事項を事前に周知

《来場制限》

- i 新型コロナウイルス感染症陽性と診断された場合
- ii 来場前の検温で 37.5 度以上の発熱（または平熱比 1 度超過）
- iii 息苦しさ・強いだるさ、軽度であっても咳・咽頭痛などの症状
- iv 新型コロナウイルス感染症陽性とされた者との濃厚接触がある場合
- v 過去 14 日以内に政府から入国制限、入国後の観察期間を必要とされている国、地域等への渡航並びに当該在住者との濃厚接触がある場合
- vi マスク未着用の場合

《注意事項》

- i 常時マスクを着用し、手指消毒を徹底する
- ii 大会中の来場者同士の接触を控える
- iii 場内における会話を控える
- iv 座席のひじ掛け使用は、左右いずれかに統一

- ・接触確認アプリ COCOA を活用する場合、その旨を関係者及び来場者に事前に周知
- ・開催日 2 週間前から定期的な検温や健康記録を促し、特に個人の平熱 + 1 度以上の熱が記録された場合や、息苦しさ・強いだるさ、咳・咽頭痛などの症状が記録された場合は、必要に応じて医療機関、保健所等を受診
- ・大会会場への移動日前日に上記来場制限に該当した者は来場を控える
- ・感染対策チェック表を記入し、施設管理責任者へ提出

### 〈大会リハ・大会〉

- ・各室ごとの人数制限など、大勢の人数が滞留しないための措置を講じる
- ・パンフレット等の配布物を渡す際は手袋を着用する
- ・座席は原則として指定席にして、適切に感染予防措置がとれる席配置とする
- ・座席の最前列席は舞台前から十分な距離を取り、また、感染予防に対応した座席での対策

前後左右を空けた席配置、又は距離を置くことと同等の効果を有する措置

- ・出演団体に来場者と接触するような演出（声援を惹起する、来場者をステージに上げる、ハイタッチをする 等）は行わないように要請
- ・事前に密集状況が発生しないように余裕を持った休憩時間を設定し、トイレなどの混雑の緩和に努める
- ・機材や備品、用具等の取り扱い者を選定し、不特定者の共有を制限
- ・仕込み・リハーサル・撤去等において、十分な時間を設定し、密な空間の防止に努める
- ・来場者の入場にあたっては事前に周知した注意事項のとおり対応する
- ・注文した弁当容器以外のゴミは持ち帰る

## 資料 1-3

- ・感染が疑われる者が発生した場合、以下のとおり対応する

- |     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| i   | 速やかに別室への隔離                         |
| ii  | 対応する職員等は、マスクや手袋の着用等適切な防護対策を講じた上で対応 |
| iii | 感染者が発生した部屋の換気                      |
| iv  | 保健所に連絡し、消毒や濃厚接触者の指示を受ける            |
| v   | 感染者と接触した職員等及び来場者の氏名及び緊急連絡先を把握      |
| vi  | 症状が重篤な場合は、保健所とも相談し、医療機関へ搬送         |

- ・可能であれば接触確認アプリ COCOA を活用し関係者及び来場者の感染状況等を把握
- ・大会終了時に出口での混雑を避けるため、事前に余裕を持った退場時間を設定し、ゾーンごとの時間差での退場等の工夫

## 〈大会後〉

- ・感染が疑われる者が出た場合、保健所等の公的機関による聞き取りに協力し、必要な情報を提供
- ・個人情報の保護の観点から、来場者カードの保管（12 月末まで）には十分な対策を講ずる

## 【出演団体・委託業者】

## 〈大会前〉

- ・本ガイドライン及びこれを踏まえた現場の対応方針を、全員で共有
- ・公演の運営に必要な最小限度の人数での参加
- ・開催日 2 週間前から定期的な検温や健康記録を促し、特に個人の平熱 + 1 度以上の熱が記録された場合や、息苦しさ・強いだるさ、咳・咽頭痛などの症状が記録された場合は、必要に応じて医療機関、保健所等を受診
- ・事前に氏名及び緊急連絡先を主催者宛提出  
※上記情報が必要に応じて保健所等の公的機関へ提供され得ることを事前に理解
- ・大会会場への移動日前日に前掲来場制限に該当した者は、来場を控える。なお、前掲来場制限の i、iv、v に該当する場合、該当者の所属する団体は大会への参加を見合わせる
- ・可能であれば接触確認アプリ COCOA を活用する

## 〈大会リハ・大会〉

- ・楽屋等での 3 密回避するため、定期的な換気、ローテーションでの利用などを心がける
- ・楽屋等では使い捨ての紙皿やコップを使用
- ・主催者が注文した弁当容器以外のゴミは持ち帰る
- ・表現上困難な場合を除き原則としてマスクを着用し、出演者間で十分な間隔をとる
- ・機材や備品、用具等の取り扱い者を選定し、不特定者の共有を制限

- ・ 仕込み・リハーサル・撤去等において、十分な時間を設定し、密な空間の防止に努める
- ・ その他、稽古や仕込み・撤去等においても十分な感染防止措置を講ずる
- ・ 来場者と接触するような演出の禁止
- ・ 退館前に、使用した楽屋の清掃・消毒を行う

#### 〈大会後〉

- ・ 終了後 2 週間以内に、新型コロナウイルス感染症陽性とされた者が出た場合は、主催者に報告

#### 【施設管理責任者】

##### 〈大会前〉

- ・ 本ガイドライン及びこれを踏まえた現場の対応方針を、全員で共有
- ・ 清掃、消毒、喚起の徹底実施
- ・ 他社と共有する物品やドアノブなど手が触れる場を最低限にする工夫
- ・ 間隔を置いたスペースづくり等の工夫
- ・ 施設における感染予防対策及び感染の疑いのある者が発生した場合には速やかに連携が図れるよう、所轄の保健所との連絡体制の確立

##### 〈大会リハ・大会〉

- ・ 主催者と協力して関係者及び来場者に対して、以下について周知

- |     |                           |
|-----|---------------------------|
| i   | 社会的距離の確保の徹底               |
| ii  | 咳エチケット、マスク着用、手洗い・手指の消毒の徹底 |
| iii | 健康管理の徹底                   |
| iv  | 差別防止の徹底                   |
| v   | ガイドライン及びこれを踏まえた現場の対応方針の徹底 |

- ・ 会場内各所にアルコール消毒液を設置
- ・ 出入口は、東側出入口、西側出入口 1 か所とする。
- ・ 会場受付に飛沫防止ビニールシートを設置
- ・ 非接触型体温計による検温を実施し、37.5 度以上の発熱が認められた来場者、激しい咳等の症状が認められた来場者の入場を制限する。
- ・ 会場入口に行列が生じる場合は、最低 1.5 m の間隔を開けた整列を促す等、人が密集しない工夫
- ・ 来場者への協力要請を館内に掲示
- ・ 大会前後及び休憩中に、人が滞留しないよう、段階的な会場入り等の工夫
- ・ 退場時に来場者に対し、大会終了後 2 週間以内に感染が疑われる症状が出た場合の対処の仕方を再度周知
- ・ 来場者カードをとりまとめ、主催者に提出

**【来場者】**

**〈大会前〉**

- ・ 来場希望者は事前に氏名及び緊急連絡先を主催者宛提出  
※上記情報が必要に応じて保健所等の公的機関へ提供され得ることを事前に理解
- ・ 可能であれば接触確認アプリ COCOA を活用する

**〈大会当日〉**

- ・ 当日は、事前に周知された注意事項を守り行動し、来場制限に該当する場合は来場を控える
- ・ 入場前検査で入場制限に該当した場合、入場を控える
- ・ 座席は指定席
- ・ ゴミは持ち帰る
- ・ 出演団体の出待ちや面会等は禁止
- ・ 大会終了時に出口での混雑を避けるためゾーンごとの時間差での退場へ協力

**〈大会後〉**

- ・ 大会後 2 週間以内に、新型コロナウイルス感染症陽性と診断された場合は、主催者に報告

**【物販を希望する場合】**

- ・ 現金の取扱いをできるだけ減らすため、オンライン販売や、キャッシュレス決済を推奨
- ・ 会場内で物販を行う場合、最低 1.5m の間隔を開けての整列を要請
- ・ 物販に関わる従業員は、マスクの着用と手指消毒を徹底
- ・ ユニフォームや衣服はこまめに洗濯
- ・ 対面で販売を行う場合、アクリル板や透明ビニールカーテンにより購買者との間を遮蔽
- ・ 多くの者が触れるようなサンプル品・見本品は取り扱いわない

## 九州地区民俗芸能大会 コロナウィルス感染症対策ガイドライン（出演団体用）

2020. 9. 11

(2020. 10. 1 改訂)

第 62 回九州地区民俗芸能大会実行委員会

第 6 2 回九州地区民俗芸能大会における新型コロナウイルス感染拡大防止のため、下記のとおり対応方針を団体全員で共有して頂くようお願いいたします。

## ◎基本的な対策

- ・咳エチケットの徹底
- ・マスク着用 ※出演時は外していただいてもかまいません。
- ・手洗い、手指の消毒

## ◎大会前について

- ・公演の運営に必要な最小限度の人数での参加をお願いします。
- ・開催日 2 週間前から定期的な検温や健康記録を作成してください。
- ・可能な限り、接触確認アプリ COCOA のダウンロードをお願いします。
- ・事前に氏名及び緊急連絡先を、各県担当者を通して主催者宛提出してください。  
※上記情報は必要に応じて保健所等の公的機関へ提供いたします。ご了承ください。
- ・大会会場への移動日前日に下記に該当した方は、来場を控えてください。

## 《来場制限》

- i 新型コロナウイルス感染症陽性と診断された場合
- ii 来場前の検温で 37.5 度以上の発熱（または平熱比 1 度超過）
- iii 息苦しさ・強いだるさ、軽度であっても咳・咽頭痛などの症状
- iv 新型コロナウイルス感染症陽性とされた者との濃厚接触がある場合
- v 過去 14 日以内に政府から入国制限、入国後の観察期間を必要とされている国、地域等への渡航並びに当該在住者との濃厚接触がある場合
- vi マスク未着用の場合

※前掲来場制限の i、iv、v に該当する方が出た団体は、恐れ入りますが団体の大会への参加を見合わせていただくようお願いします。

## ◎リハーサル・大会当日について

- ・楽屋等は定期的な換気、ローテーションでの利用などをお願いします。
- ・楽屋等では使い捨ての紙皿やコップを使用してください。
- ・出演者間で十分な間隔をとるようにしてください。
- ・用具等の取扱い担当者を決め、不特定多数での共有を避けてください。
- ・来場者と接触するような演出（声援を呼びかける、来場者をステージに上げる、ハイタッチをする等）は控えてください。
- ・他団体との接触を極力避けるため、10 分間での入退場にご協力ください。
- ・来場後、急な体調不良となった場合は、速やかに大会スタッフに連絡し、出演を控えてください。無理に出演することのないようお願いします。
- ・主催者に注文した弁当容器は回収しますが、それ以外のゴミはお持ち帰りください。
- ・退館前に、使用した楽屋の清掃・消毒をお願いします。

## ◎大会後について

- ・終了後 2 週間以内に、新型コロナウイルス感染症陽性とされた方が出た場合は、速やかに各県担当者にご連絡ください。

## ご来場のみなさまへ

2020. 10. 30

第 62 回九州地区民俗芸能大会実行委員会

この度は、第 62 回九州地区民俗芸能大会の観覧をお申し込み頂き、誠にありがとうございます。会場における新型コロナウイルス感染拡大防止のため、下記のとおりご協力をお願い申し上げます。

## ◎来場前のお願い

- ・ 接触確認アプリ COCOA の活用をご検討ください。
- ・ 下記来場制限に該当した方は、恐れ入りますが来場を控えてくださいますようお願い申し上げます。

- ・ 新型コロナウイルス陽性と診断された場合
- ・ 37.5 度以上の発熱または平熱比 + 1 度以上の発熱があった場合
- ・ 息苦しさ、強いだるさ、軽度であっても咳や咽頭痛などの症状がある場合
- ・ 新型コロナウイルス感染者と濃厚接触がある場合
- ・ 過去 14 日以内に政府から入国制限、入国後の観察期間を必要とされている国、地域等への渡航並びに当該在住者との濃厚接触がある場合

## ◎会場での注意事項

- ・ マスクをご着用ください。 ※未着用の場合、入場をお断りさせていただきます。
- ・ 咳エチケットにご協力ください。
- ・ 会場入口での検温、手指の消毒にご協力ください。
- ・ 指定された座席にお座りください。
- ・ 出演団体の出待ちや、面会はお控えください。
- ・ 大声での会話や、声援はご遠慮ください。
- ・ 急に体調を崩された場合は、お近くの大会スタッフにお伝えください。
- ・ 出口での混雑を避けるため、退場はエリア毎に行いますので、ご協力ください。
- ・ ゴミは、お持ち帰りください。

## ◎大会後

- ・ 大会後 2 週間以内に新型コロナウイルス感染症陽性と診断された場合、主催者までお知らせください。

## ◎個人情報の取扱いについて

- ・ 今回ご提出頂きました個人情報は、第 62 回九州地区民俗芸能大会の入場者管理以外の目的では使用いたしません。
- ・ 大会後 2 週間以内に、大会関係者に新型コロナウイルス感染が疑われる者が出た場合、主催者は保健所等の公的機関による聴き取りに協力し、必要に応じてご提出頂いた個人情報を提供いたします。あらかじめご了承ください。

## ◎その他

- ・ 駐車場は、中津市役所横豊田町駐車場をご利用ください。（前払い 250 円）
- ・ 写真撮影は可能ですが、フラッシュ撮影、席を移動しての撮影はご遠慮ください。



# 無形文化財とコロナ禍

前原 恵美（東京文化財研究所 無形文化財研究室長）

東京文化財研究所 無形文化遺産部 無形文化財研究室の前原と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私からの話は「無形文化財とコロナ禍」と題しまして、今回の新型コロナウイルス禍（以下、「コロナ禍」）に際して、無形文化財研究の立場から行ってきた事業と、そこで気付いたことなどを、簡単にご紹介をさせていただきたいと思います。

本日のお話の構成ですが、大きく2つの観点から事業についてご報告をして、最後にまとめます。最初は「新型コロナウイルスと無形文化遺産での試み」としまして、弊所で行っています3つの事業を紹介いたします。2番目に「見える化しにくいコロナ禍影響の存在」としまして、コロナ禍の影響を調査する中で、特に気付いた点などをご報告申し上げます。3番目に短くまとめます。

## 1. 新型コロナウイルスと無形文化遺産での試み

### ウェブサイト「新型コロナウイルスと無形文化遺産」での情報発信

「新型コロナウイルスと無形文化遺産」の事業は、無形文化遺産部全体で行っている事業です。① に関しては「新型コロナウイルスと無形文化遺産」として、ホームページおよびフェイスブック（facebook）から情報発信をしています。ホームページとフェイスブックでは、掲載する情報の内容を少し変えています。ホームページでは支援情報を中心にご紹介しています。同じページから飛べるフェイスブックページには、ホームページと同じような支援情報にプラスして、新たな試みや関連情報、さらには再開情報などを掲載しています。

こういった幅広い情報の中には、もし



図1 facebook ページ「新型コロナウイルスと無形文化遺産」  
 ( <https://www.facebook.com/groups/3078551232201858> )  
 最終閲覧日 2021 年 2 月 12 日

かしたら、無形文化財研究の立場からアップロードした情報でも、無形の民俗文化財の立場の方にお役に立つ情報があるかもしれません。たとえば、「尺八吹奏における飛沫検証報告と対策」という情報をアップしています。これは、日本尺八演奏家ネットワークのホームページ (<https://www.jspn.org/>) からご覧いただける情報です。尺八は、古典芸能だけではなくて民俗芸能でも民謡の伴奏などで使われますので、公演を再開する際の、一つのエビデンスになる可能性があると思います。そういった意味で、この幅広い情報をご覧いただければありがたいと思います。

また、このような情報発信を少しずつ幅広くしていくことによって、無形文化財、無形民俗文化財の枠を超えて情報を共有し、それを活用していただく、そういった糸口が見いだせれば良いと感じています。



図2 日本尺八演奏家ネットワーク  
「尺八吹奏における飛沫検証報告と対策」  
(<https://www.jspn.org/> 飛沫検証報告)  
最終閲覧日 2021年2月12日

## 「シリーズ 無形文化遺産と新型コロナウイルスフォーラム1」の開催

次に、2番目の事業として、2020年9月25日に東京文化財研究所で開催した「シリーズ 新型コロナウイルスと無形文化遺産 フォーラム1『伝統芸能と新型コロナウイルス』」をご紹介します。

本フォーラムの特徴の一つは、「ジャンルの横断」ということにあります。具体的には、能楽と邦楽というジャンルの違いを横断したフォーラムであるということです。2つ目の特徴として「関わり方の横断」があります。これは実演家、企画制作者と、それを支える保存技術保持者という、三者の横断を試みたということです。そして、これらの方々にそれぞれの立場からコロナ禍の現状についてご報告いただき、座談会で課題を共有したのちに解決のための糸口を探りました。その記録動画は、先ほどお見せした東京文化財研究所のホームページ内より、YouTubeを経由して配信していますので、ご覧いただくことができます。無形文化財はある意味の普遍性が特徴ではありますが、そこに関わる実演家、企画制作者、保存技術保持者自身は、それぞれどこかの地域に暮らし、そこに根差しています。そういう意味では、無形文化財に関わる方たちに、全く地域との結び付きがないということではなく、必ず何らかの形で関係していると言えます。この意味で、ぜひ各地域に、こういった無形文化財に関わる方たちがいて、どのような活動をしているのかということにも、目を向けていただきたいと思います。

## 情報収集事業「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」

3番目の事業として、これは特に無形文化財に焦点化した調査・分析・発信になりますが、「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」があります。これは、古典芸能を中心とした無形文化財への影響に着目した情報収集事業です。具体的には、「関連事業の延期・中止情報」「新たな試みの情

報」「再開情報」という、3つの観点からの情報収集です。

実際には、この3つの観点以外にも幾つか項目を設けて情報収集をしています。例えば、おそらく関心が高いであろう経済的な影響についても情報収集しており、その一部は、前掲フォーラムでも公表しました。しかし、経済的な影響の推定値は、そこに表れない経済的な影響もあることを鑑みて、常に情報発信をすることには少し慎重になっているのが現状です。推定値に表れない経済的影響は、次の頁で申し上げますけれども、稽古に関する情報、あるいは芸能を支える保存技術への影響です。これらの影響は、経済的影響として

すぐに可視化するのが難しいものではありませんが、芸能にとっては保存、継承のいずれの点でも大きな影響を与えるものです。こうした「すぐには見えてこない情報」を収集するためには、Web上の情報では足りない部分が多く、聞き取り調査によるきめ細かい情報収集が必要になります。

現在、関連事業の延期・中止情報や再開関連情報等は、およそ月に1度の頻度で更新を行っています。このようにデータを、数字およびグラフで可視化することで、見えやすいコロナ禍の影響を提示しています。先ほどの東京文化財研究所のホームページからリンクを貼っていますので、是非ともご覧ください。

## 2. 見える化しにくいコロナ禍の影響

2番目の大きなトピックスとして、「見える化しにくいコロナ禍の影響」を取り上げます。

1つは実演家への影響です。たとえば、稽古の難しさがあります。稽古には、実演家同士の稽古と、愛好家への稽古、つまりお弟子さんへの稽古の2種類があります。前者は質の高い、いわゆるプロフェッショナルの技術や表現を切磋琢磨していく上では欠かせないものです。後者は、需要の拡大、あるいは普及を進めるという意味で欠かせないものになります。こうした実演家の稽古への影響は、どうしても見える化しにくいといえます。

そして、先ほども少し触れましたが、保存技術保持者への影響も生じています。芸能の実演を支えているのは、楽器や装束、衣装、大小の道具などの様々な用具です。また、それらを作るための原材料も欠かせません。それらの製作・製造技術の現状は、非

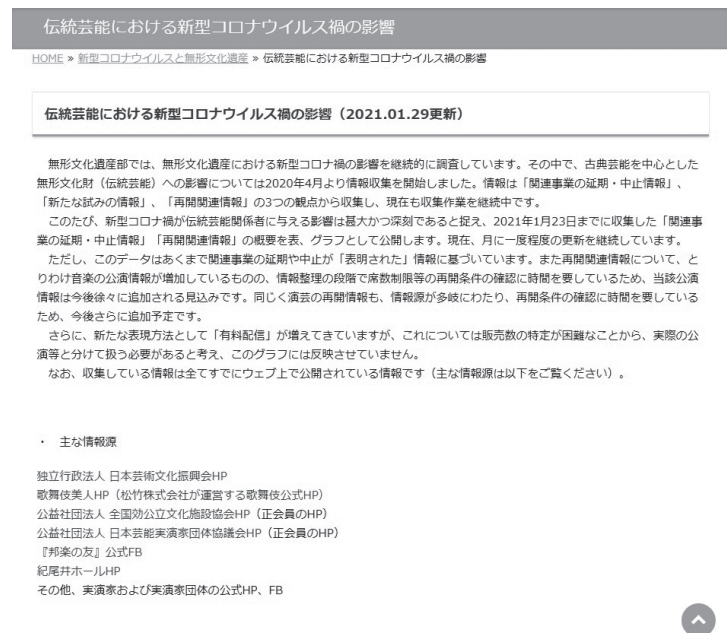


図3 ホームページ「伝統芸能における新型コロナウイルスの影響」  
(<https://www.tobunken.go.jp/chvscovid19>)  
最終閲覧日 2021年2月12日

### 2. 「見える化」しにくいコロナ禍影響の存在

#### ①実演家への影響

例) 稽古の難しさ: リモートの可能性と限界

- ・実演家どうしの稽古⇒質の高い技の追求・継承(モチベーションの維持と向上)
- ・愛好家への稽古⇒支援者・理解者の維持・拡大⇒需要の開拓、普及

#### ②保存技術保持者への影響

＝芸能の実演を支える用具・原材料の製作・製造技術＝「保存技術」

- ・楽器、装束・衣装、大小道具など、芸能の実演に欠かせないもののづくりの技術現状は見えにくい⇒芸能×保存技術×用具・原材料の再認識
- ・保存技術は、複合的な構造の中で成り立っているものも多い。

⇒保存技術が芸能(無形)と用具・原材料(有形)を繋ぐ

図4

常に見えにくい。そのことをやはりよく理解をしなければならないと思っており、芸能と保存技術、そして用具・原材料の関係を、再認識することの必要性和喫緊性を実感しているところです。

なお、保存技術というのは、複合的な構造の中で成り立っているものが多いということも付け加えておきたいと思います。たとえば、この後、滋賀県の例などが挙がるかと思いますが、国の選定保存技術に指定されている邦楽器の弦を作る技術は、無形文化財の古典芸能にも用いられますし、無形民俗文化財の民俗芸能にも用いられる。そうしたものを、一つの技術の応用で成り立たせているという構造は、ごく当たり前に見られることです。その点からも、保存技術が、民俗であれ古典であれ「無形」の芸能と、用具・原材料などの「有形」のものをつなぐ重要なキーワードになっていると思います。

### 3. まとめ—コロナ禍の無形文化財情報収集から見えてきた課題と可能性—

今回のお話をまとめさせていただきたいと思います。無形文化財に関して、コロナ禍の影響を調べ、発信していく中で見えてきたことは大きく2つありました。

1つ目は、無形文化財に関しては、とにかく基礎データが不足しているということです。たとえば、実演家に関するプロフィールや芸歴のようなもののデータはかなり収集されていると思います。その反面、その芸能が、いつ、どこで、どういう場所で、どのような客単価で、どれくらいの席数で実演されたかという、実演そのもののデータは、ほとんど整理をされてきませんでした。そのため、今回のようなコロナ禍に際して、以前どうだったのか、例年どうだったのか、それに対して今年どうなったのかというような、比較ができないのが現状です。こういった基礎データは、文化財保護の大前提となるものであろうと痛感しています。そしてこれが、無形文化財にとっての防災の基礎データにもなっていくものと考えています。

2つ目は、無形文化財に関する立場から収集しているデータではありますが、その共有を通して、古典芸能と民俗芸能の連動を感じることができるということです。これは実演家レベルでもそうですし、保存技術レベルでも影響関係があるのではないかと考えています。たとえば、演奏家あるいは俳優が、古典芸能だけではなくて民俗芸能の指導を行うということもあるでしょう。また、先ほどの邦楽器の弦のように、実演家レベルではなくて、実演を支える保存技術というレベルでの連動もあるだろうと考えています。したがって、無形文化財に関して集め、発信している情報を広く共有していただくことを起点とすれば、そこから新たな協働への着眼点が生まれ、有効に活用されるような可能性がまだまだあるのではないかと考えています。そのためのキーワードとなるのは、やはり「保存技術」というものの理解ではないかと考えています。

以上で、私からの話題提供は終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

## 第1部 報告1

# 無形文化遺産における新型コロナウイルスの影響 —滋賀県の事例—

矢田 直樹（滋賀県文化スポーツ部文化財保護課主査）

皆さんこんにちは。滋賀県の文化財保護課の矢田と申します。本日は「無形文化遺産における新型コロナウイルスの影響—滋賀県の事例—」という題で、滋賀県の事例をご報告させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

### 1. 滋賀県内の無形民俗文化財への新型コロナの影響

まず、私がコロナの問題に直面いたしました事例を、ご紹介させていただきたいと思います。滋賀県には年頭1月、2月に、五穀豊穡、村内安全を祈願する「オコナイ」という行事が県内各地で行われています。私は2020年の2月の終わりに、長浜市の<sup>かわみち</sup>川道という地域で行われているオコナイ行事を拝見させていただきに参りました。川道のオコナイは、2020年の2月27日の夕刻に餅つきをして、29日が宵宮、3月1日が本祭というように行事の日程が組まれておりました。27日の夕刻に、左の写真にあるような餅つきをする行事がありまして、この餅、おおよそ90キロあるのですが、その餅をついて鏡餅を作る、その準備に当たっている風景です。

この27日の夕刻に、総理大臣から全国の学校を一斉休校するという要請が出されました。そのため、この日の餅つきが終わって私が帰った後に地域の中で協議が持たれて、翌日からオコナイ行事は一変いたしました。例年、宵宮の日には若者が餅を担いで神社に奉納するのですが、その行事も必要最低限の人数で奉納して、神事のみが粛々と行われて、何かすごくさみしい祭りを拝見いたしました。



図1 川道のオコナイ



図2 川道のオコナイ

一夜にして、こうも盛大なお祭りの様子が変わるのかなということを印象的に覚えています。

こちらは、近江八幡市の宮内町に鎮座します日牟礼八幡宮の左義長行事です。この写真のように、各町内さまざまな飾り物を施した左義長というものを13基作りまして、各町内の青年たちが担ぎ回って地域を巡行してから、最後に八幡宮に奉納して並べて燃やすという火祭りです。この左義長祭りは、もともとは安土城の城下町の人たちが八幡町に移住してきて始められた、そういう商工関係者の祭りだとされています。こちらは3月、今年は14日、15日に開催されました。賛否両論ある中で、お祭りが開催されました。疫病退散のお祭りでもありますし、準備に相当時間をかけてされておられます。保存会、あるいは地域の皆さま、それから関わる人たちの中でも、意見がいろいろあるなかで開催されました。



図3 近江八幡の左義長祭り

その後、滋賀県は春祭りが多いのですが、表にいたしました滋賀県内の重要無形民俗文化財は、中止、延期ということになってしまいました。長浜の曳山祭りは、例年4月の13日から16日頃にかけて行われますけれども、こちらは秋に再起を期してお祭りをするということをおっしゃっておられましたが、結局なかなかコロナが収束しないということで、秋のお祭りそのものも翌年に延期ということになってしまいました。

表1 コロナ禍における滋賀県内の国指定重要無形民俗文化財

名 称	保 護 団 体	所在地	祭礼日(2020年)
長浜曳山祭の曳山行事	(公財)長浜曳山文化協会	長浜市	4月13～16日
近江湖南のサンヤレ踊り	草津のサンヤレ踊り保存協議会 小杖祭り保存会	草津市 栗東市	5月2～3日 5月4～5日
近江のケンケト祭り長刀振り	近江のケンケト祭り 長刀振り連合保存会	守山市、甲賀市、 東近江市、竜王町	5月2～5日
近江中山の芋競べ祭り	芋くらべ祭保存会	日野町	9月6日
大津祭の曳山行事	大津祭保存会	大津市	10月10・11日
三上のずいき祭	ずいき祭保存会	野洲市	10月11～12日

そのほかの春祭り、サンヤレ踊り、ケンケト祭りについても、ゴールデンウィークに行われる疫病退散のお祭りですけれども、神事だけを行って、踊りの奉納については中止ということになってしまいました。

今年のお祭りは、全国的に見てもそうだと思いますが、神事のみが行われる場合が多かったです。その一例をご紹介します。これは日野町中山という集落で行われています芋くらべ祭りです。このお祭りは、東と西の2つの地区が写真にあるような里芋を



図4 例年の芋競べ祭り

青竹にくくり付けて、その芋を両地区の境にある野神山という特別な祭場に運び上げて、そこで儀礼的にその長さを競い合う行事です。非常に珍しい行事です。今年の様子ですが、普段は若者が主に行事を担うのですが、若者は参加を見合わせました。また、芋は野神山の祭場には運び上げず、

神社境内の拝殿に芋を並べて長さだけを測ってどちらが勝ったかを計測して、神様に報告して終わりました。行事すべてをやめてしまうこともできたと思いますが、コロナの中でも、やはり年間を通じての神さん事なので、行事は中止するけれども神事だけは何とか続ける、そういう地域の皆さんの思いというのが、ここに表れているのかなと思います。



図5 コロナ禍の芋競べ祭り

## 2. 全国の無形民俗文化財への新型コロナの影響

全国的に見ましても、滋賀県だけに限らず祭りの中止ということが言われています。その実例を少しだけ紹介させていただきたいと思います。

全国山・鉾・屋台保存連合会というものがありまして、埼玉県秩父市教育委員会が事務局をされておられます。そちらから情報をご提供いただきました。表2をご覧くださいとわかりますように、全国の山・鉾・屋台行事は全て中止、神事を残して行事の部分は全て中止ということになっています。4月の緊急事態宣言を受けて、中止ということが決定されたのかなと思います。7月、8月のお祭りは、準備等もあるので3カ月前ぐらいには開催するか中止するかという決断が迫られていることが、この表を見ていただくと分かるかと思います。やはり山・鉾・屋台行事は大規模な都市祭礼であって、保存会さんだけではなくて観光政策とか交通政策とか、文化財以外の官公庁との関係や協議など、そうした中で祭りを開催するか、中止するかという、ぎりぎりの判断を迫られていたのかなと思います。個人的には京都の祇園祭の山鉾巡行の中止が、マスコミ等でも大きく取り上げられましたので、全国的なインパクトが大きくて、それに倣って小さな地域のお祭りも、どんどん中止になっていってしまったのかなと思います。

もう1つ全国的な連合会がありまして、全国民俗芸能「風流」保存・振興連合会さんからも情報提供いただきました。事務局は、香川県仲多度郡まんのう町教育委員会さんで、風流に分類されるお祭りの、国指定の保存会さんの集まりです。そちらでも、今年の祭りがどうだったかという調査がなされています。

表2 コロナ禍のユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」

月	日 程	祭行事名	府県・市町	状 況
4	4日・5日	犬山祭	愛知県犬山市	3月に中止決定
	13～16日	長浜曳山祭	滋賀県長浜市	3月に「秋季延期」を発表→6月に中止決定
	14・15日	春の高山祭	岐阜県高山市	3月に中止決定
	19・20日	古川祭	岐阜県飛騨市	3月に中止決定
5	4日・5日	日立さくらまつり	茨城県日立市	3月に祭自体の中止決定
	1日	高岡御車山祭	富山県高岡市	4月に全面中止を決定
	2・3日（ただし隔年）	知立まつり	愛知県知立市	3月に山車行事等を中止決定
	3・4日	亀崎潮干祭	愛知県半田市	3月に神事を含めすべての行事の中止決定
6	3～5日	青柏祭	石川県七尾市	4月に神事以外の中止決定
	4・5日	城端神明宮祭	富山県南砺市	4月に神事以外の中止決定
	15日に近い金～日	大垣祭	岐阜県大垣市	4月にやま行事の中止決定
	1～15日	博多祇園祭	福岡県福岡市	4月に開催見送りを決定
7	1～31日	祇園祭	京都府京都市	4月に前祭・後祭の中止決定
	6・7日	村上大祭	新潟県村上市	4月に中止を決定
	10日以降の金～日	八坂神社祇園祭	千葉県香取市	5月に山車運航及び神輿渡御を中止決定
	20・21日	土崎港曳山まつり	秋田県秋田市	4月に中止決定
8	20日過ぎの土・日	日田祇園祭	大分県日田市	4月に神事以外の中止決定
	第4土曜日を含む金～日	烏山山あげ祭	栃木県那須烏山市	4月に山あげ行事の中止決定
9	第4土曜日を含む金～日	戸畑祇園祭	福岡県北九州市	5月に全行事の中止決定
	第4土曜日と翌日の日曜	津島天王祭	愛知県津島市	6月に神輿行事以外の行事の中止決定
	1・2日	須成祭	愛知県蟹江町	6月に車楽船・神輿両行事とも中止決定
	1～3日	八戸三社大祭	青森県八戸市	4月に神事以外の中止決定
10	第1金・土	魚津たてもん祭	富山県魚津市	5月に神事以外の中止決定
	第1日曜を最終とする金～日	桑名石取祭	三重県桑名市	5月に祭車引き回しの中止決定
	14・15日	烏出神社の船山行事	三重県四日市市	5月に神事以外の中止決定
	19日・20日	花輪祭の屋台行事	秋田県鹿角市	4月に中止決定
11	24～26日	新庄まつり	山形県新庄市	5月に屋台曳行の中止決定
	7～9日	角館のお祭り	秋田県仙北市	6月にやま行事の中止決定
	9・10日	秋の高山祭	岐阜県高山市	6月に神事以外の中止決定
	第2土曜日を挟む前後3日	諏訪神社大祭	千葉県香取市	8月に山車運航の中止決定
12	第2土・日	鹿沼今宮神社祭	栃木県鹿沼市	5月に屋台行事の中止決定
	体育の日直前の土・日	大津祭	滋賀県大津市	7月に神事以外の中止決定
	第3土・日	川越氷川神社例大祭	埼玉県川越市	7月にまつりの中止決定
	23～25日	上野天神祭	三重県伊賀市	8月にだんじり巡行を中止
12	2～4日	唐津くんち	佐賀県唐津市	8月に神事以外の中止決定
	22・23日	八代妙見祭	熊本県八代市	8月に曳山行事をはじめ多くの行事の中止決定
	2・3日	秋父祭	埼玉県秩父市	9月に神事以外の中止決定

多くは中止、それから神事のみを開催したという結果が出ました。若干数団体、例年どおり開催しましたというところもありましたが、多くは中止、神事のみということになっています。結果を見ていると、何とか開催できないかという保存会さんの苦悩というか、工夫というものがアンケートから認められます。山・鉾・屋台に比べますと、来られる観光客の方とか、関わる方の人数というのは少ないとは思いますが、そういう小さいお祭りでも、やはり稽古ができないとか、子どもさんが集まらないとか、そうしたところで苦悩されておられる保存会、何とかできないかと苦悩する保存会さんの姿が、このアンケートからは見て取れました。

#### 民俗芸能「風流」保存・振興連合会

- |            |                                    |
|------------|------------------------------------|
| ・中止または神事のみ | 大多数                                |
| ・例年通り実施    | 若干あり                               |
| ・違う方法で実施   | 演目、演者の絞り込み<br>非公開、無観客<br>インターネット配信 |

図6 コロナ禍における国指定無形民俗文化財「風流」

### 3. 滋賀県内の選定保存技術への新型コロナの影響

さて、今まで祭りの話を中心にしていってまいりましたが、無形の文化遺産には、民俗技術や選定保存技術等の分野もあるので、そちらの事例についてご報告をさせていただきます。

滋賀県には、国から選定されている文化財の保存技術が4件あります。そのなかで、邦楽器原糸製造と邦楽器糸製作というものがあります。こちらは滋賀県の北部、もう少し行けば福井県という県境の地域にあります、長浜市木之本<sup>きのもと</sup>という琵琶湖の湖畔の地域でこの技術が継承されています。

邦楽器原糸製造は、繭から繊維をほぐし出して生糸にする技術です。こちらは春の蚕を使用して、6月から7月にかけてその作業をされています。秋にされることもあります。多くはこの蒸し暑い時期に糸を取る作業をされています。ここから取りました糸を数本撚り合わせて、三味線や琴などの邦楽器用の弦を作る技術が、邦楽器糸製作で木之本の集落に残っています。この写真は、その生糸を撚り合わせる駒撚りという技術の写真です。



図7 邦楽器の糸（絃）



図8 邦楽器原糸製造



図9 邦楽器糸製作

こうした邦楽器糸製作の技術は、「丸三ハシモト」という会社で技術を伝承されていますが、この会社もコロナの影響を受けました。会社の社長さんに、糸の対前年比でどれくらい減ったのかをお聞きしたものが、図10になります。社長さんにお話をうかがいますと、糸が売れるかどうかというのは、邦楽器の業界全体のバロメーターだと言われているそうです。4月は6割減ということですので、当然、演奏会、舞台公演も中止となっていましたし、生徒さんを集めてのお稽古もでき

なかったというわけです。そうした状況で、会社も社員さんをお休みさせてという状況で、経営的には大変厳しい状態でした。もともとのパイが小さくないところの中で、この減というのは非常に大きかったというようにおっしゃっておられました。11月現在でも2割減ということで、だいぶ戻ってきたとはおっしゃっておられますけれども、今なお社員さんは、休業日が1日増えている状態で、ご家族でなんとか操業しておられるということです。

そういう厳しい状況ですけれども、販売量が減ったからといって、製品の原材料となる原糸の購入量を減らすことはできないとおっしゃっておられます。やはりそこで糸の購入量を減らしてしまうと、糸を繭から取る技術も絶えてしまう可能性がある。そういう基盤の危ない状況の中で続いている技術だということです。原材料を買い支えることによって原糸製造の技術を守っていくと、そういうふうにおっしゃっておられました。

#### 邦楽器系製作

##### ・対前年比出荷本数

3月	5割減
4月	6割減
5月	4割減
6月～10月	3割～4割減
11月	2割減



図10 丸三ハシモト株式会社の対前年比出荷本数

## 4. 無形文化遺産の連鎖

現在の無形の文化遺産を取り巻く状況は、近年のなりわいの変化、あるいは暮らし方の変化によって、もともと継承が難しい状況でした。そこに、今回のコロナの問題が人々を直撃したということだと思います。伝承の基盤が極めて脆弱なところに今回のコロナですので、今後どうなっていくのか予断を許さない状況だと思います。

こういう無形の文化遺産は、連鎖によって成り立っていると私は思っています。伝統的な物を原材料から加工して、組み立てて、販売して、演奏家なり祭りの人たちが使用するという、そういう連鎖によって成り立っている。さらにそれぞれのところでは「人」がいて、それを作る、あるいは使う「技」というものがあって、作る「道具」であったり、使う「物」、そういった螺旋によって成り立っていると思います。今回この循環のまさに連鎖が断ち切られたというのが、このコロナの影響だと思います。ただでさえ、無形の文化遺産の好循環が切れそうな状態になっていたところに、今回のコロナが直撃したのだというように思います。

#### 無形文化遺産の連鎖

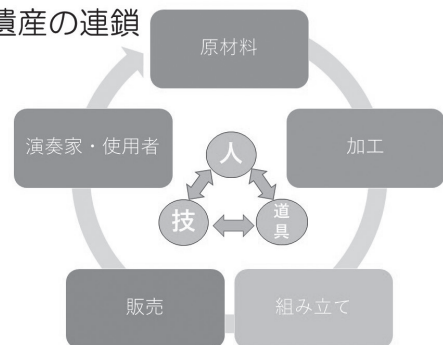


図11 無形文化遺産の連鎖

## 5. おわりに

われわれ人類は、必ずこのコロナを克服できるに違いないと私は思います。この終息後、無形の文化遺産はどうなっているのか、祭りは元通りに復活するのか、非常に心配しているところです。今こ

の状況の中でわれわれにできることは何なのか、これはなかなか有効な知見を、今われわれは持ち合わせていないのではないかと思います。私の報告の後、保存会さんからさまざまな取り組みであったり、ご苦労、あるいはその対策が提示されると思います。そういった知恵を出し合い、共有することが必要ではないかと思っています。

私の仕事、文化財の保護に関わる者として、今できることは何なのかということを考えますと、修理事業というものを積極的に出すことによって、伝統的な技術を持つ職人さんの仕事を生み出す、その結果、技術の継承を図っていくこと。またそれを使ってくださる保存会さんも、新しい道具ができたよと、それを使って祭りをするぞと次の祭りに備えていく、そういう継承の意欲を支援していくということが、われわれの今できる仕事ではないかなと思っています。

以上、簡単ではありますが、滋賀県それから全国の事例も含めてご報告をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。

## 第1部 報告2

# 疫病退散の祭礼とコロナ禍 —千葉県立中央博物館—

小林 裕美（千葉県立中央博物館歴史学研究科長）

千葉県立中央博物館の小林と申します。私からは、「疫病退散の祭礼とコロナ禍」というテーマで発表させていただきます。よろしくお願いします。

### 1. 千葉県立中央博物館の新型コロナへの対応

千葉県立中央博物館は、「房総の自然と人間」をテーマとした総合博物館です。開館は平成元（1989）年になります。この千葉県立中央博物館のコロナ禍への対応について、かいつまんでご紹介させていただきます。

日本で初めて新型コロナウイルス感染症の患者が確認されたのが1月16日だったと思いますが、その後の感染拡大に伴って中央博でも対応に迫られ、初めて講演会や子ども向けのイベントを中止したのが2月下旬のことでした。その後、まもなく3月3日に臨時休館をすることになります。緊急事態宣言が4月7日に発令され、それが1カ月たって5月4日に延長が発表されたわけですが、同時に図書館、美術館、博物館は活動を再開するという方針が示されて、中央博物館でもどのように再開したらいいかということについて、検討が始まりました。

その結果、5月26日に再開館することになり、開館前に職員全員で展示室の消毒を行う、またハンズオン展示などを片付けて、また映像資料のボタンを押せなくするなど、いろいろな制限を加えた上で開館するという運びになりました。また、たとえば質問対応ですとか講座や観察会はしばらく中止し、その後は予約制にしたり、人数に制限をかけたりしながら再開するようになりましたが、今も制限を加えた中での活動が続いています。

再開館に当たり、民俗の担当として何かできないかというように考えまして、企画したのがミニトピックス展「疫病退散—コロナ禍の収束

！ 千葉県立中央博物館のコロナ禍対応と「疫病退散」展について  
千葉県立中央博物館は「房総の自然と人間」をテーマとした総合博物館。

コロナ禍対応  
2月 下旬 講演会や子供向けイベントを中止  
3月 3日 臨時休館開始  
(4月 7日 緊急事態宣言発令)  
4月14日 在宅勤務(交代で)開始  
5月 4日 緊急事態宣言延長(図・美・博は活動再開との方針が示される)  
5月25日 緊急事態宣言解除  
5月26日 再開館(展示室の消毒・開館時間10:00・ハンズオン展示の制限等)  
5月31日 在宅勤務終了  
8月 1日 質問対応再開(予約制、人数制限)  
9月 1日 講座・観察会の一部再開(事前申し込み・人数制限等)

図1 コロナ禍に対する千葉県立中央博物館の対応

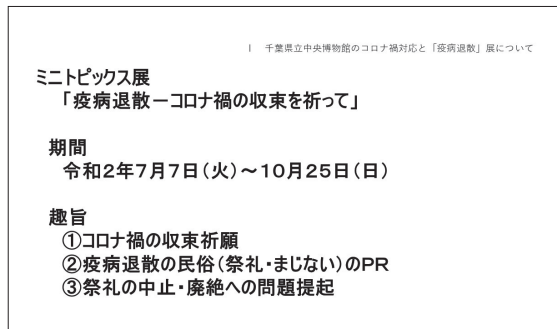


図2 ミニピックアップ展「疫病退散ーコロナ禍の収束を祈って」



図3 展示の様子

を祈って」でした。趣旨は正直に言って、コロナ禍の収束祈願という目的が第一にありました。またこの機会に、疫病退散についての民俗を多くの方に知っていただきたいということ。また、もうすでに当時、お祭りなどが自粛ということで、中止されるお祭りがどんどん出てきていましたので、コロナによる中止もそうですが、全体的にお祭りが中止や廃絶という、色んな問題が起きていることについて問題提起ができないかなという気持ちもありました。

できあがった展示は、図3のような形なんですけれど、廊下を使った小さな展示ですので、疫病よけの祭りというパートと、まじないの形という2つのパートに分けて、千葉県における疫病退散の意味を持ったお祭りや行事を紹介するという展示になりました。

## 2. 天王様のお祭り

次に、この展示でも紹介させていただいた千葉県の疫病退散のお祭りについて、概要をお話しさせていただきます。

まずご紹介するのは、天王様のお祭りについてです。天王様のお祭りは、全国的に祇園祭ですとか天王祭などの名前で行われていますが、牛頭天王<sup>ごずてんのう</sup>をお祀りすることで疫病を防いで、無病息災を祈念しようとするお祭りです。千葉県内では八坂神社のほかに須賀神社、八雲神社、八重垣神社などの社名の神社で、このようなお祭りが行われています。「祇園」ですとか「天王様のお祭り」というように呼ばれています。

祇園祭りは、都市での夏祭りが多いことに特徴があると言えると思うんですけど、こちらのスライド、これは雨の写真になってしまいましたが、香取市佐原の八坂神社のお祭りです。千葉県を代表する地方都市のお祭りで、豪華な山車の出るお祭りとして知られていますが、中心はお神輿の渡御になっています。先頭に行くのは三匹獅子です。三匹獅子は子どもが扮していますが、獅子の前には、子どもが弓と七夕の笹竹を持って先導しています。この三匹獅子の後に猿田彦が続きます。天狗と呼ばれています。それでお神輿がその後に続くわけですが、お神輿の後を締めるのは、伊勢神楽と呼ばれる小さな山車です。山車には獅子の頭を乗せて、笛と太鼓によるお囃子が付き従うという形になっています。

お神輿は小野川という町の中央を流れる川の上で、お浜下りという神事を行います。今は川の上で水を注ぐだけになっておりますが、昔は小野川に下りて神事を行ったと伝えられています。また同時に各町内から山車が曳き出されていますが、それはお神輿の行列に出合ったら、お囃子の鳴り物を止

II 千葉県での疫病退散の祭り



弓・笹・獅子



猿田彦



神楽（伊勢神楽）



神輿



浜下り



山車

香取市 佐原山車まつり（本宿の祇園祭）

図4 香取市「佐原山車まつり（本宿の祇園祭）」

めてお神輿を見送るということになっております。山車祭りで知られる佐原のお祭りも、目立たないですけれど天王様が乗る神輿の巡行が中核になっているということをお伝えしたいと思います。

次にご紹介するのは、成田市の名古屋で行われている<sup>すけさき</sup>助崎の祇園祭です。見ていただくように、お神輿が白木の造りになっています。この利根川の中流域に位置する成田市の周辺では、天王様のお神輿が白木で作られていて、これを激しくもんだり、川に入れるという、そういった巡行の仕方をしているところに特徴があります。助崎のお祭りは、助崎祇園と呼ばれて、周辺から多くの参詣客を集める暴れ神輿として大変有名でした。こちらは、夜に近くの川に入る浜下りの写真です。お神輿を先導するのは薙刀ですが、この薙刀は中世、鎌倉・室町の時代にこの地を領した大須賀氏、<sup>おおすがたねのぶ</sup>大須賀胤信の

II 千葉県での疫病退散の祭り



素木の神輿



薙刀・提灯



ハマオリ

成田市名古屋 助崎祇園祭  
写真提供：成田市下総歴史民俗資料館

図5 成田市名古屋「助崎祇園祭」

寄進だというように伝えられています。

天王様の祭礼は、都市の祭りとして特徴がありますが、周辺の農村部でも広く行われています。印旛地域では、オタチという、大きな木で作られた太刀がお神輿を先導したり、またこの木太刀そのものがお神輿の代わりに集落の中を巡行されるといった形で行われています。この木太刀は、神奈川県のおおやまあふりじんじやの大山阿夫利神社の信仰に由来するものです。ですので、天王様のお祭りにこの木太刀が使われているということは、天王様のお祭りと阿夫利神社の信仰が習合した形だというふうに考えられます。

次に紹介するのは、印西市<sup>かぐろ</sup>鹿黒の七夕の行事です。七夕の前の晩に、子どもたちがこのオタチ、木で作られた大きな太刀を持って、地区の一軒一軒を悪魔払いに回ります。昔はこの木太刀を思いきり地面にたたきつけるというのが、とても爽快で面白かったと年配の方たちはお話しになりますが、今の子どもたちはちょっと振り上げて、振り下ろすだけで、とてもおとなしく行儀が良い様子です。こうしたオタチによる悪魔払いというのは、周辺地域では祇園の八坂神社のお祭りに行われているもので、形としては全く同じです。ですので、この鹿黒のオタチ行事は阿夫利神社のお祭りと天王様のお祭りが習合していて、さらに七夕と習合しているという形になると思います。ただこの鹿黒では、地元では七夕行事として行っているの、七夕の前には子どもたちが何日も集まって、大きな笹の飾りを作ります。それでオタチによる悪魔払いを行った晩、子どもたちは八幡神社の社殿でオコモリして楽しい時間を過ごします。また翌朝には、タネイケという昔は田植えの前に稲粃を冷やした、集落の大変大事な池の跡にこの笹竹を立てます。

また千葉県天王様のお祭りの特徴として挙げられるのは、つく舞ですとかやっこ行列など、<sup>ふりゅう</sup>風流が存在することだと思います。千葉県では、全国的にも珍しいことだと思うのですが、「つく舞」としてくられる芸能が3件あり、どれも天王様のお祭りの一環として行われています。左から、野田市の野田のつく舞、真ん中が多古町の多古のしいかご舞、右が旭市の太田のエンヤーホーといわれているお祭りです。どちらも10メートルを超えるような高い柱を建てて、その上で曲芸が行われます。

野田のつく舞で柱に登るのは、ジュウジロウと呼ばれている存在です。これはカエルだと言われているのですが、見かけは大きな大蛇のように見受けられます。また、多古のしいかご舞では、猿面を被っ



オタチによる  
悪魔っぱらい



八幡神社で  
オコモリ

印西市鹿黒 七夕

II 千葉県の疫病退散の祭り



七夕飾りを  
タネイケ跡に

図6 印西市鹿黒「七夕」

たサルと呼ばれる人が柱に登ります。太田のエンヤーホーでは、これは獅子だと言われています。野田では、柱に登るのはジュウジロウですが、多古のしいかご舞のほうでは、柱の上にサルが登る前に、シカとまんじゅう、シシと呼ばれる動物たちが登場します。旭のほうでは赤獅子、青獅子、カマキリ、ミミズク、それに女鹿に牡鹿、ツルなどが次々と登場してきます。これは地舞というふうに言われていますが、どちらも舞という言葉はちょっと似つかわしくないような、ドタバタとした猥雑な内容になっています。

天王様の祭りの最後に、勝浦市鵜原の八坂神社のお祭り、通称「鵜原の大名行列」と呼ばれるお祭りを紹介したいと思います。今回は千葉県内の北寄りの地域のお祭りの紹介が多くなってしまいました

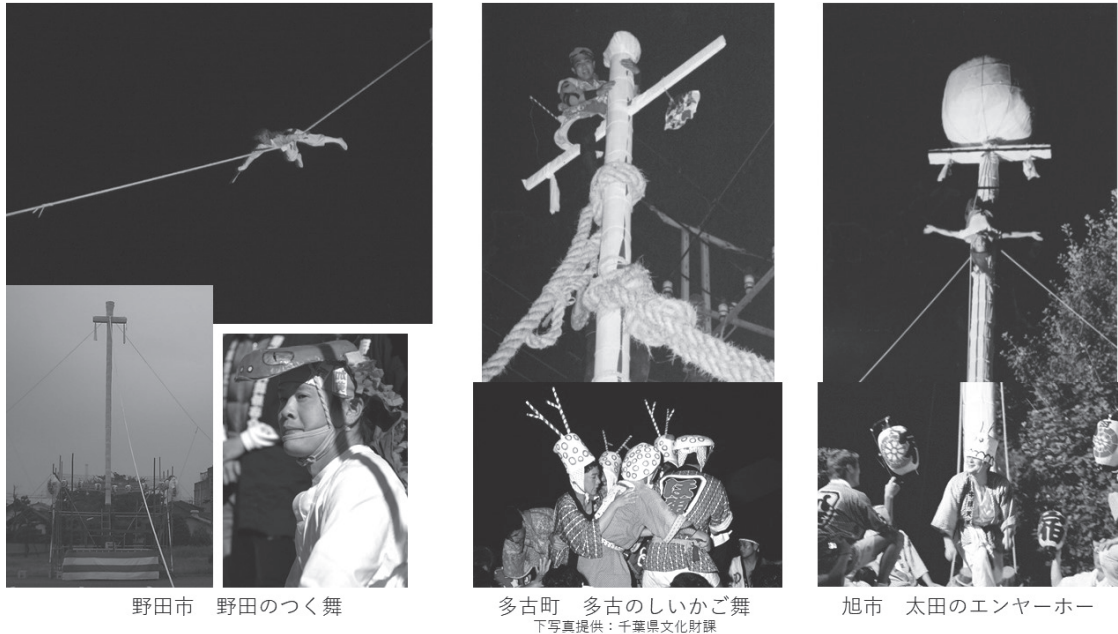


図7 千葉県内の「つく舞」



図8 勝浦市「鵜原八坂神社祭礼（鵜原の大名行列）」

が、これは勝浦市、外房のお祭りです。このお祭りでは、お神輿が海岸へお浜下りに出るのですが、そのお神輿の行列をやっこの行列が先導するところに特徴があります。先ほど紹介した成田市の助崎の祇園では、大須賀氏が寄進したとされる薙刀が先導していたと思うのですが、このやっこが持つ式具は、<sup>おおたき</sup>大多喜藩の2代藩主の<sup>ほんだ ただとも</sup>本多忠朝が奉納したという伝承があります。また行列の先頭に立つのは薙刀を持つ少女です。女の子がやっこの先頭に立っています。

面白いことにこちらの八坂神社の拝殿には、やはり大きな木の太刀が掲げられています。そこには墨書きで「奉納石尊大権現<sup>せきそんだいこんげん</sup>大天狗小天狗」と書いてあります。石尊大権現ということから、先ほどから出てきています神奈川県の大山阿夫利神社の信仰に由来する木太刀だということが分かります。昔はこの太刀を持って、神輿の巡行とは別に太刀を村境に持って行って、悪魔払いのためにお祭りの時に振ったという、そういった伝承を聞くことができます。ですので、この大名行列、やっこを伴う鵜原の八坂神社の祭礼でも、天王様の祭礼と石尊様、大山阿夫利神社の信仰の習合の形を見ることができます。千葉県では大山阿夫利神社の信仰が、だいぶ大きな影響を与えていたのだということが分かります。

### 3. 大杉様のお祭り

ここまでが天王様のお祭りのご紹介ですが、これからご紹介するのは大杉様のお祭りです。天王様のお祭りは全国的な分布があるものですが、大杉様のお祭りはかなり分布が限定的なものです。信仰の中心になるのが利根川を挟んだ茨城県側の<sup>いなしきしあば</sup>稲敷市阿波の大杉神社です。ここは「あんばさま」とも呼ばれて、航海の安全、それと疫病退散の神様として信仰されてきました。天狗がその大杉様の眷属として信仰されていますので、皆さんご存じの金毘羅信仰に似たような形が見られる、そういったものです。大杉様の信仰は利根川の中下流域を中心として関東地方の東側、あとは東北地方の太平洋岸に分布しているといわれています。信仰の中心になっている利根川の中流域では、春先に天狗のお面を持って、または天狗のお面を乗せた神輿などを巡行して、悪魔払いを行うという行事が現在で



野田市木間ヶ瀬 天狗廻り



野田市船形下 春祈禱



図9 野田市木間ヶ瀬「天狗廻り」、野田市船形下「春祈禱」

も各地で行われています。

これは野田市の木間ヶ瀬の出洲というところの天狗廻りの写真です。元旦の朝、天狗面を持って、各家々を悪魔払いに回るといふ行事が行われています。

こちらは同じ野田市の中でも、船形下というところで3月下旬に行われている春祈祷です。ここでは大きな天狗の人形を担いで、村を一軒一軒回ったというように伝えられています。天狗が傷んでしまっただけからは、天狗様を持ち出すことはなく、代参で受けてきたお札だけを持って悪魔払いに歩くという形になっていましたが、最近は天狗を修復してまた天狗を担ぐようになったという情報も頂いております。また家々を廻るだけでなく、村境にもお札を立てて悪魔を払うという、そういったことも行われています。

これは印西市の浦部というところの初ばやしの行事です。こちらでは1月の終わりに、ご神体を入れた背負い神輿といわれる筈のようなものを若い男性が背負って、またそれを万灯が先導し、笛と太鼓のお囃子を伴って村を回るといった行事です。お宿という家がかつては十数軒あって、そこを2日かけて回ったというふうにいわれています。そのお宿に入る時には、この背負い神輿を背負った人をお神輿のように、胴上げするかたちで担いで、そのまま頭から担ぎ込むといった、そんな風習が行われていました。今はお宿がなくなって、各地の集会所で行うようになっていますが、集会所に変わっても、この背負い神輿を担いだ人の胴上げのようなことは行われているということです。



印西市浦部 初ばやし

写真提供：印西市印旛歴史民俗資料館

図 10 印西市浦部「初ばやし」

行事の名前を初ばやしというように、お囃子にも意味があったと考えられています。この周辺の地域では、初ばやしのほかに二番ばやしといって、5月頃に再度同じような行事を行うこともありました。

それで、実はここ浦部の場合だけなのですが、担ぐご神体が実は大杉様ではなくて、大山阿夫利神社だというように伝えているんです。これは周辺の地域の中でもここだけの特徴で、大杉様と大山阿夫利神社の信仰が習合している形だということが分かります。

春先のお祭りだけではなく、夏のお神輿の渡御の祭礼が天王様ではなくて、大杉様だという地域も千葉県には多くあります。これは、野田市内の各地のお神輿の祭りの様子ですが、野田だけではなく、特に千葉県の北西部の東葛地域にはかなり多くみられます。現在はあまり担がれないのですが、昔は舟の形をした舟神輿という神輿を担いだ地域も多くあったということで、今でも舟神輿を大事に保管している例を見ることができます。

大杉様の信仰は江戸時代に広がりまして、あんば囃子というお囃子がありまして、「あんば大杉大明神、悪魔を払ってヨーイヤサ」という囃子詞と共に伝播したというように言われています。ですので、大杉様のお祭りという形は取らなくても、あんば囃子ですとか、悪魔払いの囃子詞がいろいろな



図 11 野田市 各地の大杉様



図 12 成田市成田「おどり花見」

形で伝承されている例も見ることができます。

こちらは成田の門前町で4月3日に行われている、おどり花見という行事です。女の方たちが門前町の神仏と新勝寺を巡拝して町の平安を祈るという行事です。それぞれの巡拝先でみろく踊りという踊りを踊るのですが、最後に踊り手の皆で、先ほどの悪魔払いの囃子詞、「あんば大杉大明神、悪魔を払ってヨーイヤサ」という、この囃子詞を全員で唱えるといった、そういった様子を見ることができます。

#### 4. さまざまな疫病退散のお祭り

今までご紹介した天王様のお祭りとお杉様のお祭りは、千葉県を代表する疫病退散のお祭りだと思うのですが、そのほかにもさまざまな疫病退散のお祭りを見ることができます。

こちらは市原市椎津<sup>しいづ</sup>の「カラダミ」と呼ばれる行事です。全国的に見ても類例がほとんど見当たらない、珍しい行事だと言えると思います。新盆の家から造花ですとかお盆のちょうちんを集めて、それで万灯を飾り立て、にぎやかに囃しながら夜の町を引いて歩きます。また生きた人間を入れた棺箱を担いだ、仮の葬式を出したりもします。途中、盆踊りをやっている櫓の上にこの棺箱を据えて、乞食坊主による読経が行われたり、棺から中の人が出して見物人を喜ばせるといった、そんな趣向も行われています。この祭りも、行わないと疫病がはやるといわれまして、先祖供養と共に疫病退散の意味も伝えられているお祭りです。

またこれは、香取市<sup>やまぐらだいじん</sup>の山倉大神と呼ばれる神社で行われている鮭祭りという行事です。12月の第1日曜日に鮭を神前に供えて、皆で直会を楽しむといった行事なのですが、この時に鮭の切り身で作られた護符が参詣者に配られます。無病息災、疫病退散にご利益があると言われていまして、かつては東京都内など、かなり遠方からも多くの参詣者があったそうです。鮭の切り身の護符のほかに、黒焼きの護符も作られています。これはお祭りの日に限らず、通年の配布が行われているようです。



市原市椎津 カラダミ

図 13 市原市椎津「カラダミ」



香取市 山倉の鮭まつり



護符

図 14 香取市「山倉の鮭まつり」と当日に配られる護符

そのほかに、村相撲も各地で行われているのですが、このお相撲にも疫病退散の願いが込められていました。左は成田市の大袋の県神社で行われている施餓鬼相撲です。8月24日の<sup>うらぼん</sup>盂蘭盆と呼ばれる日の早朝に行われています。これは1度行わなかったら、疫病がはやったという言われていまして、それから戦争中も1度も絶やさずに行っていると聞いた行事です。右側は、芝山町の<sup>ひしだ</sup>菱田の鹿島神社で、やはり8月24日に行われているお相撲です。この鹿島神社そのものが、疫病が流行したときに勧請したといわれておりまして、相撲の風に吹かれると無病息災といった、そういう伝承がありました。

獅子舞も、忘れてはいけない疫病退散の意味のある芸能だと思います。まずは三匹獅子舞です。これは3匹の獅子をジジ、セナ、カカですとか、大獅子、中獅子、雌獅子とか、呼び方はさまざまです



成田市大袋「施餓鬼相撲」

芝山町菱田鹿島神社「奉納相撲」



各地の相撲

図 15 各地の相撲

けれど、年長の獅子と年の若い獅子の2匹の雄の獅子と、1匹の雌の獅子が、お腹に付けた小さな太鼓を鳴らしながら舞うものです。また、こちらは獅子神楽とも呼ばれますが、2人が1匹の獅子に入って舞う獅子舞も伝承されています。千葉県にはこの獅子神楽と三匹獅子舞が、地域を分けて各地に分布しています。さらに、<sup>そうさしにぐみ</sup>匠瑳市仁組の獅子舞のように、梯子の上で芸能を舞ったり、いろいろ芝居仕立ての獅子舞も伝承されています。こういった多種多様な獅子舞が伝承されているのも千葉県の特徴と言えます。



図 16 各地の獅子舞

## 5. コロナ禍の疫病退散のお祭り

さて、このようにいろいろな疫病退散のお祭りが今まで行われてきているわけですが、コロナ禍で開催された行事は、成田のおどり花見だけだったというように聞いています。おどり花見については、巡拝の人数を15名から5名に減らしたものの、一応全ての神仏を回って、その神仏を褒めたたえる歌を歌ったと聞いています。またみろくの踊りですが、これは巡拝先それぞれで踊ることはできず、最後に1度だけ踊ったとお聞きしました。ですが、少なくとも行事そのもの自体は行ったとお聞きしているのですが、ほかの祭りや芸能はすべて中止を余儀なくされたということで、疫病退散のお祭りがみな中止という皮肉なことになっております。

祭礼で生まれる非日常のパワーが疫病を払うという考え方があると思うのですが、そういった考え方は今後通用しなくなってしまうのだろうか、そんなふうにも考えざるを得ないなと思うところです。

ただ、非日常のお祭りには人々をつなぐ力がある。また祭りをを行う余裕と遊びの精神がかけがえないものだという考えも、共通で理解されていると思います。こうしたことは、地域を守る力になるものだということで、大切にお祭りを今後も守り伝えていこうと努力をされている方々がいらっしやることも、また確かなことだと思います。

疫病退散というお祭りの意味、お祭りで疫病が払えるといった考え方は、なかなかみなで共有する

のは難しいかもしれません。そうした祭りの意味の問い直しや、祭りの再編が行われても、コロナ終息後はお祭りが別の意味を持って復活するということを、皆さんと共に願いたいと思います。

まとまりませんが、私の発表をこれで終わりにさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

## 第1部 報告3

# 観光の島におけるコロナ禍 —山口県周防大島の無形民俗文化財・資料館— 高木 泰伸（周防大島文化交流センター・宮本常一記念館学芸員）

山口県<sup>すおうおおしま</sup>周防大島町教育委員会 宮本常一記念館に勤務しております、高木泰伸と申します。今回は「観光の島におけるコロナ禍—山口県周防大島の無形民俗文化財・資料館—」と題して、報告させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

今回の報告では、まず、周防大島での年中行事の今年度の実施状況、特に山口県指定無形民俗文化財の「久賀<sup>くか</sup>のなむでん踊」についてご報告いたします。2点目といたしましては、新型コロナウイルス感染症の流行に対する宮本常一記念館の対応をご紹介させていただきたいと思います。特にこの8月から開始しました動画配信「宮本常一チャンネル」の開設と、その後の運用状況についてお話をさせていただきます。

### 1. 山口県周防大島町の概説

周防大島町は、瀬戸内海の西部、広島県・愛媛県と海で県境を接する位置にあります。江戸時代の中後期から人口が増加いたしまして、出稼ぎの風習を生み出しました。長州大工と呼ばれる大工集団が四国へ渡りまして、多くの仕事を残しています。また明治以降はハワイ移民などを多く輩出した地域としても知られており、瀬戸内海でも有数の出稼ぎ地域と言えるかと思います。現在の人口が15,328人。高齢化率は50%を超えていまして、人口減少、少子高齢化というのが町の課題です。こうした状況は無形の文化財の伝承にも大きな影響を及ぼしています。主要産業は農業で言えばみかん、また漁業も盛んな地域です。そして近年では観光振興に力を入れていまして、交流人口100万人を達成したところでもあります。

こちらが周防大島の拡大地図です。今回の報告でご紹介する久賀のなむでん踊は、こちら久賀地区で伝承されています。そして私が勤務する宮本常一記念館はこちらです。周防大島町では、高齢化の課題はあるのですが、非常に元気なお年寄りも多くて、生活文化の保有者、あるいは祭祀、それから生活技術に関する知識をお持ちの方もたくさんいらっしゃいます。一方で少子化の影響といたしましては、伝統文化の継承者、この確保が大きな課題となっています。



江戸後期から人口増、明治期以降はハイ移民などを輩出した出稼ぎ地域  
人口:1万5,328人(R2.11現在)、高齢化率50%超(人口減少、少子高齢化)、観光振興

図1 周防大島町の位置



図2 周防大島町の地図

## 2. コロナ禍における周防大島での年中心事の実施状況

今年のコロナ禍の影響ですが、先ほども申し上げましたように観光産業に力を入れて、交流人口100万人を達成したところでして、例年ですと非常に観光施設もにぎわうのですが、ひっそりとする、あるいはもう休館を強いられるというところがたくさんありました。宮本常一記念館も一時休館いたしました。そして例年ですと8月のお盆の時期というのは、帰省客で大変にぎわうのですが、これほどひっそりしたお盆はなかったという程、島がお盆とは思えないような空気に包まれていました。

周防大島は、昔よりは少なくなったとは言われつつも、多くの民俗行事が今も残っています。図3は久賀の八田八幡宮の秋祭りです。多くの人が参加して、地元の言葉で言えば神輿を「たぶる」というようなことをします。これに合わせて帰省される方もたくさんいらっしゃいます。図4は安下庄の盆踊りです。夏の花火大会と一緒に行われる盆踊り行事で、これを楽しみに帰省される方、あるいは観光客の方もたくさんいらっしゃいます。こういった行事も神事のみを行う、あるいは中止にするということで、縮小されています。

そうした中で、山口県指定無形民俗文化財「久賀のなむでん踊」がどのような活動をされたのかをご紹介します。

久賀のなむでん踊は、周防大島の久賀地区に伝承される虫送り行事です。半夏はんげの翌日頃に行われる稲の害虫を退散させる行事で、近年では大漁祈願あるいは交通安全、家内安全など、また農業におけるみかんの虫の退散など、その時々暮らし、産業のあり方を反映したさまざまな願いが込められ、奉納されています。



図3 久賀・八田八幡宮の秋祭り



図4 安下庄の盆踊り (撮影: 陳文卓)

このなむでん踊は、江戸時代文化年間（1804-1818）に、地元寺院の僧侶が整備したことが起源とされています。もちろんそれ以前にも虫送り行事はあったというように推察されますが、この文化年間の整理によって歌詞のない踊り、風流踊りを伴って芸能化されたものとして今日に伝わっています。

また、昭和 49（1974）年に山口県指定無形文化財、51（1976）年に山口県指定無形民俗文化財となりました。詳細につきましては山口県のホームページ、あるいは『久賀のなむでん踊り』という報告書が出されていますので、そちらを見ていただければと思います。

この昭和 51（1976）年の指定時に保存会、後援会が設置されてから、子どもの部が設置され、伝承教室が実施されていました。しかし平成 19（2007）年に、指導者の高齢化などの理由によって一時休会されていました。それが平成 27（2015）年に伝承教室の経験者を中心にして、復活されました。写真は復活後に奉納された時の写真になります。

奉納箇所は時代によって変わりますが、昨年まではおおむね 4 カ所で奉納されていました。子どもたちも参加して、4 カ所での奉納が終わった後の施餓鬼供養、それから実盛人形を海に流すというような構成で、できるだけ復活後も昔のままを継承しながら実施されています。



図 5 山口県指定無形民俗文化財「久賀のなむでん踊」



図 6



図 7



図 8



図 9



図 10 令和 2 年の「久賀のなむでん踊」の実施状況



図 11 令和 2 年の「久賀のなむでん踊」の実施状況



図 12 令和 2 年の「久賀のなむでん踊」の実施状況

しかし本年は、新型コロナウイルス感染症の影響で、子どもたちの練習・参加が中止され、<sup>きゅうおくじ</sup>久屋寺での入魂式 1 カ所だけの奉納となりました。そしてこのお寺内での施餓鬼供養が無観客で実施されました。ただし報道機関などは参加されまして、新聞社、それからケーブルテレビ、町広報の方には参列を促して、こうして実施されていることを皆さんに知っていただこうとされていました。また、口上の中にも「コロナウイルスの退散」というような文言を入れて舞われるなど、疫病退散の仏事が行われました。直会も縮小して実施されたようで、例年ですとオードブルを囲んだりしながら酒を酌み交わすのですが、膳での会食にされたというように聞いています。

やはりこういう時期での奉納となりましたので、報道機関の反響は非常に大きかったと言えるかと思います。たとえば、町広報の 7 月号ではなむでん踊りが表紙を飾りました。また、新聞記事では実施が大きく取り上げられたほか、後日、中国新聞はカラーで保存会の藤井俊司会長の思いを伝える記事を掲載していました。

この報告に合わせて、保存会長さんに少しお話をうかがいました。やはり、町内あるいは周辺自治体に感染者が発生した場合には即刻中止ということで、ぎりぎりまで開催を慎重に検討されていたそ



図 13 広報すおう大島

うです。それから今年は、子どもたちの参加は中止というようにしたけれども、やっぱり参加したいという子どもさんもいたので、非常に残念だったとおっしゃっていました。マスコミを入れるというのがかなり特徴的かと思うのですが、それはやっぱり多くの人に、こういった行事があることを知ってもらうため。またウイルス退散とか、医療関係者の方への感謝を込めてというような、そういった思いも伝わればということをおっしゃっていました。また、報道機関を通して新聞に載ることで、あるいはテレビで放送されることで、踊りにはこういう意味があるのだということ子どもたちにわかってもらう、子どもたちの関心を促したいという思いがあったということです。それから次が非常に重要なポイントなんですけれど、一時休会を挟まれているということで、1度やめたらなかなか復活が難しいという思いが、会長さんの中でもあったようです。今年休むと来年が大変になる、人が集まらなくなるという懸念があったので、規模を縮小してでもやはり実施したい、そしてその実施状況を多くの方に知っていただきたいという思いがあったということです。来年は子どももぜひ参加してもらいたいというふうにおっしゃっていました。ちなみに無観客でやられて、地域の方が少し見に来られたら仕方ないなと思ったんですけれども、そこはかなり自粛されていたそうです。一方で花代（寄付金）が多く寄せられたのも、この行事に対する期待の表れだというふうにおっしゃっていました。

### 3. コロナ禍での宮本常一記念館の活動

次に、宮本常一記念館が開始いたしました動画配信「宮本常一チャンネル」について報告をさせていただきます。

宮本常一記念館は、正式名称を周防大島文化交流センターと言います。2004年の5月に開館いたしまして、民俗学者の宮本常一関係資料、それから周防大島東部の民具などを収蔵、展示しています。またそういった民具を活用して、体験学習も定期的の実施しています。



図 14 宮本常一記念館（周防大島文化交流センター）



図 15 展示



図 16 展示

図 17 が、You Tube の宮本常一チャンネルのトップページになります。宮本常一記念館は、年間の入場者数が例年ですと 5,000 人程度の小さな資料館です。しかしながら、民俗学者の宮本常一が全国各地で収集した資料をほぼ全て収蔵していることから、多くの関心を集めて全国各地あるいは世界中から来館者があります。ところが今回の新型コロナウイルス感染症の影響で、大体 3 月から 6 月の初旬まで休館、来館の自粛をお願いいたしました。そうしたこともありまして、入館者数が例年比で言えば、おそらく 3 割程度は減になります。

周防大島を中心とした瀬戸内海、日本の生活文化を伝えるという機能が著しく低下していることは間違いないと思ひまして、動画配信に非常に強い、白木半島地区の集落支援委員をされている榮大吾



図 17 宮本常一チャンネル



図 18 宮本常一チャンネルのコンテンツ

さんという方に相談しまして、ぜひ動画配信をやりましょうということで、スタートいたしました。令和2（2020）年の8月7日に配信を開始いたしまして、撮影は大体毎週2時間、1本が5分から15分程度ぐらいの動画を、3回分から6回分ぐらいは毎回撮影し、毎週3本の動画を配信するペースです。現在までちょうど50本の動画をアップしてまして、チャンネル登録者数は705人、総再生回数は11,880回を記録しています。これは令和2（2020）年の11月20日段階ですので、3カ月ちょっと後の数字になります。

動画の内容ですが、宮本常一記念館内の収蔵品の紹介、それから町内にはいろいろな資料館がありますので、そういった歴史民俗系の資料館を紹介する動画。それから「島あるき」と題して、宮本常一が撮った写真の撮影地を歩く、あるいは文化財を探访するというので、時には地元の方にご案内をいただきながら撮影をしています。そのほかにもいろいろな対談や、本館に関わる書籍の紹介、民具を使った体験の動画、ほかにもいろいろコンテンツはあるのですが、多種多様なものを今のところは50本ぐらい配信しているところです。

現在は、言ってしまうと特定少数の人に見ていただいている状況なので、反響は非常に好意的です。宮本常一の魅力を再確認したとか、周防大島に行ってみたくなったというようなコメント、それから地元こんな所があったのかというような、地元の方の反響もあります。民具の利用についての思い出を、この動画の配信を見たからということでお話しいただいたりすることもあります。逆にこちらから、どのような使い方をしていましたかと投げかけたら、後日資料館に来館いただいて、地元の方が教えてくださいというような双方向のやりとりがあったりします。そのほかにも、「故郷の風景を見ることができた。自分はもうなかなか帰ることができないけれども」というようなコメントを頂いたり、「懐かしかった」、それから「おじいちゃん、おばあちゃんのルーツの場所を動画配信で見ていたんで、状況が落ち着けばまた訪ねてみたい」というような、そういった声も寄せられたりしまして、思った以上に、この動画配信に反響があったことに、実際やってみて驚いているところです。

#### 4. おわりに

最後に報告のまとめを行いたいと思います。ぎりぎりのところで続けられている伝統行事、これをどういうふうにつけていくかの工夫が、今後ますます必要になっていくと感じました。それとも関連するのですが、情報をどのように発信して伝えていくか、そういうことも一つ課題になるかと思っています。宮本常一記念館が配信しているYou Tubeチャンネル「宮本常一チャンネル」では、こういった無形の文化財の情報もどんどんと提供できたらなと、コンテンツの一つにしていきながら、地域の方を盛り上げていけたらなと思っております。

それに関連してなんですけれども、地域の資料館・博物館、これも入館者数の人数だけでなく、やはりいろんな利用基準、あるいはどういうふうに使われているかの評価の検討も必要なのかなと思います。

そして、やはり周防大島のファン、今風の言葉で言えば関係人口というのを増やす試みをこれまで工夫しながら進めてきていました。それをどういうふうにつなぎ留めていくのか、その工夫も必要だと思います。やはり人と直接触れ合うことがなかなか難しくなっている現状ですので、人の交流を持続させながら、生活文化の伝承活動が続けていく工夫が本当に必要になってくると感じています。

新型コロナウイルス感染症の対策で、いろいろな工夫、地域の方とのたくさんの情報交換、それが

今後もより必要になってくると思います。資料館として、また文化財の担当者として、皆さんと一緒に情報を共有しながら、新たな対策を立てていけたらなと思っています。

本日はどうもありがとうございました。

## 第2部 報告1

# 大償神楽の伝承地外在住者に対する 「能動的な」演者獲得の試み — 「通い神楽」の実践から —

吉田 真彦（花巻市地域おこし研究所班員）

みなさんはじめまして。岩手県花巻市地域おこし研究所の吉田と申します。私からは、岩手県花巻市の大償神楽<sup>おおつぐない</sup>で令和元年に行った、「通い神楽」の取り組みを報告いたします。

本日の報告内容です。最初に私と大償神楽の関わり、および活動が続ける中で感じた問題意識について。次に、伝承地外在住者へ演者としての活動機会を創出する仕組みである「通い神楽」の実践について。最後に、これらの取り組みがコロナ禍における民俗芸能活動について、どのような示唆を与えたのか報告いたします。

### 1. 私と大償神楽の関わり、そして危機感

#### 大償神楽の概要と伝承者不足

それでは第1章「私と大償神楽の関わり、そして危機感」です。最初に自己紹介をします。私は1982年生まれで、現在38歳です。現在は岩手県花巻市役所に勤務しています。同時に、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程にも在学し、現在は卒業に向けた修士論文の執筆中です。そして岩手県花巻市大<sup>おおはさま</sup>迫町<sup>うちかわめ</sup>内川目地区に伝承される大償神楽で、主に舞手として活動しています。

神楽を始めたのは小学4年生です。私の父も大償神楽の舞手で、ある日稽古に連れて行かれたその日が、私の演者活動の始まりです。一番左の写真が中学2年生の頃です。中学卒業後、学業専念のために高校・大学の間は、神楽から離れましたが、花巻市役所への就職決定後、活動を再開しました。一番右の写真は大償神楽で最初に習う三番叟という演目ですが、公演等ではよくこの舞を舞っています。

大償神楽は、花巻市大迫町の内川目地区に500年以上伝承されており、山伏神楽に分類されます。早池峰神楽<sup>はやちね</sup>という名称は、同じく内川目地区に伝承される<sup>たけ</sup>岳神楽と大償神楽を2つ合わせた総称です。起源は、同地区内にある早池峰山で修行した修験山伏の祈祷の舞といわれ、演目の中には古事記や日本書紀に記される八百万の神の神話や、鎌倉時代の武士の活躍、笑いの要素がある狂言など約40演目が伝承されています。

## ～自己紹介～

- ・ 1982年1月30生まれ（38歳、もうすぐ39歳。）
- ・ 岩手県花巻市役所勤務（16年目）  
プラス、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程で勉強中！
- ・ 花巻市大迫町内川目地区に伝承される早池峰神楽（大償神楽）に取り組む。
- ・ 芸歴：小学4年生から大償神楽の稽古を始める。  
中学校卒業後、学業専念のために活動中断（高校3年+大学4年）  
中断の7年間は「神楽を続けるため」の学業専念 → 花巻市役所へ就職  
復帰後16年間神楽の舞を中心に大償神楽で活動

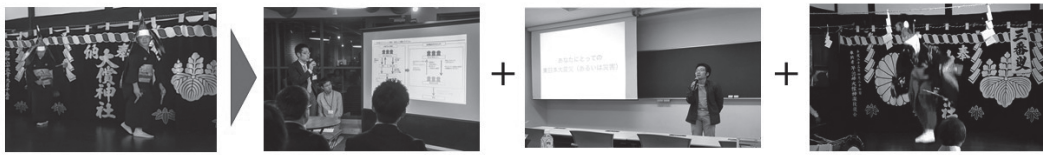


図1 自己紹介



図2

早池峰神楽では、神様が獅子頭を象った権現様を仮の姿として現れるとされ、神楽の最後はこの権現様をかぶって舞う、権現舞という舞で締めくくります。早池峰神楽は国重要無形民俗文化財に指定、ユネスコ世界無形文化遺産に登録されており、大償神社での祭礼行事をはじめ、さまざまな場面で年間40回程度の公演を実施しています。

大償神楽の写真を見ていただこうと思います。一番左が権現様と権現舞、中央は大償神社の外観と内部、右が舞です。右上の舞「天照五穀<sup>あまてらすごく</sup>」は天照大神が主役の舞で、2016年の希望郷いわて国体開催時に、現在の上皇陛下、上皇后陛下の御前で披露した舞でもあります。右下の舞は源義経と鞍馬天狗の戦いが舞となった「鞍馬」という舞で、人気のある演目です。

大償神楽の芸を伝承する大償神楽保存会は、現在18名の会員がいますが、そのうち12名は60歳以上です。最年長は91歳でなお現役ですが、若手は少なく、20代、30代は合わせて4名と、多く

の民俗芸能と同様、後継者不足は長年の課題です。大償神楽の後継者育成活動は、大償集落とその管内の小学校の生徒で、神楽をやりたい子どもに毎週1回の稽古を行い、地区行事等で成果を披露するというものです。しかし人口減少、少子化が進み、管内の小学校は今年度で閉校が決まりました。このほか、30年ほど前には大償地区の女性にも舞ってもらうことや、首都圏の大学生、他の芸能集団在籍者等の希望者にも稽古をつけるなどの取り組みもしていました。後者の取り組みからは2名が移住し、活動した時期もありましたが、今は大償地区および近隣地区の在住者、そして大償地区にゆかりある者だけが保存会員となっています。このため、今の60代が70代になる10年後、80代になる20年後を考えると、今後の演者獲得への漠然とした危機感が私にはありました。

### 花巻市地域おこし研究所の設立

そんな中、花巻市は慶應義塾大学 SFC 研究所と連携協定を結び、市の地域課題解決についてのプロジェクトを立案し、自らが先頭に立って実行する人材を育成するための「花巻市地域おこし研究所」が設立されました。この活動に私も参加させていただくこととなった際、花巻市には100を超える民俗芸能団体があり、その多くが後継者育成を課題としていることもあり、民俗芸能の演者不足の解決をテーマに研究を始めました。

### ～花巻市地域おこし研究所の設立～

- ・平成30年7月、慶應義塾大学SFC（湘南藤沢キャンパス）研究所と花巻市の間に連携協定締結  
→同年8月「花巻市地域おこし研究所」設立

- ・花巻市の地域課題解決のため、職員がリーダーとなりプロジェクトの立案・実行に関する研究による「高度人材の育成」を行う機関

- ・当職も研究生として参加  
→「民俗芸能の演者不足」の解決を研究テーマに設定



図3 花巻市地域おこし研究所の設立

これが地域おこし研究所の活動スキームです。第1期は平成30（2018）年度が初年度であり、課題解決の仕組みを構築・検証し、開発した課題解決の仕組みを3年間で事業化するという流れになっています。この間、慶應義塾大学 SFC の先生の指導を受けながら、構築したプロジェクトが市の課題解決に資する成果を上げられる根拠を積み上げていきます。

最初に、民俗芸能の演者不足を招く原因について、研究所の活動の中で掘り下げました。一般に農林漁業から勤めへの働き方の変化、少子化、若年層の地域外への流出などが後継者不足の要因といわれていますが、これらは社会全体の課題でもあり、民俗芸能団体の活動による解決は困難です。そうした視点で先行研究を見ていくと、伝承される地区の住民だけを演者とする仕組みだけでは限界があ

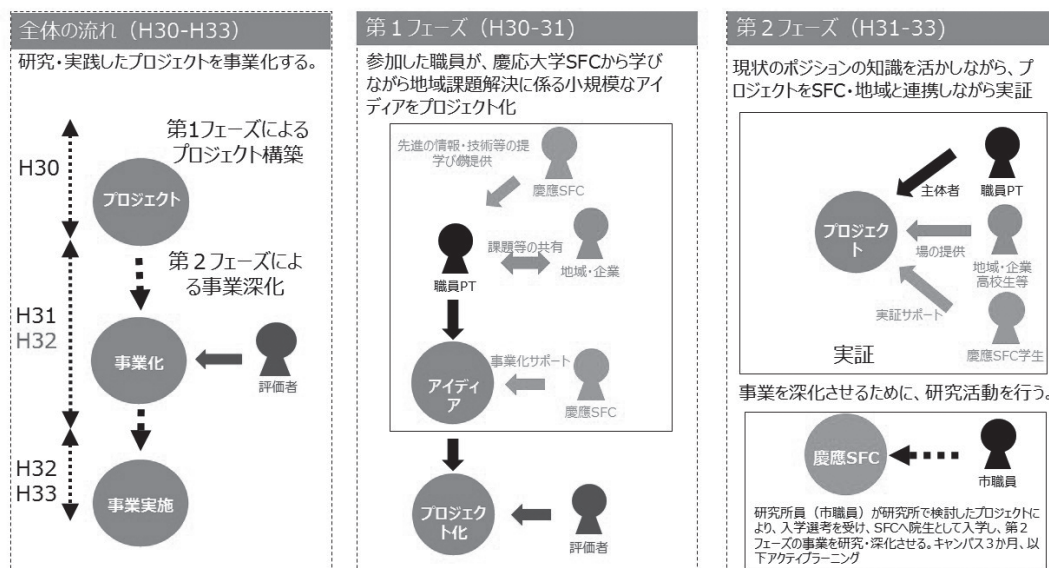


図 4

ることが分かりました。ここから、民俗芸能の持続的な活動には、伝承地外からも演者を獲得する手法の検討を要するという課題が見えました。しかし伝承地の演者という立場の視点だけでは知見が不足すると感じ、花巻市地域おこし研究所の活動と連動した市の大学院派遣研究制度により、慶應義塾大学 SFC の政策メディア研究科の修士課程で学ぶことを決めました。

## 2. 大償神楽を続けるためのプロジェクトとコロナ禍

ここからは第2章として、これまでの問題意識から生まれた課題に対する解決策として実施した、実際のプロジェクトについて報告します。

研究では、実際に伝承地外在住者と共に活動する民俗芸能はあるのか、そうした民俗芸能では伝承地の演者、参加する伝承地外在住者にどのような課題があるのかに注目し、先行事例を調査しました。調査の結果明らかになったのが4つの先行事例の課題です。①伝承地住民が限界まで自力で頑張ってしまうこと。②伝承地外在住者の受け入れは受動的に行われ、それは演者獲得の手法としては偶然・不確実であること。③伝承地外在住者が演者として活動しても、伝承地の演者が演じる舞とは違うという意識で一線を引くこと。④伝承地外在住者の活動は、伝承地のものとしては認められていないという課題です。こうした分析を基に、これらの課題を克服する「通い神楽」という概念を構築しました。

「通い神楽」は伝承地外在住者が、通いによって演者としての活動を行うことを、伝承地住民が自発的に受け入れ、伝承地の演者として共に稽古や祭礼、公演等を行いながら、伝承地外在住者は民俗芸能以外の地域文化にも触れ、伝承地の演者・住民と共同で活動改善も行う伝承活動と定義します。

この「通い神楽」の概念を実際に運用するため、伝承地の演者の指導、行政による伝承地への移動支援、伝承地住民による滞在支援、伝承地および近隣住民との交流機会、伝承地住民による伝承地外とのコーディネート機能を持つ「通い神楽」モデルを構築しました。このモデルは、「通い神楽」の実践にはこうした機能が備わると、伝承地外在住者が伝承地の演者と共に、伝承活動を将来的に展開することができるのではという仮説に基づいて構築しました。

構築した「通い神楽」モデルの実践概要がこちらです。私が現在通う慶應義塾大学 SFC の学生お

- ①集落外の演者が、現住地からの「通い」によって活動
- ②集落の演者主導で、集落外の演者を募る
- ③集落外の演者は「集落での民俗芸能活動」に参加
- ④集落内外の演者が共に活動の仕組みを改善
- ⑤行政が「通い」をバックアップ

図5 「通い神楽」の概念構築

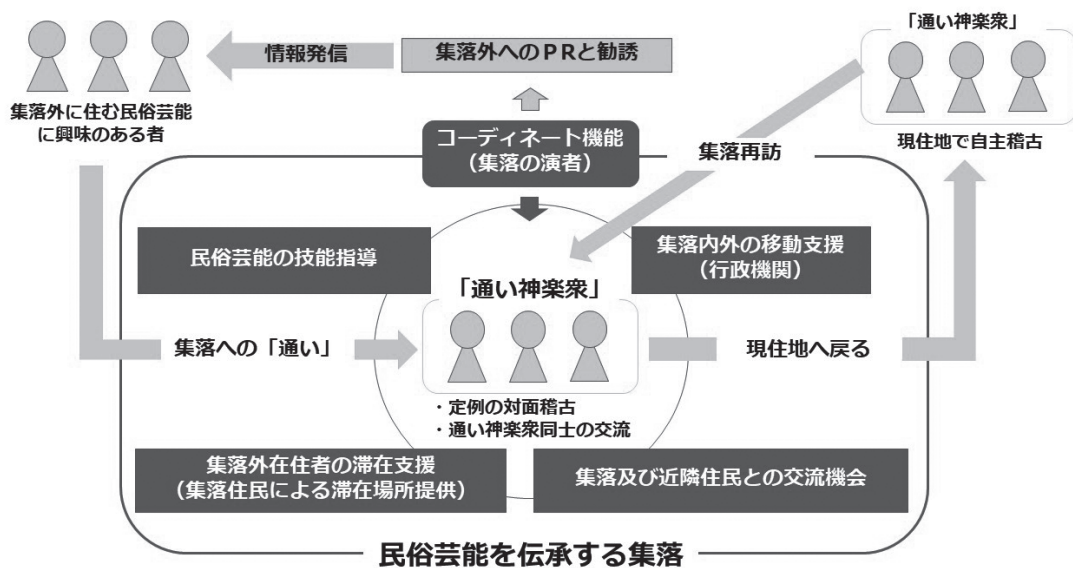


図6 課題解決プロジェクト「通い神楽モデル」の開発

よび研究員への実践参加の募集を行い、令和元（2019）年9月から12月まで、大償神楽の対面稽古を4回実施しました。稽古の中では、遠隔地への指導手法としてのオンラインを活用した稽古を試行しましたが、音のタイムラグが発生する問題があり、解決策を模索中です。また実践終了後には、慶應義塾大学SFCからの参加者および大償神楽保存会に、「通い神楽」モデルを実践した感想や、演者獲得モデルとして機能するための課題等についてインタビューを行い、「通い神楽」への参加による意識の変化を観察しました。

「通い神楽」の実践時に見られた参加者の行動や、実演後のグループインタビューで得られた意見がこちらです。伝承地外在住者からは、活動の意義の付与やモチベーションを駆り立てる仕組みの必

## ～「通い神楽モデル」の実践概要～

○伝承地外在住者…慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)の学生・研究員  
○民俗芸能団体…大償神楽保存会

①SFCでの実証実験参加者募集  
ポスター掲出、SNS、直接交渉、説明会開催  
→学生4名、研究員2名の参加

②2019年9月から12月までの4か月間、大償地区への「通い」による全4回対面稽古（オンライン稽古も試みたが、音ズレの課題あり…。）合間に大償地区及びその周辺に住む住民とも接点を創る

③実践後に、通い神楽衆及び大償神楽保存会への集団インタビュー  
→モデル実践の感想やモデルの改善点、今後の活動等についてヒアリング



図7 「通い神楽モデル」の実践概要

[illegible]

## ～「通い神楽」の実践結果概要～

通い神楽衆の実践時の行動(◆)・意見(○)

◆最初の導入（模範演技の披露）では、「自分たちにてできるのか」という不安を感じる

◆一定程度の芸の手順を覚えると、対面稽古以外でも自主的な稽古や効果的な芸の習得方法を考え、実践する（例：笛指譜の開発、図と動画を使った所作の見直し）

○「ポツと来た」自分たちに、真剣に（大僧神楽の形になるように）指導をしてくれたことが嬉しかった。

○「通い神楽」による活動の意義の明確が必要

○毎回、大僧にごちからに通うだけではなく、大僧からも通ってくる仕組みがあると稽古が持続しやすい

○活動の成果（稽古だけではなく、公演への出演など）がはっきりすると活動継続のモチベーションが向上する。

○通い神楽と一緒に参加した仲間と、大僧地区で再開することもモチベーションの1つ。

## 大償神楽保存会の実践時の行動(◆)・意見(○)

◆伝承地外在住者への指導を通じ、自分たちが舞っている「大償神楽」の所作を再確認する機会の獲得

◆実践期間の稽古でも「大償神楽」の舞になるように、保存会員への指導よりも細分化した指導

◆通い神楽衆との芸の習得の共同開発（笛指譜）

○今回の通い神楽は「神楽に興味を持つ者が、より理解を深める」には有効だったと感じるが、演者として活動するには、地理的・時間的制約がネックになる

○大償地区及びその周辺の人材だけでは、将来は先細る。伝承地外に住む者でも、神楽をやりたいという者については、常時受け入れられる仕組みが必要

○「大償神楽」に正式に取り組む＝保存会員になるための方法として、何らかの基盤を設けることは必要

図8 「通い神楽」の実践結果概要

要性について意見があったほか、大償神楽からは伝承地外在住者への指導が、自分が知り、教えている大償神楽が正しいかを見直す機会を生んだほか、芸を学びたいと思う者を常に受け入れられる仕組みを持つべきという意識を持つようになりました。過去にも伝承地外在住者への指導を行ったものの、完全な定着に至らなかった経緯をもつてなお、このような考えに至っています。一方で、伝承地の演者として受け入れ、公演等保存会の活動を共にする、つまり大償神楽保存会の保存会員とすることについては、芸や活動の持続性等による一定の基準を設ける必要があるなど、慎重な意見が出されました。

大償神楽ではこの実践結果を踏まえ、今年の5月には実践後にインタビューで出された課題について見直し、改良した「通り神楽」モデルによる実践を再度行う予定でした。しかし3月からの新型コロナ

## ～通い神楽の1年後－オンライン神楽WS－

通い神楽に参加した慶應義塾大学の学生からの依頼。

「大償神楽の魅力を伝えるため、  
オンラインでワークショップを  
開催したい！」

### （問題意識）

- ・ 民俗芸能の後継者不足
- ・ 都市部での神楽の認知度が低い  
→ コロナ禍でもできる方法として、オンライン  
ワークショップで魅力を伝えられないか？

### （ワークショップの概要）

- ・ 岩手に関するクイズでアイスブレイク
- ・ オンラインでの舞の体験（入門の「しんがく」）
- ・ 舞の鑑賞（大償神楽のリアルタイム配信）
- ・ 演者との交流（一方的な動画配信への上積み）



17

図9 通い神楽の1年後－オンライン神楽WS－

コロナウイルス感染症拡大が始まりました。ご承知のとおり、緊急事態宣言の発令による首都圏からの移動制限もあり、2回目の実証実験は断念せざるを得なくなり、大償神楽保存会でも公演が全くなりませんでした。緊急事態宣言が解除された6月から定例稽古は再開していますが、公演を開催すると、ある程度3密になることが分かっている中、今後の活動のあり方を模索中です。

こうした中で、昨年「通い神楽」に参加した慶應義塾大学の学生から、大償神楽の魅力を伝えるため、オンラインでワークショップを開催したいという依頼がありました。コロナ禍における民俗芸能の活動の一つとして、また昨年共に稽古をした仲間のため、大償神楽保存会ではこれを了承し、11月28日にワークショップを開催することとしています。

### 3. おわりに

最後のまとめです。「通い神楽」の実践により、人口減少・少子高齢化がさらに進行すると見込まれる状況における、今後の民俗芸能の演者獲得活動において、どのような取り組みが必要なのかの示唆を得たこと。このコロナ禍において舞うことができないからこそ、祭礼行事や公演において、舞うこと以外の民俗芸能団体の活動の幅が広がるのではという気付きを得ました。このことは民俗芸能の演者不足という課題解決に対し、演者獲得の活動方法の幅も広げるものであります。コロナ禍における民俗芸能の活動を通じて、今一度演者自身が自分たちの民俗芸能が持つ価値を掘り下げながら、芸と魅力を併せ伝えていくという準備を行い、公演を再開した際、より多くの人に民俗芸能をやりたい、関わってみたいと思っていただけるようにすることが、コロナ禍で民俗芸能の伝承活動の一つではないかと考えています。

以上で報告を終わります。



## 第2部 報告2

# 島根県大元神楽の取り組み

宇都宮 将（市山神友会事務局長）

皆さんこんにちは。国指定重要無形民俗文化財大元神楽<sup>おおもと</sup>を継承しております、市山神友会事務局長<sup>いちやまじんゆうかい</sup>の宇都宮将と申します。本日は撮影での参加という形になります。何ぶん慣れないことですので、お聞き苦しい点多々あろうかと思えますけれども、限られた時間しっかりと務めてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

### 1. 大元神楽の概説

まずは、私どもが伝承しております大元神楽について簡単に説明いたします。

大元神楽は、島根県の邑智郡<sup>おおち</sup>から那賀郡<sup>な かが</sup>にかけての山間部に残されている神楽で、多様な神事舞、能舞のほかに、神懸かり託宣<sup>ごうつ さくらえ</sup>の神事（託舞）を伝承しているのが特徴です。

わたしも市山神友会は、島根県江津市桜江町市山地区の在住、出身者が所属する神楽団で、辰年と戌年の「市山大元舞」、鎮守である市山飯尾山八幡神社の「秋祭り」、夏の「八朔祭り」など地元の祭りでの奉納のほか、国立劇場や島根県民会館などでの出張公演や近隣で開催される神楽競演大会への出演も行ってきました。

大元神楽に関する最も古い資料とされているのは、邑知郡美郷町吾郷<sup>みさと あごう</sup>の天津神社蔵『大元舞熟書之事』（元和元・1615年）です。こうした資料より大元神楽は、おそらく400年ぐらい前には、今の形で存在していたのではないかとされています。それほど前にはもう今の形になっているだろうとのことですから、推測されるのは、それ以上前より今の神楽の源流があったのではないだろうかということです。

しかしながら一番大事なのは、400年以上の長い年月、現在まで神楽をつないでこられた先人の方々がおられること。そして僕たちが、それを受け継ぐ責任世代として、次の世代に当たり前のことを当たり前のようにつないでいくこと。これを重要な課題としてわれわれは日々活動しています。

神楽について言葉で言うのもなかなか伝わりにくいかなと思いますので、簡単な紹介映像を作りました。少しご覧いただけたらと思います。



図1 四方拝



図2 太鼓口



図3 鐘馗



図4 山の大王



図5 綱貫



図6 神送り

## 2. 市山神友会の年間活動と新型コロナの影響

今年に入り、コロナウイルスという疫病が猛威を振るってきました。今回ご登壇されている皆さまをはじめ、全国の伝統文化を継承している方々も、今なお存分な活動ができないまま日々を送られているのではないかと思います。僕たちも例外なく先の見えない恐怖と戦いながら、毎年当たり前のように行っているものができない悶々とした空気の中で、何とか模索しながら形を作っていかなければいけないねと仲間たちで話し合ってきました。

そもそも僕たちの活動は、年初に年間事業計画を作成するところから始まります。継続事業もあれば、新たに依頼が入るもの、そして途中で追加されるものもありますが、本年は表1のように11の事業が予定されていました。僕たちにとって基本となる事業は、7番の八朔祭子供神楽、そして9番の令和2年秋祭り奉納神楽という地元の祭りでの奉納神楽です。それに加えて、芸能公演の舞台に上がったり、ワークショップを開催したりしますが、11の事業となると結構なボリュームになってきます。そうした中、世界的に流行しているコ

表1 市山神友会 令和2年事業計画書

	月日	事業名	場所
1	2/1	節分祭	市山飯尾山八幡神社 (島根県江津市)
2	2/16	ワークショップ「石見の神楽文化の源流 大元神楽を学ぶ」	ライブスペースアロ (東京都渋谷区)
3	2/23	日本遺産認定記念特別公演 「神降臨祭」	石炭文化ホール(島根県浜田市)
4	5/3	温泉津夜神楽公演	龍御前神社(島根県大田市)
5	6/21	ワークショップ 「第2回大元神楽の魅力」	大元神楽伝承館(島根県江津市)
6	8/14	盆踊り	市山地区(島根県江津市)
7	8/29	八朔祭	市山地区(島根県江津市)
8	9/13	2020しまね伝統芸能祭	島根県立いわみ芸術劇場 (島根県益田市)
9	10/10	令和2年秋祭り奉納神楽	市山飯尾山八幡神社 (島根県江津市)
10	11/1	桜江神楽競演大会	桜江中学校体育館(島根県江津市)
11	11/23	江津市神楽競演大会	江津市総合市民センター (島根県江津市)

※灰色に塗りつぶした4-6、10-11の行事は中止。

## 3. コロナ禍での奉納神楽

僕たちが大事にしている事業は、地元の氏神様に奉納する神楽であって、これが主な活動になります。先ほど申し上げたように、8月の市山八朔祭子供神楽、そして令和2年秋祭り奉納神楽、この2点に集約されます。これらの行事に関しては、早い段階から開催の可否について協議を行ってきました。ウイルスという目に見えない恐怖がそこまで来ているかもしれない、そうした不安の中では、開催に対する反対意見も多々ございました。こうした状況の中で本当にやってよいのだろうか、そういう迷いもあったんですけども、神社の総代会の皆さん、そして地元の自治会、時には宮司さんともお話をさせていただいて、議論を重ねてきました。その結果、まずはやっても良いだろうという部分と、これはやっぱり避けるべきだろうという部分、この2つをみなで話し合って明確にするところから始まりました。

出来ることというのは、僕たちが当たり前のようにやらなければならないこと。そして避けるべきというのは、今年で言うところのコロナウイルスに対してどのような対策ができるかです。それを、いわゆるガイドラインの作成というかたちで少しずつ準備をしていくと、やめるべきという声が少しずつ、なんとかできるのではないだろうかというように前向きな意見に変わっていきました。こうした新型コロナ対策を目に見えるものとして提示しなければいけないという思いもありましたので、神楽の奉納にあたってのガイドラインを作成いたしました。

おおまかに分けて3つ、①会場設営、②神友会会員を含めた関係者（演者）、③観客の皆さま、この3つに絞って対策を講じました。

会場設営では、マスクの装着、アルコール消毒の設置、換気の徹底です。秋祭りではもう寒くなってくるので、どうしようかなと思ったのですが、やはり換気の徹底をしっかりとしておく必要があるだろうということで、窓をしっかりと開ける。時には扇風機で循環もさせて、空気の入替えが潤滑に行われるようにしました。

そして演者は、アルコール消毒、検温を徹底するとともに、奏楽のフェイスシールド等の着用と書いてあるのですが、図8のように顧問がマスクをして太鼓をたたいています。そして控室でも、マスクを着用して出番を待っていました。

観客も、普段は地域の住民を積極的に呼び込んで賑やかに神楽を見てもらうのですが、今年は基本演者の家族のみと入場を制限しました。夏の八朔祭を例にして説明しますと、例年は祭典と神楽の会場となる下市集会所の前にイスやテーブルを置いたり、出店を出して飲食しながら楽しくやったりするのですが、今年は集会所では祭典のみを行いました。その時の様子は、図10のように見守る人々もディスタンスをとって参列していました。その後、八朔祭の奉納子供神楽は、より広い会場の飯尾山八幡宮に移動して奉納されましたが、関係者と保護者のみが見守るかたちでした。

令和2（2020）年は、こうした対策をしっかりと行いながら、地元の氏神社での神楽をなんとか開催することができました。

#### 令和2年秋祭奉納夜神楽コロナウイルス感染症対策ガイドライン

##### ■会場設営

- ① 非接触型体温計の設置
- ② アルコール消毒の設置
- ③ マスクの設置（無償提供）
- ④ 換気の徹底（窓を開けておく。扇風機で循環させる）
- ⑤ 奏楽はフェイスシールド着用
- ⑥ 1演目ごとに舞殿（畳）の消毒
- ⑦ ゴミ箱の設置（ほとんどのもの、基本使い捨て）
- ⑧ 使用済み白衣入れ
- ⑨ 観客用椅子の設置（間隔を十分に開ける）

##### ■演者（会員）関係者

- ① 非接触型体温計での体温チェック
- ② 舞う時以外はマスク着用
- ③ アルコール消毒の義務化
- ④ 水分補給とうがい（同時に熱中症対策も）
- ⑤ 手洗いの徹底

##### ■観客（基本演者の家族のみ）

- ① 非接触型体温計での体温チェック
- ② アルコール消毒の義務化
- ③ マスク着用
- ④ 基本飲食禁止（熱中症対策として飲み物はOK）
- ⑤ ご声援は無し（拍手のみ）
- ⑥ 終了後、速やかにご退場いただく。

図7 令和2（2020）年秋祭奉納夜神楽コロナウイルス感染症対策ガイドライン



図8 令和2（2020）年秋祭奉納神楽の様子



図9 普段の八朔祭の様子（2018年8月26日）



図10 令和2（2020）年八朔祭の様子

#### 4. コロナ禍でもなぜ神楽を奉納したのか

僕たちやっぱり思うのですけれども、なぜそこまでして神楽をしなければいけないのか。冒頭にもお話をさせていただいたように、400年以上続いているこの神楽、先人の方々がしっかりつないでこられたものを、僕たちの世代でなくしていいのか。やはりそれはなくしてはならないという思いが僕たちの中にありましたし、特に若い会員にもそれが根付いています。その若い人たちの意見を聞いてみると、古き良きこの形を変えることなく、淡々と当たり前のようにこれをつないでいく、そして次の世代に継承していく。子どもたちは当然少なくなっていくって存続が危ぶまれることもあります、何とかそれでも神楽を継承していきたい。その思いがありましたので、僕たちは先人が当たり前のようにやってきたことを、僕たちも当たり前のようにやっていく。このコロナという病気、もちろん怖いのですけれども、それにも負けずにやっていかなきゃいけないというところに行きつきました。

やはり科学的根拠のない時代に、僕たちは何に身を委ねていたかということ、神様であったり、仏様であったと思います。特にこの神楽においては神様、いわゆる<sup>しんじ</sup>神事ごとという解釈が強くありますので、1年無事に過ごせたこと、それを神様にお礼をするという意味合いも兼ねて神楽をしなければならない。そしてコロナウイルスという、現代においても猛威を振るっている病気がありながら、何とか皆さん無事に過ごせたこと、これは氏神様のおかげであるという思いが強くありましたので、やはり神楽はやろうじゃないかという意味で、なんとか開催できたのではないかなというふうに思います。

ひとつこの1年で大きな変革があったかなと思います。当たり前でありながら、その当たり前が当たり前のようにできない。そういう状況の中で、みんなで日々話をしながら進めてきた結果、より深い部分で大元神楽が重要なんだということに気付きました。帰属心の醸成といいますか、僕たちはこのふるさとに当たり前のように住んでいるのだけれども、本当にこの神様の恩寵を受けて生活しているんだ、神様のおかげなんだということをしっかり知ることができて、さらに深い意味で、この桜江町が、市山という地区が好きになってきました。

いろいろとお話したいことはまだまだありますけれども、この後に座談会があると思いますので、

そこで今回参加される方々と一緒にお話をしていけたらなというように思っています。

以上で簡単ですが、市山神友会の事例を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

## 第2部 報告3

### 福島県浜通りのじゃんがら念仏踊りの取り組み

田仲 桂（いわき市文化財保護審議会委員、磐城じゃんがら彩志会会員）

福島県のいわき市からまいりました田仲と申します。よろしくお願いします。私はじゃんがら念仏踊りをやっています、今日は「福島県浜通りのじゃんがら念仏踊りの取り組み」というタイトルでお話をさせていただきます。

#### 1. じゃんがら念仏踊りの概要

まず初めに、じゃんがら念仏踊り（以下「じゃんがら」）を知らない方もたくさんいらっしゃると思いますので、紹介映像をご覧くださいと思います。

じゃんがらは、8月13日と14日の2日間、団体によっては15日を含む3日間のお盆の時期に、新盆を迎えた家を回って、太鼓と鉦を鳴らしながら死者と遺族を慰める「供養の踊り」です。団体にもよりますが、2日間もしくは3日間で20軒から30軒、多いところでは40軒の家を回ります。私たち担い手は、これを「盆回り」と言っています。

盆回りは、バスや車で新盆のお宅に行き、お焼香をしてじゃんがらを踊って、その後に、そのお宅との関係性にもよるんですけども、接待を受けるということがあります。図3、4のようにお料理をご馳走になって、食べたらもう1回じゃんがらを踊って帰るというのが盆回りです。バスの中では図5のような雰囲気です。バスを借りて移動することもありますし、車で分乗しながら移動することもあります。それは団体によります。



図1 じゃんがら念仏踊りの様子



図2 じゃんがら念仏踊りの様子



図3 盆回りでの接待。プライバシーの都合上、画像を一部加工した。



図4 盆回りでの接待

現在いわき市には、じゃんがらを継承する青年会、保存会、愛好会など100を超える団体があります。タイトルにある「浜通り」は、福島県の海側の地域です。福島県は、浜通り、中通り、会津地方という3つの地方に分けられていて、気候も違うんですけれども、じゃんがらは浜通りのうち、いわき市を中心に分布している芸能です。

その分布図が図7の地図になります。データとしては15年ぐらい前のものを使っているのですが、北が双葉郡双葉町、南が茨城県北茨城市、西が田村郡小野町、石川郡平田村・古殿町の範囲に伝わっています。



図5 バスでの移動の様子



図6 福島県の地図

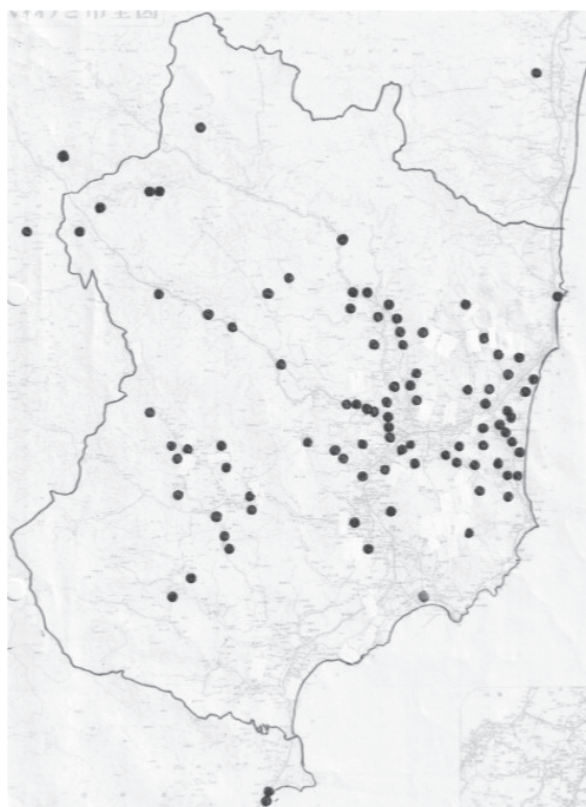


図7 じゃんがら念仏踊りの分布図

## 2. 福島県における新型コロナの感染状況

今年のじゃんがらは、やはりコロナ禍の影響を受けました。福島県内の新型コロナウイルスの感染者数の推移をグラフに落としてみました。これは福島県のホームページに掲載されている発生状況一覧を基に、3月1日から11月15日までの数字を表したものです。

福島県の人口は約182万人いまして、県内の感染者数が最も多かったのが1日当たり15名。いわき市はそれに対して34万人の人口がいまして、1日の感染者数が一番多かったのが5人という人数

になっています。福島県では、どちらかという中通りのほうで感染者数が多く、県内の春の祭礼は神輿渡御や出雲系神楽の奉納が行われることが多いのですが、それらの芸能は軒並み中止になりました。神事のみを執り行ったところが多かったというように聞いています。

いわき市の場合、夏・秋の祭礼では三匹獅子舞が奉納されますが、いわき市文化振興課文化財係の取りまとめによると、今年は4カ所のみで簡素化し実施をされたというように教えていただきました。

福島県内の感染者数の推移

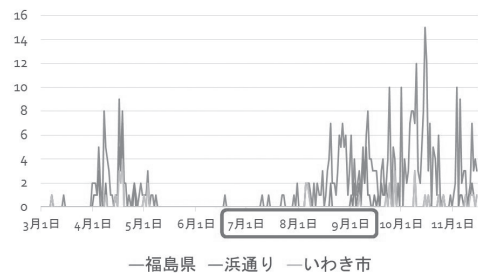


図8 福島県内の感染者数の推移

## 3. コロナ禍のじゃんがら念仏踊り

じゃんがらは7月から練習が始まって、8月に盆回りをして、9月に地域の祭礼行事などで披露・奉納されることがあります。ですので、活動期間としては長いところで夏場の約2カ月です。ちょうど7月から練習が始まりますが、今年はやるやらないという判断を下すのが、6月辺りになりました。6月だと、福島県の中では感染者数がゼロという、比較的穏やかな落ち着いた期間でした。7月に入って少し感染者数が出てきて、8月以降に増えていったのですが、こういう状況の中で、じゃんがらの盆回りが実施されたということになります。

### 内郷じゃんがら会議の取り組み

ここからは、じゃんがらの継承団体がどのようにして実施していったのか、数ある団体のなかでも「内郷じゃんがら会議」の取り組みを、少しご紹介していきたいと思います。内郷じゃんがら会議は、いわき市の内郷地区に所在する10のじゃんがら団体が結成した組織です。この10団体が横のつながりを持って、毎年1回集まって情報交換ですとか話し合いとか、飲み会とか懇親会をやっているんですけども、今年はこういう状況ですので、コロナ禍のじゃんがらの実施について会議が開かれました。

まず実施をするのかしないのかという悩みと、その選択をどのように決めていくかということが話し合われました。最終的には内郷地区では10団体ある中の7団体が実施、3団体が今年は中止になりましたが、そこに至るまでは「じゃんがらをやろうと思っていたけれどもやらなかった」とか、「やらないと決めてたけどやることになった」という事例もあって、すごく悩みながら選択をされていたのだなということがうかがえました。



図9 内郷じゃんがら会議の様子



図10 感染対策の一例

実施にあたっての対策の議論は、例えば回る地域はどうするのか、焼香をするのかどうか、密になりがちな家に上がるかどうか、じゃんがらをしながらマスクを着けるのか、未成年の参加はどうするのか、規模を縮小するのかなど、あと呼んでくれた家への確認はどうするのかということが、議題に出されました。

「回る地域」というのは、じゃんがらには「地元回り」と、地元以外の「外回り」があって、今年は地元回りだけにする、自分の地域以外の所は回らないというような選択をされた団体さんが、結構多くいらっしゃったという印象です。

次に、焼香をどうするのかという問題です。じゃんがらでは、団体の代表の方が新盆の家の中に上がってお焼香をするんですけども、家の中は新盆なので親戚ですとか、お客さまがたくさんいるので密になりがちであると。そうしたところに入るのはどうなのかという意見が出ました。ただ、焼香しないわけにはいけないので、焼香セットを自分たちで持って行ってやるかとか、家の人に玄関に持って来てもらってやるのかということも話題に挙がっていました。

また、庭が狭いお宅もありますので、網戸を1枚張ってもらうなど、できるだけ遮断するものを間に挟むやり方を取ったほうがいいのではないかと、あと、透明のシートを1枚ぶら下げてもらって、飛沫を防いだほうがいいのではないか、という話も出ました。

そして、マスクを着けるか着けないかというのは、担い手としてはすごく重要な問題なのですが、浴衣地と同じ模様のじゃんがら仕様のマスクを作ってやるかどうかとか。マスクをしてやるということになったら、それを家の人にもちゃんと説明をしなければいけないねとか。マスクをしないなら、しないなりの説明もしなければいけないね、ということが話し合われました。もちろん手指の消毒や検温などもやりながら練習をしていったほうがいいとか、熱のある人参加させないとか、そうしたことも対策としては必要だねという話も出されていました。

うちごうしもつづら

内郷下綴青年会という団体さんがいらっしゃるのですが、そこでは事前にお宅に配る説明用紙を

図11 体温記録表

ちゃんと作っていて、「自分たちはこういう方針でやるので、皆さまもご協力お願いします」という文書を作って配布しています。例えば、「自分たちはこまめに消毒をします」「マスクは熱中症のリスクがあるのでしません」「発熱とか咳があるようなメンバーは当日連れて行きません」など、自分たちはこういう対策をしますよということを示しました。また、ご家族の皆さまには、「基礎疾患のある方は距離を取ってください」「実演中はできるだけ遠くからご覧ください、身体的距離を取ってください」など、注意喚起をお願いしていました。

実際の盆回りでは、バスの中では一軒の奉納が終わった後に必ず消毒をするなど徹底していた団体さんもあり、訪れるほうのお宅にも消毒のアルコールが置いてあって、お互いに気を付けているような風景が見られました。あとは、東京などの首都圏からは帰省出来なかったため、リモートでZoomなどのオンラインツールを使って、自分の実家でのじゃんがらの風景と、東京など遠方のお宅を何軒かつないで、じゃんがらの中継をしていたということも見られました。

#### 新盆を迎えられる皆さまへ

内郷下郷青年会

このたび新盆を迎えられるにあたり、あらためましてお悔やみ申し上げます。

さて、今年は新型コロナウイルス感染症の影響で、感染予防対策をとりながらじゃんがらを実施させていただきます。

お互いに感染のリスクが少しでも軽減できるようご理解とご協力をお願い致します。

#### 当青年会

- ・各自消毒液を携帯し、こまめに手指の消毒を行います。
- ・マスクにつきましては、熱中症のリスクが非常に高いため、基本的には着用致しません。
- ・前日より発熱や咳の症状がある者は当日同行致しません。
- ・場所によっては人数を減らして実施致します。
- ・当日お伺いするお時間につきましては予定と若干前後する場合がございますので、当日にも事前にお電話致しますのでご了承ください。

#### ご家族の皆さま

- ・基本的に屋外で行いますが、やむを得ず屋内で実施するような際は、窓を開ける等の十分な換気をお願い致します。
- ・実演中は、できるだけ遠くから、身体的距離の確保がとれるようお願い致します。
- ・御年輩の方や基礎疾患のある方は、特に距離の確保をお願い致します。
- ・特に県外から訪問された方がいる場合は、マスクの着用をお願い致します。
- ・飲み物や食べ物を提供いただける場合、取り分け用にはお手数ですが紙皿や紙コップ等でのご対応をお願い致します。また、おしぼり等につきましても、使い捨てのものをお願い致します。

何かご不明な点等がございましたら遠慮なく御連絡ください。  
大変恐縮ではございますが、宜しくお願い致します。

図 12



図 13 コロナ禍の盆回り



図 14 実演前の検温



図 15 依頼した家が用意した消毒液



図 16 じゃんがらの中継

## 磐城じゃんがら彩志会の活動

ところで、私は「磐城じゃんがら彩志会<sup>さいしかい</sup>」という愛好会に所属をしているのですが、少しだけこの会の活動についてお話いたします。まず、今年の活動はもう軒並み中止になってしまいました。通常ですとイベント出演や、介護施設への慰問、練習など、1年を通して割とスケジュールが詰まっているのですが、今年は全部なくなっていました。また、盆回りでは親団体のお手伝いを、通常であれば3～4人ぐらいがお手伝いとして入って人数の補強をしているのですが、今年は自分がコロナにかかったら勤務先に迷惑をかけることになるということで、1人だけが参加しました。唯一じゃんがらの体験講座のみ、11月に実現したというような状況で、ほかは全部中止。来年度の活動もいまだ見通しが立っていないような状況です。

## 磐城じゃんがら彩志会の2020年の活動

### ⇒ のきなみ中止



- ×イベント出演（3～10月）
- ×介護施設への慰問（5～7月）
- ×練習
- △親団体のお手伝い（8月）
- ◎体験講座（11月）のみ実現



図 17 磐城じゃんがら彩志会の 2020 年の活動

## 東日本大震災との比較

少しだけ東日本大震災との比較をしたいなと思います。原子力災害とコロナ禍というのは、目には見えないものへの恐怖ということで、似通う部分があるなと思っています。私が地域住民として携わっている「下高久の三匹獅子舞」の例を、ご紹介します。

大震災の時は放射能問題があって、今はコロナ禍の問題があるのですが、どちらも祭りの大幅な簡素化というかたちで影響が出ました。ただ、今年ちょっと違うなと思ったのは、2011年の経験が前例となり、あの時の簡素化のやり方をなぞっていくような形が取られたことです。制限された状況下で祭りを開催するための工夫、工夫を試みる余力、前回の経験を踏まえられたがゆえのプラスアルファの余裕が見られたなと思います。やはり2011年の経験が2020年に生きたなというのが、実感としてあります。

ですので、コロナ禍の祭りとか芸能の経験は、今後絶対に生きてくる、模索したこと、やらなかったことも含めて生きてくるんだろうなと思っています。2020年の振り返りはこれからですが、今後も動向を注視していきたいと思っています。

### 東日本大震災との比較

2011年	2020年
◇放射能問題 ×線量が高い場所	◇コロナウィルス ×密
■祭りへの影響 ・大幅な簡素化 ・1分程度の1芸のみ ・徒歩でなく車で移動 ・子どもは不参加	■祭りへの影響 ・5芸（変則版） ・徒歩でなく車で移動 ・子どもは不参加 ・消毒・マスク着用

図 18 東日本大震災時とコロナ禍との比較



図 19

#### 4. おわりに

最後に、現場の担い手の方々は意外と前向きですね。そして深刻に捉えていない。コロナは一時的なもので、今年できなくても収まったらできるだろうという、楽観視といたしますか、深刻には全然捉えていないような印象があります。また、盆回りを中止した団体さんからは、「やらないのは何か気持ち悪い、もやっとする、そわそわする」という話をうかがいました。

なぜこんなに前向きなのかなと言うと、やっぱり芸能が好きとか、祭りはやるもんだというような思いがあるのだなというのは、見ていて感じるところでもありますし、私自身もそうです。そして、やはり地域内外のネットワークが功を奏しているなとも思っています。内郷じゃんがら会議の皆さんのように、同じ芸能を伝承している団体どうし横のつながりがあって自分の進むべき道を相談できるとか、その進むべき道が違ってそれぞれの模索の跡が分かるものなので良しとできるなど、そういうネットワークがあって救われている部分がありました。それは人にとっても芸能にとっても、救われている部分があるなというふうに感じています。

私の話は以上になります。ご清聴ありがとうございました。

## 「内郷じゃんがら会議」議事録

2020/6/20(土) 19 時～20 時  
於) 内郷公民館

【参加団体】 9 団体

【欠席団体】 1 団体

＜実施するかどうか＞

- ・リスク・責任問題を考えると躊躇する。が、会員のやる意思を尊重して実施する予定
- ・幹部会を開いていないのでまだ決まっていない。ただ今年やらないと、「もうやらない」となってしまうのが怖い。本当はやりたい。幹部会で話をして決めたいと思う
- ・今年はやらないことにした
- ・市内の団体でやらないことを決めたところが複数ある

＜実施しない理由＞

- ・感染したときの責任がとれない。重傷化したり、行った先で年寄にうつしたり、東京などからの帰省者からもらってきたり、リスクが大きすぎる
- ・東京や県外の会員が多く、感染リスクが高まる可能性がある
- ・一方で、うちがやらないとほかの団体に迷惑をかけてしまう懸念もある

＜リスクをいかにさげるか＞

◆まわる地域はどうする？

- ・地元まわりと地元以外の外まわりがあるが、今年は地元まわりだけにする。地元であれば会員は自分の車でそれぞれ行っても良いし、歩いていっても良く、少しでも密を避けられる
- ・いつもは2日間だけど1日だけにする。1軒あたりの滞在時間を短くする

◆焼香をどうする？密になりがちな家にあがる？

- ・普通は提灯もちが家にあがって焼香し、終わったあとに家の中で飲み物をいただいたりするが、今年は家にはあがらない
- ・ただし、焼香をしないわけにはいかない。焼香セットを自分たちで持参していくか？家の人に玄関などに持ってきてもらうか？
- ・雨の日は家にあがらなければならなくなってしまう。アルコール消毒を持ち歩くか
- ・庭が狭いお宅もある。網戸1枚はってもらって中にいてもらう？

資料 1-2

◆マスクをつける？消毒する？

- ・じゃんがら仕様のマスク（浴衣地）を作ってやる案も。マスクしてやるとしたらそれ  
も良い。でも実際マスクしてやるのはきつい
- ・熱中症になる可能性があるのでマスクはしない
- ・いつも通りやろうとは思いますが、本番中は手洗い・うがいをこまめにする
- ・マイクロバスで移動する団体は、アルコール消毒を設置して通るときに手指消毒して  
もらう。窓は開ける

◆未成年の参加は？

- ・中学生以下は練習・本番とも参加させない
- ・外で練習しているので三密は回避できるが、本番は密にならざるを得ない。未成年の  
参加は難しい。ただし練習させないとブランクが生じる、それもまずいと思う
- ・室内で練習しているので三密になる。外での練習にして期間も短くする、短期集中型  
にする

◆規模は縮小する？

- ・人数を減らしてやることを考えている
- ・密集しないように踊ることも検討中
- ・唄なしでやるとか。唄なしなら練習を短くしても良いという考え方も
- ・自分の家も新盆で、お寺からきた案内には、読経を「やる／やらない／人の少ない時  
間にやる」等の選択ができるようになっていた。読経ですらそういう状況。通常通り  
やることの可否を悩んでいる
- ・縮小してやるじゃんがらを家の人が望んでいるかどうか。せっかくこういうときに呼  
んでくれて、ちゃんとしたじゃんがらを見せられないのは…

◆呼んでくれた家への確認

- ・呼ぶ側が誰が来ているかわからない。感染者が来ている可能性もある。どういう人が  
くるのか事前確認は必要ではないか。東京など首都圏からの帰省者など
- ・家の人にマスクの着用をお願いすることも必要ではないか
- ・事前の打ち合わせをして合意を得る必要がある
- ・「こうしよう」というのは決められない。リスクを背負いながらやるしかない。呼ぶ  
側の要望にはなるべく応えたいが、状況の説明をしていくしかない

◆さいごに

- ・盆まわりを「やる」前提で話が進んでしまったが、それで良かったのだろうか
- ・供養という名のものに、それを盾にして、無理してやってしまっただけなのだろうか
- ・改めて、自問自答している

## 「内郷じゃんがら会議・報告会」議事録

2020/9/20(日)17時～18時

於) クレールコート

【参加団体】 7 団体

【欠席団体】 3 団体

◆コロナ禍の芸能の実施方法

## &lt;担い手の人数&gt;

- ・通常は 19 名だが、今年は人数制限して 11 名で実施した
- ・東京など県外から帰省して参加しているメンバーには辞退してもらった
- ・コロナでもしっかりしたものを届けたかったため人数制限はしなかった

## &lt;訪問する軒数&gt;

- ・例年は 40 軒弱だが今年は 19 軒。知り合いのみにした
- ・通常は 20 数軒だが今年は地元のみ 8 軒。地元以外はすべて断り、1 日だけの実施にした
- ・地元は 3 軒キャンセルが入った
- ・いわき市のHPで公開されているじゃんがら団体リストに載せている。HPを見て電話をしてくる依頼があったが断った。市役所をお願いして一度リストから削除してもらい、問合せができないようにした
- ・軒数の制限はしなかった

## &lt;1 軒あたりの滞在時間&gt;

- ・通常 30 分程度なのを短くするようにし、結果的に 20 分程度になった。道路も帰省する人が少なかったので空いていた。早く終わりすぎて次の家に予定よりも早く着きすぎてしまった

## &lt;練習中のコロナ対策&gt;

- ・検温・消毒
- ・女性の体温周期の関係で 37℃を超えたメンバーがいた。特別扱いはできないため練習を辞退してもらった

## &lt;盆まわりでのコロナ対策&gt;

- ・じゃんがらが終わったあとに家の人準備してくれる飲食物はいただかないようにしたが、とはいってもやはり準備をしてくれているので、飲み物などはいただいてバスの中で飲んだ
- ・家には上がらない、中で食事もしない

資料 2-2

- ・検温・消毒・マウスガード
- ・バス（※人数が多いのでバス移動）から降りたあとに、運転手さんをお願いしてバスのなかを消毒してもらった
- ・心配といえば心配だったが、始まってしまったら気にすることなくやってしまった
- ・事前に訪問してコロナ対策を書面で渡し、説明した
- ・実際できる対策はそうそうない。検温・消毒は1回ずつやれば良いしその繰り返し

<反省点>

- ・今年は結果的にコロナにかからなかっただけ。実際かかったときにどういう動きを取るべきか、行き当たりばったりなところがあった。今後コロナが続くのでいけばそういうところも考えてやっていきたい

◆実施した団体の感想

- ・やって良かった
- ・やる・やらないの正解はない。やると決めた以上は対策をとってやれば良い
- ・じゃんがらを呼んでくれる家は覚悟を決めて呼んでくれていると思う。来年もコロナでざわついているだろう。呼んでくれる家はそれを承知の上で呼んでくれるのだろう
- ・盆まわり中にコンビニに入ったときに「頑張ってください」という声をもらった。市民の批判の声は自分には届いていない。じゃんがらに悪意ある印象もなかった
- ・呼ぶ方もコロナで外出する機会が少ないので、良いか悪いかは別に、楽しみにされているのは間違いないことだと思った

◆実施しなかった団体から

- ・仕事上の理由（感染したらクビになる等）からやらない選択をした
- ・新盆の家の人には申し訳なく思う
- ・やったという意見を聞くと、やっても良かったのかなという気持ちもある
- ・やらない年は初めて。じゃんがらの音が聞こえてくると淋しいなと感じた。お盆に何をやったら良いのかわからなかった
- ・来年はなるべくやる方向で行きたいと思う

<実施しないことの周知・連絡方法>

- ・中止の連絡は区長にお願いして回覧板をまわしてもらった。1回では伝わらないので3回まわした
- ・中止することをお盆の1週間前に決めたため新盆の家から若干クレームがきてしまった
- ・問合せの電話で今年はやらないと伝えると「ほかにやっているところがありますか？」と聞かれ、実施予定の団体を紹介した

## ◆その他

- ・お世話になっているお寺さんに実施の可否を相談したところ、「やって良いのでは」と言ってもらえた。さらにほかの檀家さんたちにも伝えてくれた。寺とずっと繋がってやってきたことから今年じゃんがらができたと思っている。地域との繋がりは大事
- ・じゃんがらを廻る方も呼ぶ方も、いわき市に協力してもらってルールを決めて発信できれば良いのでは。例えば「あんしんコロナお知らせシステム」を新盆の家は入れるとか？
- ・予約が入っていた知人の家はコロナを理由にキャンセルになったが、故人にはお世話になったし自分が行きたいと思ったから行った。そしたら感動したと言われた
- ・自分たちとしては普段から体調管理をして、実施すれば良いのでは
- ・行った先の人心配する可能性がある、そこへの配慮は必要である
- ・市内の某団体は盆まわりを中止したかわりに、地区の公園で合同での新盆供養を実施した。そういうやり方もある

## ◆困ったこと

- ・知り合いのいるA団体は今年はじゃんがらをやらないと決めたが、その知り合いはやりたいという気持ちがあったと思う。話をしているうちにヒートアップしてしまい、「やらないと決めた団体の地区にまで行く必要があるのか、なぜ行くのか」と言われた
- ・B団体は今年はやらないことを決めていたので「自分たちの代わりに内郷地区の団体に行ってほしい」と連絡がきた。B団体は内郷地区ではない。まずは同じ地区の団体にお願いすべきかなと思った
- ・C団体ではコロナ対策はまったくなかった。お願いしたけど対応してもらえなかった。感染リスクがあるため数名のメンバーは参加を辞退。もともと人が少ない団体なので人数確保が難しくなり、急遽東京在住のメンバーにお願いして参加してもらうことになった。首都圏の感染が拡大しているなかのそういう対応は、当事者としては非常に困るものだった。もしものことがあったら？休業したときの補償は？勤務先への賠償問題は？
- ・対策をとったうえでの感染と、ノー対策での感染は、やはり捉えられ方は違う
- ・会の方針は良くも悪くも会の代表の考え方に左右される面がある
- ・我々（会の首脳部）が対策をとっても会員一人一人が気を付けないといけない

## ◆芸能への思い

- ・じゃんがらは繋げていくもの、伝わっていくもの、途絶えさせてはいけないもの
- ・供養できる術がじゃんがら。徳を積んでいない我々が地元で亡くなった人を供養できるのがじゃんがら

資料 2-4

◆来年にむけて

- ・ 来年も終息していなかったら今年と同じように対策をとってやりたい
- ・ やることは悪ではない。対策をして続けていけたら良い
- ・ 来年のための対策を考える必要がある
- ・ 今年はやった。来年もやらないという選択は考えていない
- ・ コロナの状況は来年も変わらないと思う。1回やらなかったらやらないという、コロナがやらない理由になってしまうのは嫌だ。だからやるべきだと思う
- ・ 今年はやらなかったが、来年はやりたい

◆芸能実施にあたっての希望

- ・ 直前にPCR検査（抗体検査ではなく）を全員無料で受けてたい。家族も含めて。そうすれば安心

以上



## 第2部 報告4

# コロナ禍における讃岐の獅子舞と「獅子舞王国さぬき」

十川 みつる (讃岐獅子舞保存会会長、さぬき市造田中組獅子舞保存会所属)

皆さんこんにちは。香川県讃岐獅子舞保存会の<sup>そごう</sup>十川と申します。今日は「コロナ禍における讃岐の獅子舞と獅子舞王国さぬき」というテーマで、少しお話をさせていただきます。よろしくお願いします。

## 1. 讃岐の獅子舞の概要

まず、讃岐の獅子舞について簡単にご紹介させていただきます。香川県は、日本一狭い県土ですが、最盛期には1,200もの獅子舞があったとされています。現在、人口減少や高齢化の影響で少し減少傾向にあるとはいえ、800団体程度の獅子組が活動しているといわれています。古いものは室町時代に獅子頭があったという記録もありますが、今のこのような形になったのは400年ぐらい前からではないかといわれています。

香川県の獅子舞の特徴は、図2のように20を超える流儀が伝わっていて、その流儀や地域ごとに、使用する道具や獅子頭が変わることです。私の地元はさぬき市ですが、この赤い丸の牡丹くずしという舞を奉納しています。

獅子舞の道具は、獅子頭であつたり、胴体にあたる<sup>ゆたん</sup>油単と呼ばれる布も、2つと同じものがないと言われており、獅子舞の流儀によっても使い分けられています。香川県では、張り子の獅子頭が一般的に使用されていて、猫獅子(毛獅子)や塗り獅子(唐獅子)が使われています。また、太鼓、鉦、笛という鳴り物が一般的には使われますが、笛はどちらかというと少なく、太鼓と鉦の獅子舞が主流です。太鼓のたたき方、鉦のたたき方も、地域や流儀によって全く異なっています。

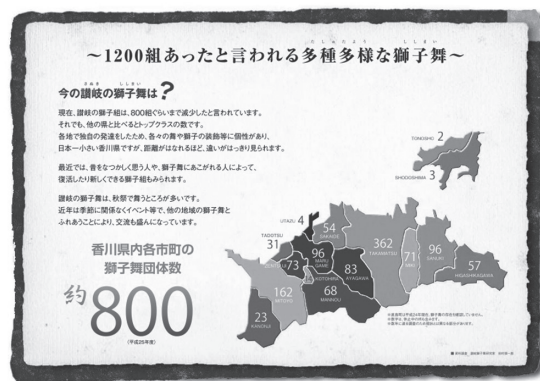


図1 1200組あったと言われる多種多様な獅子舞



図2 多彩な演舞の種類

## 讃岐の獅子舞とは



- 様々な道具  
2つと同じものがない獅子頭や油単（獅子の胴幕）流儀や地域ごとに異なる太鼓、鉦の使い方。  
。王国では一同に介し見ることが出来る。

図3 讃岐の獅子舞とは

## 2. 「獅子舞王国さぬき」について

本来であれば地域ごとに違う道具を使っているのですが、各地の獅子舞を一度に見る機会はどうもないのですが、われわれは例年11月の第1日曜日に「獅子舞王国さぬき」というイベントを開催しています。このイベントには、いつも60を超える獅子組が参加してくれていまして、一度に同じ場所でさまざまな道具、さまざまな獅子舞が見れる、香川県ではちょっと大きな獅子舞のイベントです。

われわれ讃岐獅子舞保存会は、2009年より始められた「獅子舞王国さぬき」の参加団体から数組の有志が集まって、2013年に発足した団体です。「獅子舞王国さぬき」の企画や運営を中心に、もともと少なかった地域を超えた他団体との交流を作り出すことを目的に活動しています。また、讃岐の



図4 多彩な油単と獅子頭

獅子舞の現状把握や、道具の修繕など困り事に関する情報交換を行いながら、獅子舞の保存や継承の問題を、研究や有識者ではなく舞手の立場から考えています。

その活動の一環として、獅子舞の魅力を広報するイベントへの参加や、そのイベントに参加するに当たって、普段交流がなかった数組が同じ舞を合同で練習することなども実現させています。また、こうした獅子舞の実演だけではなく、讃岐獅子舞保存会がオリジナルで製作したダンボールの獅子頭キットを用いたワークショップであったり、もう少し専門的に獅子舞を考えることを目的としたシンポジウムも開催したりしています。

## 讃岐獅子舞保存会



＊ 2009年より開催されている、「獅子舞王国さぬき」へ参加獅子組から数名の有志が集まり2013年に発足。獅子舞王国さぬきの企画、運営を中心にスタート。地域を超えた他団体との交流を産み、獅子舞の現状を知り情報を集約し、保存継承について舞手の立場から考えるきっかけを作り出すことを主な目的としています。

図5 讃岐獅子舞保存会

### 3. コロナ禍における獅子舞の開催状況

今日の本題の、コロナ禍という今年、讃岐の獅子舞はどうだったかといいますと、やはり春先の緊急事態宣言を受け、四国を代表する阿波踊り、よさこいなどが早々に中止を決定したので、県内でも多くのイベントが中止になっていきました。早いところではもう春先の緊急事態を受け、今年の獅子舞の活動を中止する団体もありました。そして6月には、香川県の新型コロナウイルス対策本部から、香川県の祭礼の獅子舞や「ちょうさ」と呼ばれる太鼓台の開催、奉納に当たって、コロナ対策をしっかりしてやるか、もしくは太鼓台、神輿などの密を避けられないようなものは、開催を見合わせることも検討してくださいという発表がありました。その発表を受け、次々と秋祭りに奉納する獅子舞や、太鼓台の巡行は中止になりました。

そうした中で、会員または「獅子舞王国さぬき」の参加メンバーに、今年の活動についてアンケート調査をしてみました。そうすると、「今年は仕方ないから来年頑張ろう」、または、「地域の神社総代から今年はやめましょうという声が多いので、やりたいのはやまやまですが今年はやめましょう」という決定をしたところが、ほとんどと言っても過言ではないぐらい、今年は獅子舞が行われませんでした。もちろんその中で、密を避ける対策をして奉納した団体や、何もしないわけにはいけないのでお祭りに合わせて獅子頭だけを持って参拝に行きましたという団体がありました。また、僕の団体

は、毎年獅子舞の時に奉納をしましたというお札を配っているのですが、獅子舞はせずにお札だけを  
持って各家を回り、また来年お願いしますというごあいさつだけさせてもらいました。

#### 4. 獅子舞王国さぬき ONLINE 2020

今年の「獅子舞王国さぬき」ですが、出演していただく獅子組の方の反応としては、「本来のお祭りに奉納もしてないのに王国には出せませんよ」という声が大多数を占めたので、夏ぐらいには僕らも「獅子舞王国さぬき」の中止を考えていました。ですが保存会には、「今年は獅子舞の音がしない」とか「子どもたちがさみしがってる」とか「どこかで獅子舞をやっていないんですか」という声が多く届きました。そうした声があったので、感染対策をしたうえで獅子舞王国をやりたいということになり、オンラインを軸にした「獅子舞王国さぬき ONLINE 2020」を今年は開催しました。

まず今年は、会場として室内ホールを借りまして、入場制限を行い、基本的にはオンライン配信を軸に開催することにしました。僕たちも初めてオンラインでの開催をしたのですが、例年のボリューム通りの規模を目指して6時間の生放送ということで、ちょっと挑戦してみました。当日は、3つの獅子組が会場に来て、生演舞をしていただきまして、お客さまも100人弱が事前予約ですぐに埋まってしまったというような状況でした。

例年の獅子舞王国は、60団体ぐらいがとにかく朝から夜まで自分たちの獅子舞を披露する、お客さまはそれを見て楽しむというイベントです。けれども今年はそういうわけにはいきませんので、せっかくなのでオンラインでしかできないことを行いました。たとえば、香川県の讃岐の獅子舞をもう少し知ってみよう、知ってもらおうという意図で、シンポジウムとまではいきませんが、「讃岐の獅子舞とは何だろうか」というテーマで座談会をしました。また、これは事前収録だったんですけども、僕らが使用する獅子頭や油単などの道具を作る職人さんの生の声を聞きたいということで、道具に対する思いや道具の歴史、どういう経緯で職人さんになったのかというお話を収録して出していきました。

次に、香川県の獅子舞は全国に伝播しています。その中から今回は、北海道と宮崎県に伝わる讃岐の獅子舞を、ぜひ地元香川の人にも見てもらうとともに、県外で保存している人たちにも香川との交



図6 獅子舞王国さぬき ONLINE 2020

獅子舞王国さぬき 2020 ON LINE



：獅子舞解説



：伝統工芸職人インタビュー『油車織』  
(大川原栄色本舗・大川原誠人氏)

：伝統工芸職人『獅子頭織』  
(松下獅子店・松下芳夫氏)

：伝統工芸職人『獅子頭織』  
(工房通心・秋山賢二氏)

図7 讃岐の獅子舞をめぐる座談会

流を持ってもらおうということで、北海道虻田郡洞爺湖町の<sup>つきうら</sup>月浦獅子舞さんと、宮崎県児湯郡都農町の松原獅子さんにご出演いただきました。このうち、北海道の月浦獅子舞さんには、北海道で実際に生演舞をしていただき、その様子を配信するというちょっと面白い手法を取り入れてやってみました。その後は、オンライン座談会として、子どもたちの生の声を聞いたり、北海道で獅子舞を保存していくにあたりどんなことを気を付けてますかとか、今年コロナの影響を受けどのような活動をしましたかということをお話しました。

次に、讃岐の獅子舞は活発に活動していますが、では、他県はどうなのだろうかと思い、せっかくなのでこの機会に少し覗いてみようということで、鳥取の因幡の麒麟獅子舞さんと、富山県射水市の<sup>ししえでん</sup>獅子絵田さんにご協力いただきました。実演は実現しなかったのですが、過去の映像などを使用し、香川県の獅子ではない獅子舞の盛んな地域の獅子舞を、香川県の皆さんに紹介しました。

その後は、やはり今年のイベントなので、今年の富山県や鳥取県では、どういう対策をして、奉納であったりイベントを行ったのかということ、少し質問させていただきました。その中では、やはり今年はコロナの影響を受けて何もできなかったという声が多かったように思います。そして、せっかくこういう機会なので、久保田さんにコーディネートをしていただきまして、香川県と鳥取県と富山県の間で相互の意見交換であったり、今後の展開を少し話し合う時間を設けました。小さいですけども、全国の獅子舞サミットの的な情報交換を行うことができました。

続きまして、「獅子舞王国さぬき」でもすごく人気の団体である、東かがわ市白鳥虎頭の舞保存会という、香川県でもちょっと異色の、岩手では虎舞などと呼ばれているような獅子舞について、伝承者をお招きして議論を行いました。虎頭の舞は、観客の皆さんにも人気なんですけれども、普段は見ているだけで、これが一体どういう舞なのか、何を表現しているのかは分からずに見ていました。そこで、実演動画を見ながら、その動きについての解説を入れてもらいながら話し合いました。これはすごく面白くて、僕も知らなかったようなことが知れて、次に見る時に大きく見方が変わる面白

## 獅子舞王国さぬき 2020 ON LINE

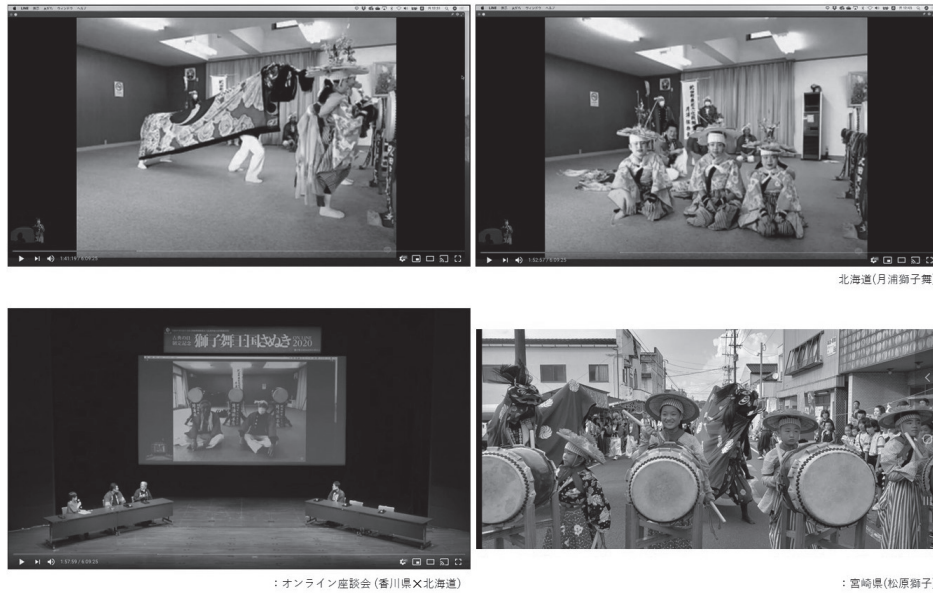


図8 北海道・宮崎とのオンライン交流

## 獅子舞王国さぬき 2020 ON LINE



図9 鳥取・富山の獅子舞の紹介

い経験になりました。また、こちらの獅子舞の皆さんは、すごく過去のデータというか情報を蓄積していき、そうした過去の動画や資料の紹介もしていただきました。

次が最後になるのですが、今回コロナの影響で会場では演舞できないけれども、ぜひ「獅子舞王国さぬき」に協力したいという3組の団体さんが、会場ではないそれぞれの神社や集会所の近くの広い所であったりという所で、オンライン特別出演をしていただきました。また、会場の舞台では、丸亀市の庄獅子組の皆さんに演舞を披露していただきました。そして、道具職人さんのインタビューの番

獅子舞王国さぬき 2020 ON LINE



全国でも獅子舞が盛んな他県は今年どうだったのか？  
これからどんなふうに展開していくのか？



：オンライン座談会（香川県×富山県×鳥取県）

図10 香川・富山・鳥取の獅子舞関係者によるオンライン座談会

獅子舞王国さぬき 2020 ON LINE

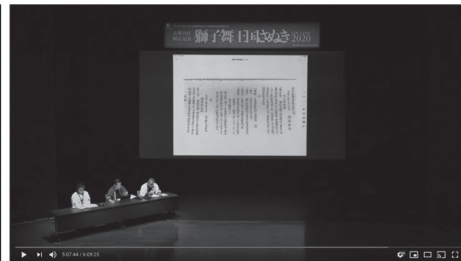
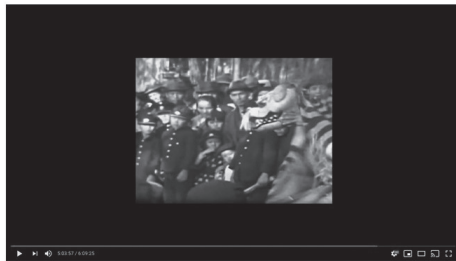


図11 白鳥虎頭の舞保存会との座談会

外編というか雑談編を流して、一日の終わりということになりました。

また、これまでご紹介してきた王国とは別に、今回これに合わせ、香川県立ミュージアムでシンポジウム「香川の祭礼・民俗芸能の現状と課題」を開催しました。こちらでは、より深く今年のコロナ禍が香川県の民俗芸能にどのような影響があったのかということ、獅子舞とは別の太鼓台の研究者や、念仏踊りの研究者と一緒に考えました。

獅子舞王国さぬき 2020 ON LINE



：一斉演舞【オンライン特別演舞】(赤門筋獅子組×仙尾獅子保存会 半田獅子舞保存会)



図 12

令和2年度文化庁文化芸術振興費補助金(文化遺産総合活用推進事業)

# 令和2年度 文化遺産シンポジウム

入場  
無料

日時 令和2年11月1日(日)  
14:30~16:30(開演15:00予定)

会場 香川県立ミュージアム  
地下1F 講堂  
香川県高松市北瀬町5-3

## 議 題

### 香川の祭礼・民俗芸能の現状と課題

少子高齢化・大都市圏への人口集中により、祭り文化の継続・芸能の継承が厳しい状況の中で、さらにコロナ禍に陥り、ますます困難な局面を迎えている中で、今後のそのあり方を考えていきます。

コーディネーター  
学校法人四国高松大学理事長  
高松大学・高松短期大学学長  
高松獅子舞保存会 顧問

パネリスト  
香川の伝統文化研究会 顧問  
大岡山北瀬町協議会  
香川県立総合研究センター 代表

個 昌道氏 田井 静明氏 菅原 良弘氏 尾崎 明夫氏

主催／獅子舞王国さぬき実行委員会

図 13 シンポジウム「香川の祭礼・民俗芸能の現状と課題」

## 5. おわりに

結局今年この「獅子舞王国さぬき」をやってみて、実際どうだったのかと言いますと、まず僕たち舞手の思いとして、僕たちは割と活発に活動していますので、そんなに危機感を持っていないというのが正直なところですが、これは今回各団体にアンケートを取ってみて気が付いたのですが、ほとんどのところが来年はなんとかなるだろうみたいな、やはりちょっと緊張感に欠けるというか、そこまで深く今回のコロナ禍の状況を捉えてない、考えてないと言うと言いは悪いんですけども、楽観的に「来年やったらいいやん」みたいな答えのほうが多かったように思います。逆に研究者の方とお話すると、今これはもう存続の危機やでという声までありまして、やっぱり立場や関わり方によって、すごく考える温度差があったなというのが、僕が今回思ったことです。

それを「もっとちゃんと考えないかなで」とか、「もっと真剣に考えないかなで」と言われても、なかなか考えることは難しいのかなというようにも思います。少しでも考えるほうに気持ちが向いていくようにする一方で、やはり僕らは今できることをやります。僕たちはいつもどおり獅子舞をやりまします。それで、危機感を伝えられる人が伝えるというか、すこし言葉がうまくまとまらないのですが、やっぱり気持ちをこっちに向けないかなよって言うのではなくて、みんなでやることをやって、そっちに向いていけば良いのかなというのが、今年王国を開催してみて思ったことでした。

今後香川県の獅子舞がどのような活動をして、これから何が必要なのかということを考える。こうしたことを、内容はどうであれ、少しでも考えることができたという点が、讃岐獅子舞保存会の活動であったり、「獅子舞王国さぬき」を、どういう状況であれ、どういう形であっても開催して継続していく意味だというように、今回やってみて思いました。

そういうわけで、もっと僕たちは王国を通じて、獅子舞を通じて、楽しみながら大事なことを伝えていけるような活動をしていきたいと思います。要するに僕たちは、讃岐獅子舞保存会が獅子舞を保存しますということより、獅子舞を保存するために、演者と研究者などさまざまな人とのハブになるような活動が、これからもやっていければ良いのかなと思いました。

ちょっとまとまりが悪くなりましたが、以上です。ご清聴ありがとうございました。



## 第2部 報告5

### 東京讃岐獅子舞のオンライン活用

中川 あゆみ（獅子舞応援団団長、東京讃岐獅子舞代表）

こんにちは。獅子舞応援団の中川あゆみです。東京都内で東京讃岐獅子舞という、香川県三木町の田中雷八幡神社に伝わる猫獅子の牡丹くずしのひとつを継承する団体の運営を行っています。本日は、東京讃岐獅子舞のオンラインを活用した取り組みについてお話しいたします。

#### 1. オンラインツールを用いた獅子舞の練習

さて、このコロナ禍で、日常が大きく変わる新常識ができました。3つの密を避ける。密閉、密集、密接。簡単に言うと室内に集まるな、距離を取れです。この3つの密を避けるために生じた課題が、大きく2つあります。それは、練習ができない、お祭りができないということです。これらの課題を解決するのがオンラインの活用です。

日頃、皆さんはどんなオンラインツールを活用されていますでしょうか。SNS、ウェブサイト、いろいろありますね。このコロナ禍で非接触、リモートが推奨され、オンラインツールの利用が広がりました。特にここ東京は、6月中はステイ・アット・ホーム、外出自粛となったため、オンライン会議ツールやライブ配信の利用が爆発的に広がりました。

まずは練習について、どうやってオンラインツールを活用していけば良いのでしょうか。このコロナ禍で集まらない、集まらないから練習ができない、練習ができないから継承者が育たない。これって、そもそも地方にあった課題と似ていませんか。継承者がいないから練習ができない、練習ができないから人が集まらない。この課題を解決するのがオンライン会議ツールです。

皆さんも Zoom という名前は聞いたことがあるのではないかと思います、ほかにもいろいろな会議ツールがあります。東京讃岐獅子舞も Zoom でミーティングは行っていましたが、外出自粛となったため、オンラインで練習するツールとしても試してみました。Zoom 以外にもバーチャルオフィスの oVice（オヴィス）や、オンラインセッションツールとしてヤマハの提供している SYNCROOM（シンクルーム）も試してみました。獅子舞の継承としては機能が Zoom より劣る部分が多く、現時点では Zoom が一番使いやすいです。

どのように使うのかですが、オンラインツールの欠点は、混線と遅延です。Zoom は音が混線して消えることがよくあります。これを解消したのがヤマハのシンクルームでした。メトロノームを使っているものはシンクルームで対応可能です。そして遅延ですが、音と動画がずれてしまいます。参

加者各自の通信環境の違いも大きく影響します。このずれを最小限にできそうなのがオヴィスでしたが、まだ若いサービスのため不安定でした。すごくいいツールなので、今後に期待しています。従いまして、混線と遅延を知った上で Zoom を使うことになります。

Zoom を利用したオンライン練習では、1つの画面に見本となる楽器と舞があつて、あとは各々練習したいパートを行います。その時には、ホスト以外は全員マイクをミュートにして、音の混線を防ぐことが大事です。演奏の音が消えることがあります、オーディオ設定の背景雑音の抑制を低くすれば解消されます。遅延も生じますが、慣れてくるとどれくらい遅れているのか分かるため、問題ではなくなりました。ここで実際の練習の様子を動画で見ていただきましょう。

以上のように、練習はオンライン会議ツール。現時点では Zoom をお勧めいたします。



図1 オンライン練習の画面



図2 オンライン練習の様子

## 2. 祭りのオンライン化

続きまして、祭りについてです。現在、神事だけは粛々に行われ、獅子舞の奉納が中止になっているところが多いようです。ニワトリと卵の話になりますが、本番がなければ練習の企画ができず、しかし練習しなければ獅子舞ができません。そのため、継承者のモチベーションを保つために祭りは必要で、神社の神事とセットにできなくとも、奉納の獅子舞を企画することは重要でした。そこでお祭りの仕組みをオンライン化できないか考え、実際にやってみました。使用したツールは2つ。クラウドファンディングとオンラインライブ配信サービスです。

なぜこの2つを使用したのかですが、獅子舞の継承を行うにはお金がかかりますし、お祭りを行うにもお金がかかります。道具の維持費やオンライン練習のためのサービス利用料、練習のための会場費に神社のお祓いや場所代など。それらの費用をいろいろな方からお花として集めることで、お祭りを開催することができると考えました。そこでクラウドファンディングでお花を集め、オンラインライブ配信でバーチャル参拝してもらうことで、お祭りのオンライン化、オンラインでの再現を行いました。ここで、われわれが行った事例を動画で紹介したいと思います。

では実際にやってみてどうだったのか。クラウドファンディングは10月14日から11月9日まで行い、達成率は76%でしたが、初の試みで、戦略もないまま行ったものとしては珍しい達成率で大成功と言えました。クラファンではなく直接支援したいとの声も多く寄せられています。

オンラインライブ配信は、最初はYouTubeで行うことを考えましたが、告知と手軽なスマホからの配信で検討したところ、facebook（フェイスブック）ページでのライブ配信が最適と分かり、11月29日にフェイスブックで動画配信を行いました。集客を避けるために、どこで獅子舞の奉納を行



図3 獅子舞奉納のオンラインライブ配信



図4 獅子舞奉納のオンラインライブ配信

うかは一切公表せずに、配信の日にと時間だけの広報でしたが、結果としては1日で再生回数が200となり、コメントも多く寄せていただきました。大きなイベントではなく、フェイスブックページのフォロワー数が300にも満たない小さな団体の企画としては、上出来ではないでしょうか。

また、私たちがこの奉納獅子舞のオンラインライブ配信を企画したことから、埼玉県白岡市にある獅子博物館主催の全日本獅子舞フェスティバルが、オンラインで開催されることとなったので、広く貢献できたのではないかと思います。これらの実証を踏まえて、練習とお祭りはオンラインで行うことが可能と言えます。

### 3. おわりに

これから、5G、6G、IoTが当たり前の社会になります。そうなる課題であった通信の遅延や混線は解消されますし、オンラインツールもどんどん進化していくでしょう。きっと当たり前のようにVRやARを利用することになるのだと思います。なので、皆さまにもオンラインの活用をお勧めします。しかし、そのために必要な準備とデメリットもありますが、今回は私の準備不足のためにここで力尽きたので、ここまででとさせていただきます。それはまた別の機会にお話しできたらと思います。ご視聴ありがとうございました。

では最後に、これもオンラインの活用なのですが、私がSNSで鬼滅の刃をパロディーにして、獅子舞が悪疫、魔を祓っている漫画を描いて投稿したところ、それを実写化しようというお声をいただきました。それを6月から企画しまして、11月27日にその動画が完成しましたので、そちらをどうぞご覧ください。



図5 獅子舞のPV動画



図6 獅子舞のPV動画



## 総 合 討 議

【司 会】久保 田裕道（東京文化財研究所 無形民俗文化財研究室長）

【パネリスト】吉田 真彦・宇都宮 将・田仲 桂・十川 みつる・中川 あゆみ

**久保田裕道：**それでは、第15回無形民俗文化財研究協議会の総合討議を開始いたします。本日の進行を務めます、東京文化財研究所無形文化遺産部の久保田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

今年度のテーマは「新型コロナ禍の無形民俗文化財」です。毎年東京文化財研究所では協議会をいろいろなテーマで開催していますが、今年は新型コロナウイルス感染症防止のため、このような完全オンラインの映像配信で行うことになりました。例年ですと、各登壇者からご発表をいただき、その後に総合討議という形で進めていますが、今年にご発表も映像で収録させていただきました。まず、東文研からの趣旨説明の映像がありまして、その後、各ご発表として第1部で3人、それから第2部で5人の方にお話をいただいています。この総合討議は、それらを踏まえた上での総合討議になりますので、もし発表を聞いていないという方がいらっしゃいましたら、まずそちらのほうをご覧ください、その上で総合討議をご覧くださいと思います。

それから、この映像サイトにはアンケートページも設けています。よろしければご視聴後に、アンケートにもお答えいただけたら幸いに存じます。本協議会の内容は、年度末に報告書としても刊行いたしますけれども、その中でアンケートのお答えは掲載させていただきたいと思います。また、アンケートにお答えいただいた方で、ご希望の方には協議会の報告書を先着順で送らせていただきますので、併せてどうぞよろしくお願いいたします。

それでは総合討議に入りたいと思います。討議に参加されているのは、第2部でご発表いただきました5名の方々と、いずれも皆さん民俗芸能を実際に伝承している方々です。例年ですとフロアの参加者からご質問をいただきまして、それにお答えするという形で進めていますが、今年はまず私から質問を投げかけまして、それにお答えいただくような形で始めてみたいと思います。まず順番にご紹介しながら質問をさせていただきますので、発表者の皆さま、どうぞよろしくお願いいたします。

### 1. 質疑応答

#### 吉田真彦氏との質疑応答

**久保田：**まず、岩手県の吉田さんにお聞きしたいと思います。吉田さんは岩手県在住で花巻市の市役所にお勤めということで、早池峰神楽として有名な大償神楽の伝承者でもいらっしゃいます。その神楽の伝承をどのようにやっていくかということについて、新しい試みも含めてお話をいただきました。

吉田さんのお話の中で、以前、地元以外の希望者にも指導したことがあったけれども、結局近隣の在住者と地縁の方々だけになったというお話がありました。地元以外の希望者が根付かなかったのは、

なぜだったのだろうかということが1つ目の質問です。

それからもう1つ、今回実証実験をやられて、たぶん伝承者側の大償の方々の反応についてはデータがいろいろと得られたのだと思います。その反面、参加者の側、今回は大学の方々が参加なさったと思いますが、実際にもしこれを広い範囲の方々に向けて実行する時に、どういう層に向けてアピールをして、どのようにして根付かせていくのかということについては、何か想定ができたのでしょうか。この2つの質問をお伺いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

**吉田：**ご紹介いただきました、岩手県花巻市で大償神楽に取り組んでいます吉田でございます。

1点目についてですが、お二人が県外から移住されて取り組んでいたのが、大体20年か30年ぐらい前だったと記憶しています。実際に私も小学校、中学校ぐらいの時に、その方々とはお兄ちゃんみたいな感覚で接していました。

1人の方は、腰を怪我して、ちょっと舞い手としては活動ができなくなっていました。大償神楽をやりながらマッサージ師の仕事をされていたと聞いているのですが、結局神楽がやれなくなってしまったので、そのままご実家にお帰りになられたというように聞いています。

もう1人の方は、なんと申しますか、大償神楽も好きなんだけれども、ほかにもまたやりたいことができたので、他の地域へ移住をされたというように聞いています。ただそのお二人とは、今でも公演などには足を運んでいただいたり、手紙でやりとりするなど、交流はあるというような状態です。

次に2点目についてです。今回大学生を外部からの参加者として設定しましたが、大学はひとつ有効なターゲットだと思っています。というのは、民俗芸能に興味のある方自体は、おそらく日本全国見てもそんなに多くないだろうというのが正直なところです。そうした中で、大学はさまざまなことに興味を持っていて、さまざまな地域から人が集まってくる場所です。そこで学生が、地域に関する研究をする中で、おそらく民俗芸能に触れるという可能性は非常に高いと思っています。また、大学の中にも、芸能の伝承地域に近い大学、もう少し離れた場所にある大学というように、選択肢はさまざまあるかと思いますが、大学は、地元以外における民俗芸能の新たな伝承者を生む可能性を秘めたところだと思います。

それからもう1つ、さまざまな地域からいろいろな価値観を持っている人がいて、民俗芸能に興味がある人がいるだろうというのは、ある程度大きな規模の企業さん。距離で考えると、おそらく東北に支社があるような大きい企業さんであるとか、首都圏の企業さんでも、余暇活動のような形で参加をしてもらうような方々への入口は作っておいて、あとはその中からどれぐらいの人たちが通ってもらえるかというのが、1点あるかと思っています。こういった方々が、実際に演じることに参加することになると、実証実験の参加者から実際に出た意見を踏まえると、通ってやることのゴールがどこにあるのかを伝承地側からも明確に示すことが大事です。あとは、技術的なフォローに関して、向こうから来てもらうだけではなくて、こっちも向こうへ行く。こういう状況ですのではなかなか難しいのですが、そうしたことをオンラインツールなどを使いながらやっていくということが、今後やっていけることなのかというように考えています。ちょっとまとまらないですが、以上になります。

**久保田：**ありがとうございます。吉田さんのお話を伺って、ほかの登壇者の方も、もし聞いてみたいことがありましたらどうぞ聞いてください。

**中川あゆみ：**中川と申します。ちょっとお伺いしたいのですが、大学生をターゲットにして今回プロジェクトされたとのことなんですけれども、その大学生がリピートをしそうなのか、1回きりの体験で満足してしまうのか。あと大学側で、今後希望者、応募者は増えそうなのかという、その感触を伺

えたらなと思います。よろしくお願いします。

**吉田：**中川さん、ありがとうございます。実証実験も本当は、今年の5月から8月ぐらいに、もう1回課題を直すためにやるということにしていたのですが、ご存じのとおりこういう状況ですから、岩手に来るための移動制限がかかってしまいました。実証実験が終わった最後の段階では、なんらかの形で神楽に関わりたいという意見は、参加した大学生の皆さんからいただいていたところです。なので、仕掛け次第では今後もリピーターとして大償のほうに来ていただいて、演者としての活動に最終的に向くのか、バックアップをする立場になるのかはまだまだ未知数ですけども、可能性としてはあるのかなと思います。

あとは発表の中でもお話ししましたが、実際に参加した大学生にオンラインで魅力を伝えるワークショップを主催していただきました。これについては、やっぱり大学生という若さならではの発想かなというところもあるのですが、大学生とつながることによって、こういう民俗芸能の伝承活動の形もあるというアイデアも頂くことが出来ました。その上で、われわれ演者側がこうした資源をどう活用していくかということも含めて、今後総合的に経過を見ていきながら、コロナが明けたあかつきにはもう1回募集をかけながら、ほかの大学等にも声掛けをして実践していきたいなというように思っています。

中川：ありがとうございます。今後の展開にもすごく興味がありますので、楽しみにしています。

### 宇都宮将氏との質疑応答

**久保田：**ありがとうございます。続きまして今度は宇都宮さんをお願いしたいと思います。

中国地方も大変神楽の盛んな地域ですけども、宇都宮さんはその中でも有名な島根県の大元神楽を伝承されています。今回は、コロナ禍における大元神楽の試みを、いろいろとご発表いただきました。

それではお聞きしたいのですが、まず、何ができるか、できないのかを決めるというガイドライン作りについてです。ガイドラインの話を伝承者の方々にされるようになってから、祭りをやめようという意見が減ったというのが非常に印象的でした。そうした祭りをやめようという意見が最初出たというのは、もちろんコロナの感染防止のためにとということもあるとは思いますが、それ以外にも何か、消極的にならざるを得ないような理由はあったのでしょうか。

そしてご発表の中では、氏神様への思いですとか、住んでいる地域への思いを新たにされたということをお話しされていました。こういう信仰的な部分は、特に神楽なので信仰が重要視されていると思います。けれども最近、こういう面が少し変わってきているとか、あるいはそれがコロナ禍で少し変わったということがありましたら、お話を伺いたいと思います。よろしくお願いいたします。

**宇都宮将：**こんにち。市山神友会の事務局を務めております宇都宮と申します。よろしくお願いいたします。

2つのご質問をいただいたのですが、双方とも答えが共通してくるかなと思いますので、まとめてお答えさせていただきます。

祭りをやめようという意見が減ったというところは、確かに好印象でした。そして今いただいたご意見に、コロナ感染以外の部分があったのかと言われれば、結論から申し上げますと、やっぱりあるというのが率直なところかなと思っています。本当はないというように信じたいなと思っているのですが、その問題が2つ目の質問への答えとも重なってくると思います。

単刀直入に言いますと、面倒ということが一つ大きな問題だと思っています。一言で面倒と言うと

非常に誤解を生みそうなのですが、あえてその部分も恐れずお伝えしなければならないかなと思います。おそらく皆さんのところもそうだと思うのですが、地方はみなどこも人口減少しています。でも、地域でやらなければならないことだけは常にずっと残っている。そうすると、一人一人に課せられた任務というか責務が、どんどん膨大になっていって、神楽や祭りといった神事ごとのほうに気持ちが向かなくなるタイミングがあるんだろうなというのが、率直なところ。おそらく神楽を伝承しているメンバーのほとんどが、家族やそれから仕事、そして当然神楽、ほかにはおそらく消防団員だったり、ほかのいろいろな団体に所属をしているはず。1人が大体4つないしは5つぐらい、それぞれいろんな役を受け持ちながら365日活動しているということになれば、当然自分たちの体力と精神も疲弊して限界を迎えるのではないかなと思います。

そうした中で、神楽がこの時期に来るよっていう時に、好きな人間は優先順位が当然高いですから、神楽頑張らなきゃいけないなってなりますけれども、少しその優先順位が下がってくれば、ちょっと神楽の練習に行くのも面倒くさいなと思ってしまいます。神社の総代の仕事とかもそうですけれども、お宮に上がらなきゃいけないなという時に少しずつ足が重くなっていったり、遠のいていったりするものが、率直なところかなと思っています。

こうした状況に加え今年はコロナ禍でしたが、僕たちは活動を継続することができました。けれども、そこでやっぱり、もう一回気を引き締め直さなければいけないんだなということを、みんなが気付いたのではないかなというように思っています。以上です。

**久保田：**ありがとうございます。確かにそうですね。第1部のほうで滋賀県からのご発表もあったのですが、やはり小さな行事でも、なかなか続けることが難しく、コロナ禍が渡りに船というわけではないけれども、コロナを機にやめてしまおうかという話もありました。やはりその辺が難しいところですね。コロナの問題はもちろん大きいのですが、そもそも、過疎化や少子高齢化、伝承者不足などの問題が地域にあったうえでのコロナ禍ということもありますよね。

それでは、どなたか宇都宮さんにお聞きしたいことはありますか。

**中川：**すみません、また中川です。その決断が難しい課題を、やってもいいように話が進んでいったと思うのですが、その話し合いは大体どれくらい的人数で行われて、スムーズだったのか、それとも時間をかけてとても苦戦したのかということをお伺いしたいです。

**宇都宮：**神楽の奉納に関しては、段階を経て話し合っていたので、当然時間はかかりました。まず一番初めに話し合ったのは、市山神友会の役員6名です。神楽団の会員全員ではなくて、まず役員の中で話し合いを行いました。ここではほぼ全員一致して、奉納に向けて継続していくのでいいだろうということだったので、ここはスムーズにいきました。

次に、自治会と総代会などの神社を守っている方々にお話を持っていきました。総代あるいは自治会の会長さんは、年配の方々が務められていますので、少し難色を示されたということは実際にありました。ただ、僕たちも手ぶらで話をしに行くとなると熱意だけでなんとかしなければいけないのですが、いただいたご意見等にすぐさま答えられるように準備しようというところが、ガイドライン作成の最初のきっかけでした。なので、話がスムーズに進むようにガイドラインを作成して、言われたことにすぐさま答えられるようにしておいたので、自治会と総代会との話し合いはそこまで難しくはなかったかなと思います。

しかしながら、最後の最後までやるかやらないか決断を迷うことがありました。それは新型コロナ患者が発生するかどうかです。もし僕たちの住んでいる江津市でコロナ患者が1名でも出たら、中止

の方向で考えようということは常に考えていました。それがもしかしたら当日の朝かもしれません。でも練習だけはしておいて、当日やっぱり出ましたんで、ごめんなさい、やめますっていう準備も同時にしていました。それなので、あまり話を進めて行く上で難しいタイミングがあったかと言われたら、あまりなかったかなと思っています。

**中川：**ありがとうございます。しっかり準備されていたのがすごく参考になりました。

### 田仲桂氏との質疑応答

**久保田：**ありがとうございました。それでは続けて3番目に、田仲さんをお願いしたいと思います。田仲さんは福島県のいわき市にお住まいで、いわき市に非常にたくさん伝承されていますじゃんがら念仏踊りという芸能に携わっておられます。これまで東文研の事業では、東日本大震災後における福島の民俗芸能の状況をお話しいただいたりして、震災後の問題、そして今回のコロナの問題と、続けてお話しいただくような形にもなりました。

それでは田仲さんにご質問させていただきます。じゃんがら念仏踊りの場合、ほかの民俗芸能と大きく異なる点として、新盆供養という、残された遺族にとって特別な死者供養といった目的があると思います。やはりいわきの方々にとっては、新盆にじゃんがらがからかからないというのは絶対に許せないというか、欠かせないものというような認識があるのではないのでしょうか。それから、田仲さんがご所属の磐城じゃんがら彩志会は、各地域のじゃんがらの伝承団体とは、違った形で作られたものなのでしょうか。彩志会がどのような位置付けで作られたのかということ、教えていただければと思います。

そしてもう1つ、お話の中で印象的だったことは、10団体の連合会として内郷じゃんがら会議があるということです。コロナなどの大変な問題が起きた時に、こうした連合会的なものがあるというのは、心強い存在だと思います。いわき周辺のほかの団体では、そういった動きはないのでしょうか。また、伝承団体が連合することが役に立ったということもありましたら、併せてお聞かせいただければと思います。

**田仲桂：**田仲と申します。どうぞよろしくお願いします。

まず1点目は、やはり新盆にはじゃんがらを呼ぶものだというのは、市民の意識としては定着していると思います。現在は、じゃんがらを呼ぶ家には事前予約をお願いする団体が増えています。予約なしで飛び込みで新盆のお宅へ行って、「じゃんがらどうですか」「じゃ、お願いします」というものはないことはないんですが、それよりは予約方式を採用して、団体のほうで時間割を決めて訪れるということが圧倒的に多い印象です。じゃんがらを迎える家のほうでも、予約のことを分かっているような方が増えてきているなという印象があります。

自分の住んでいる地域に地元のじゃんがら団体がいない場合もあるのですが、そういう人もやっぱりじゃんがらを呼びたいと思っています。どのようにして団体につながっていくのかというと、まず友人・知人などのツテを頼るのが一つ。誰もいない場合は、市役所とか支所に電話をかけて団体を紹介してもらおうということが多いそうです。市役所は問い合わせに答えるのが大変なので、3年ほど前に文化振興課文化財係がホームページを作りまして、了承が得られたじゃんがら団体の一覧リストを公開しました。呼びたい方はここを見て探してください、そして自分で団体に連絡してくださいねというようなページです。

また、葬祭場とじゃんがら団体が連携しているケースもあります。いわきでは、葬儀をした家の新

盆の準備なども葬祭場が対応するのですが、新盆にじゃんがらを呼びたい方が葬祭場にお問い合わせすると、連携する団体に連絡がきて、それで供養に行くというようなこともあります。葬祭場のプランに「じゃんがらセット」とでも呼べるようなものがあるんですね。

これまで紹介してきましたように、やっている自分としてはもちろんそうなのですが、実際に新盆を迎える家の側にも、じゃんがらをやるのは当たり前という認識があるのだと思っています。

磐城じゃんがら彩志会についてですが、当会は愛好会です。特定の地域に根差しているのではなく、イベントへの出演オファーがあったことがきっかけで結成された団体になります。そのオファーは、通常であれば既存の団体さんが受けるものではあったのですが、場所的にも日程的にも難しく人数が揃いませんでした。各団体のメンバーを集めた連合チームで対応せざるを得なかったというところが、始まりになった団体です。ですので、もともと自分の所属団体があってプラスアルファで連合チームに入る人、もっとじゃんがらをやりたい人、あとは初心者が集まってやっているのが、磐城じゃんがら彩志会になります。

この会の活動を通して、自分の地域にはじゃんがらがいないけれど、実はやりたいと思っている人が結構いるんだ、その数が想像以上に多かったというのが実感として感じているところです。芸能のすそ野を広げる体験の会でいいなというように思っています。そこが入口になっていって、たとえば本格的にやりたいけれども自分の地域に団体がいないのならば、ほかの団体さんをお願いして入れてもらうなんていうことになっていくような、担い手を増やしていけるようなことができればいいなと思っているのがひとつです。

また、既存の団体さん、それぞれの地域で活動している団体さんが対応できないことがあります。たとえば、学校で教えたり公民館や市民講座などで講師を務めることです。これらは、やはり昼間仕事をしている人が多いので、なかなか対応するのが難しいところがあります。その点彩志会は、自分の団体プラスアルファでじゃんがらをやりたいと言っているぐらいモチベーションが高い人の集まりなので、仕事の融通を利かせてもらって、学校や公民館で教えるというようなこともできています。こうした既存の団体さんができないことをカバーするような位置付けも担っていければ良いな、実際に担っているのだらうなというように思っています。

それから、私たちの団体は盆回りをしません。メンバーがもともと所属している各自の団体に戻ってしまうので、盆回りはできないというところがあります。その代わり、初心者で新しく入った人たちが盆回りを経験したければ、親団体をお願いして参加させてもらうということをしています。親団体は人数的な補強ができ、私たちは盆回りをやってみたい人に体験させてあげられます。今のところはウィン・ウィンな関係です。もし何かデメリットが出てくるとすれば、これからなんだろうなという段階です。

あとはじゃんがら会議です。内郷じゃんがら会議では、内郷地区の10団体が集まっていろいろな議論をしています。これは今年に限った話ではなくて、毎年やっているものです。今年はたまたまコロナ禍だったので、今年の盆回りをやるのか、やらないのかという話をしたわけですが、参加している団体にとっては「非常に役に立った」「他の団体の話を聞けてよかった」「皆の前でしゃべることができて良かった」という意見が出ていました。参加された団体さんにとってはためになった会議だったのだらうなと思います。また、私も傍から聞いていて、「迷っていたけどこういうようにすればできるのか」とか、「そういう意見はやっぱりうちにはできないな」というような、各団体の判断の尺度を確認し合えたことはすごく良いことだなと感じました。こういう議論の場があるということは、

継承者にとって救いになったんだろうなと思いました。あと、この会議を取りまとめてくださっている方が、すごくきめ細やかで熱心なんです。こういう場で今回7団体がやる、3団体がやらないというように意見が分かると、なかなかやらないとはいにくいような雰囲気が出てしまう時もあると思います。そういうところへの配慮を、取りまとめている方がとてもきめ細かく対応していたので、そういう人がいるっていうのも、とても重要なものなんだなというように思っています。

ほかでこうした動きがあるのかどうかというと、個別にお友達同士とか、知り合い同士とか、つながっているところはもちろんあるのですが、地区の中の全部の団体が集まって、こういう取り組みをしているというのはいないです。

**久保田：**ありがとうございました。今のお話で聞きたいことありましたらどうぞ。

**中川：**何度もすみません。動画の中で簡素化の話が出ていたのですが、事例で三匹獅子舞を出されていらっしやったんですけれども、じゃんがらの場合は簡素化が曲なのか、人数なのか、また最少何人でできるものなのかを教えてくださいたいです。よろしくお願いします。

**田仲：**じゃんがらの簡素化は、できないことはないんです。できないことはないんですけれども、踊りの中でやるというのはなかなか難しいと思います。唄と手踊りのパーツがあるのですが、3番までの唄を2番までにするといった簡素化が、スムーズに次の踊りにつながる団体と、つながらない団体があるんです。なので、団体によってはできるところもあるし、できないところもある。私が所属しているところは、ちょっと難しいなという印象です。

あと、じゃんがらの通常の人数は、太鼓が3人、鉦が太鼓1人につき3人。だから9人プラス提灯持ちが付きます。なので全部で12～13人です。それが一般的なベースと言われているものなんですけど、そこまで人が集まらないので10人弱でやっているところもありますし、多ければ多いほど見栄えもするので、もう少し多い人数でやっているところもあります。

今回の内郷じゃんがら会議でも出ていた話題が、人数制限をするかどうかでした。通常だと首都圏から帰省して、じゃんがらに入って新盆回りをするという人もいますけれども、そういった人たちはお断りしたりとか。あと、高校生が参加する団体さんもあるんですが、学生はお断りをして人数を少なくして、簡素化してやるということをされていた団体さんがありました。

**中川：**分かりました。ありがとうございます。

**久保田：**ほかの方よろしいですか。ちなみに、彩志会にはいろいろな団体の方が入っておられるということですが、団体ごとに微妙に演技方、たたき方などは変わったりしていないのでしょうか。それを共通の形でやるというのは、どのようにしているのでしょうか。

**田仲：**もう覚えてもらう。ここの団体って決めて、そこに合わせてもらうというやり方をしています。なので、合わせるほうはとても大変だと思います。鉦の持ち方とかも少しずつ違うので。

**久保田：**なるほど、分かりました。ありがとうございます。

### 十川みつる氏との質疑応答

**久保田：**それでは続いて、香川県の十川さんにうかがいたいと思います。十川さんは、讃岐獅子舞保存会という各地域で活動する獅子組の連合団体を作られていて、さらにはご自身地元の獅子組にもご所属されています。

香川県は、面積は小さいですけれども800ほどの獅子舞が伝承されている大変な獅子舞県です。その獅子舞を毎年秋に60団体ほど高松に集めて、「獅子舞王国さぬき」というイベントをこれまで

開催してられました。それが今年は、コロナ禍のために対面ではなく、オンラインイベントとして開催されました。実は私は現地に行かせていただいていたのですが、このイベントについてお話をうかがいたいと思います。

まず1つ目としまして、オンラインでのリアルタイム配信についてです。今回のイベントでは、会場のホールにお客さんを入れての実演があって、さらには遠隔地、あるいは県内との中継もやられるなど、準備や運営が非常に大変ではなかったかと感じました。スタッフや機器の配置など、いろいろとご苦労されたのではないかと思います。その辺りの裏話を少しお聞かせください。

それから、昨年までの対面でのイベントと、今回オンラインでやったことを比べてみて、これは良かったとか、これは対面のイベントの時にも応用できるのではないとか、そうしたメリット、デメリットがありましたらお聞かせ願えればと思います。

**十川みつる**：讃岐獅子舞保存会の十川と申します。よろしくお願いします。

今年の「獅子舞王国さぬき」は、YouTube を利用してオンライン開催をしました。基本的に当日の配信や準備段階での作業は、業者さんにお任せしていました。それなので我々としては、当日の大変なことよりも、準備の段階で大変だったということが多かったので、その話を中心にさせていただきます。

まず一番大変だったというか、やっていく中でいろいろ問題が出てきた部分が、ネット環境の整備です。現在だと当たり前のようにスマホがつながったり、会場に Wi-Fi が飛んでいたりということがあるのですが、やはり配信をする以上は専用回線が必要だということがわかりました。オンライン配信をやりようと思い始めてから、最初に行き当たった問題が、会場にネット回線の引き込み工事が必要だという問題です。

そして、最初に予定していた配信は、カメラを4台会場に置きまして、その全てにチャンネルを割り当て、視聴者の皆さんが自分で見たいものを選んで、見たい角度から見られるというシステムで配信を予定していました。これは YouTube でもそういう仕様ができることになっていたのですが、直前に、10日ぐらい前になりまして、YouTube が突然そのサービスを中止するということになってしまいました。そのため、結局のところ一般のテレビのように、全てのカメラをいったん1カ所に集め、スイッチャーが切り替えながら配信をしていくことになり、直前にそういう対応を迫られることになりました。要するに、自分たちで全てを構築するのではなくて、YouTube などのどこかが提供するサービスを利用する、それを提供する業者さんのサービスに依存をしているという部分で、直前の対応などが結構大変だったなということがありました。

それと、やはりどういうトラブルが起きるかわかりません。たとえば、オンラインで各地をつないで中継する中で問題になるのは、こちら側の回線もそうなんですけれども、やはり中継先の現場の皆さんの通信環境や機材に依存してしまうところでした。ですが、こちらから先方にこうしてください、これを準備してくださいということはなかなか言いにくい。たとえば、今回北海道、富山、鳥取と生でつないで、いろいろな説明や、演舞をしていただきました。けれども当日は、あちらの音声や映像が途切れたり、こちらの音声や映像が相手に届かないというようなことが出てきてしまいました。やはり事前に、演舞をする場所やお話をする場所へ時間を割いて行ってもらい、当日使うスマホやネット環境を利用したリハーサルを、1回なり2回お願いする必要がありました。つまり、こちらである程度準備をしていますが、全ては当日にイレギュラーな事象が生じてしまったり、先方任せになるという部分があったので、なかなか難しいところがありました。

そして、一番何が問題だったかという、コンテンツを詰め込みすぎたかなということです。もし今後配信をされる機会があるとするならば、なるべくコンテンツを絞ったほうが良いなと思いました。

次に、対面とオンラインという開催方式の違い、オンラインのメリットとデメリットという部分で言えば、まず今回は会場が室内会場になったので、参加してもらう団体数に限りがありました。例年であれば60団体ですが、とてもじゃないけどホールでそれを一斉に、時間内に披露することは無理なので、そうした制限がとにかくありました。

また「獅子舞王国さぬき」は、香川県の獅子舞の現状や希少性をより多くの方に伝えていきたいという目的で開催しているイベントです。例年の対面での王国であれば、イベントとして楽しみに来る方も大勢おられるのですが、今回の配信では、獅子舞に何かしらの関わり、興味がある人しか来ていないという部分で、僕らが想定している、知らずに遊びに来た人にも香川県の獅子舞のことを伝えていくという部分では、ちょっと難しかったなというように思います。その反面、興味のある人により深く知ってもらうためのさまざまなコンテンツを準備できました。

あと今回やってみて良かったのは、場所の確保が簡単であるということと、音に関してのクレームなどの心配がなかったということです。今年のイベントは、始まってしまえば僕らは安心してお任せしていただけることができました。以上です。

**久保田：**ありがとうございました。何かお聞きになりたいことがありましたら、どうぞ。

**中川：**中川です。今回、シンポジウムとオンラインの王国が開催されたとのことですが、この2つのターゲットは違ったのでしょうか。それとも同じターゲットをイメージされていたのでしょうか。

**十川：**そもそも「獅子舞王国さぬき」というイベントは、獅子舞自体を楽しむ、獅子舞のお祭りとして楽しむということを、中心にして開催しているイベントです。

それに対してシンポジウムは、より深く香川県の獅子舞について、獅子舞に限らないさまざまな民俗芸能の抱える問題を議論して共有しようということで、過去3年ぐらい続けて開催してきました。シンポジウムと王国はターゲットがそもそも違いますので、会場もやり方も分けて開催しています。

**中川：**ありがとうございます。たとえば、例年だとワークショップなどで子どもにダンボール獅子が大人気だったりするんですけど、今年は出演以外で子どもの参加は何かあったのでしょうか。

**十川：**会場に見に来られた方に子どもさんが多かったのはありました。ワークショップの開催ももちろん考えたのですが、今年はとにかく人が集まることを避けるためのオンライン開催なので、やりたくてしょうがなかったんですけども、密になるから無理だということで、ワークショップは開催しませんでした。それなので子どもさんたちは見に来て、獅子舞を生で見ることができたということぐらいだったかと思います。

**中川：**でも子どもが会場に来てくれたんですね。なるほど。ありがとうございます。

**十川：**はい、ありがとうございます。

**久保田：**ほかの方、よろしいですか。

**吉田：**今回オンラインのリアルタイム配信というやり方で、たぶん複数の団体さんが参加されたというように思うのですが、この活動を受けて、たとえば自分たちの団体でも個別にやってみようかみたいな、オンラインでのリアルタイム配信で何かやってみたという取り組みがもしあったのであれば、お聞かせいただきたいと思います。

**十川：**僕らのほうに、別の何かをオンラインで配信したという情報は今のところ入っていないですね。申し訳ありません。

**吉田**：分かりました。ありがとうございます。私どもの団体でも、オンラインで何かできないかなという事は考えていて、たぶん手弁当でどれぐらいできるかというところが分からないまま、今検討したりしています。と言っているうちに、われわれの活動拠点が公共施設なもので、その場所自体も使えなくなってしまいました。再開のめども立ってないんですけれども。今回ご紹介いただいた事例等を参考にしながら、ちょっと考えたいなと思っての質問でございました。ありがとうございます。

**十川**：ありがとうございます。一言だけ。我々のイベントは、とてもじゃないけど手弁当でとか、自分たちの持ち寄りでどうにかできるという予算ではなかったです、正直。

**吉田**：ありがとうございます。

**久保田**：ありがとうございます。たぶんこのイベントは、規模の問題はありますけれども、もっといろんなところで参考にできるのではないかなと思いますので、ご視聴いただいている方も、ご参考いただければと思います。

### 中川あゆみ氏との質疑応答

**久保田**：それでは最後になりますけれども、中川さんにお伺いしたいと思います。中川さんは、もともとご出身は十川さんと同じ獅子舞県の香川県ですけれども、その香川県に伝わる獅子を東京で演じる東京讃岐獅子舞を主宰されています。また、地元香川の獅子舞についていろいろなPR活動もされておられます。

それでは質問です。まずご発表では、オンラインの練習についてお聞かせいただきました。たぶんあれをもっと参考にしたい方はたくさんいるのではないかなと思ひまして、もう少し具体的に教えていただけたらと思います。たとえば、マイクをミュートにされるというお話だったのですが、それぞれの参加者のPCではどのような設定になっているのかといったことや、大きな問題である音や動きのずれをどのように回避されていたのかをご説明ください。

それからもう1つの大きな話題として、クラウドファンディングがありました。これも非常に関心を持っておられる方が多いと思うのですが、今回のようなクラウドファンディングによる祭りのオンライン化の取り組みは、地方の祭りなどに応用できるものなのかどうか。そのためにはどうしたら良いのかというお考えをうかがえればと思います。よろしくお願いします。

**中川**：獅子舞応援団、東京讃岐獅子舞の中川あゆみと申します。

まず、オンライン練習についての具体的なお話ですが、そもそも舞を分解して、細分化したもので練習を進めていければ、オンラインで練習は可能になります。マイクをミュートにした状態でホストの音だけが流れていて、その音に合わせて画面の向こうでみんなが獅子をやったり、鉦や太鼓をその音に合わせてやっている状態です。それぞれのパソコンでは、マイクをミュートにしなければ、音と映像が半拍ぐらいずれて現れます。それが返ってくるともっとずれてくるので、みんなにミュートにしてもらって、音に関しては一方向での練習にはなります。ただ、各自の動きは見えているので、慣れてくると鉦や太鼓に関しても手がずれてるのがだんだん分かってくるんですよ。それなので、「あ、あそこ間違えましたね」とか、子どもたちの動きとか獅子頭の動きも、「左右逆だよ」とか、「足間違えたでしょ」とかが、だんだん見えてくるので、これは慣れさえすれば可能かなと思います。音練だけやるのか、動きもやるのかでやり方が変わってきます。

あとダンスの方でよくされているのが、先にこれを練習してねっていう動画をお送りして、それに合わせて各自練習してもらって、それを見て指導するというやり方もあります。生演奏でやらなくて

はいけないもの以外は、そのやり方もありかなと思います。

次に、クラウドファンディングによる祭りのオンライン化のことです。我々は、お花代をクラウドファンディングで集めて、獅子舞自体はライブ配信でご覧いただくというものをしました。これはどの地域でも可能でして、先ほども少しお話がありましたけれども、これならば手弁当どころかスマホで済みますので、このレベルであれば全然問題ありません。

クラウドファンディングを使った理由の一つというのが、獅子舞を知らない人にも広く知ってもらうための広報媒体として使ったというところがあります。そして、クラウドファンディングをやるうちに気づいたことですが、寄付を募集する方法もターゲット層によって違うということです。ご年配の方は、ネット上で完結するクラウドファンディングでは、お金を送れない、やり方が分からない。なので、ゆうちょ銀行の口座を教えてくださいという意見もありました。また、海外の方からもやりたいと言われたのですが、クラウドファンディングの仕組み上、日本に住所がないとできませんでした。それは困りましたね。あと、募集が終わってから、手数料が取られるクラウドファンディングで支援するよりも、直接支援をしたいですというお話もいただいたので、すごく良いきっかけになったと思います。

ちなみに私たちは、11月29日にオンラインライブ配信をスマートフォンで、自分たちでやりました。それと実は同じ日に、また別の2つのオンラインイベントにも出演したんです。日本各地をオンラインライブ配信でつないだ「全日本獅子舞フェスティバル」と、トルコと日本の友好130周年を祝う「オンライン日本文化祭」です。このようにオンライン配信も、いくらお金がかけられるのか、どれほどの映像を提供したいのか、それとも手弁当でできる範囲で最高のもので良いのかなど、目的や環境によって多様な形態があることがわかりました。こうした経験を踏まえて言えることは、我々のような一団体でも、オンライン配信はできなくはないというのが結論でした。以上です。

**久保田：**ありがとうございます。今のお話につきまして、お聞きになりたいことがありましたらどうぞ。

**田仲：**とても興味深く聞かせていただきました。

クラウドファンディングは、日頃の対応もきめ細やかに見ていかなくてはいけない、その管理がすごく大変なんだろうなと思いますが、それは中川さんお1人でやられたのでしょうか。それともほかに担当者がいて、その方がやってくださっていたのでしょうか。

**中川：**人が足りておりませんので、私1人で全部やっていました。それでも、クラウドファンディングを始める前に戦略さえ立てていれば、毎日の作業はルーティーンでそこまで大変な作業ではありませんでした。それよりも、やる前にどのような戦略を立てるかのほうが重要だと思います。私もあまり戦略がないまま始めてしまったので、その重要性を痛感いたしました。

**田仲：**ありがとうございます。

**久保田：**ほかの方はいかがですか。

**吉田：**ありがとうございます。オンライン練習については、最初私の実証実験の中でもやろうかという話をしていたのですが、やはりわれわれの神楽だと、回転したり、動きが速いところはちょっと限界があるなと思っていました。そこで、今回試みられた獅子舞に関して、ある程度ここまではオンラインでやれるけれども、こういう動きはちょっと難しいよねというところはあったのでしょうか。

**中川：**まず、オンライン練習でやれることというのは、自主練をみんなで集まってやるというイメージです。なので、獅子舞も本来であればかなりのスペースが必要になりますし、太鼓の音だけではな

くて、鉦の音にも合わせたいんですね。アクセントの位置などを確認したいので。ですけれども、もうそこはパッションで乗り切ったっていう感じです。なので、自主練の動きを確認する作業を、毎週行っていたというところです。

**吉田：**ありがとうございます。動きを細分化すれば、できるところはできるというお話があったので、それに近い形をすれば神楽でも応用ができるのかなというところで、ご質問させていただきました。ありがとうございます。

## 2. 後継者の育成と子供への芸能の教え方

**久保田：**では続いて、皆さんの中でお互いに質問したいということがあるのではと思いますので、お聞きになりたいことがありましたらご質問お願いします。それでは宇都宮さん、どうぞ。

**宇都宮：**失礼します。皆さんそれぞれにお聞きしたいなと思うのですが、皆さんにお答えいただくと時間が足りなくなるのかなと思うので、代表して吉田さんにおうかがいたします。我々が伝承している芸能は、おそらく今年度とか単年度で終わりということではないと思います。希望としては、この先長く永遠に続いていって欲しいと思っているんです。その上で、5年、10年先はまあ何とかできたとしても、2、30年、あとは50年ぐらい先まで見据えると、次世代の育成も同時進行でやっていかなければいけないと強く思っています。何%という数字を出すのは難しいかもしれないですが、1年間の活動の中で何%ぐらい次世代への育成を活動の中に入れておられるのかというのをおうかがいしたいです。

**吉田：**ありがとうございます。まさにそういうところで私も今、大学院生になって研究させていただいているわけですが、うちの団体の場合、3割か4割ぐらいだろうと思います。具体的には、今練習会場を土日、祝日は使うなと言われているのでお休みしているのですが、週1回小学生の子どもたちの稽古の時間を日曜日に1時間取っています。そのほかに、地元の高校に神楽をやる部活動があるので、不定期ですけども、公演の1カ月前ぐらいから週1回ほど保存会のメンバーが教えに行ったりしています。単純に毎週日曜日だと、50日ぐらいはやっている計算になるので、全体の2割弱ぐらい。プラス高校生の育成を含めると、3割ぐらいかなと思っています。

ただ、やはり宇都宮さんがおっしゃるように、私どものほうでも集落に住む子どもが少なくなってきたという実態は当然ありまして、もう少しじわじわとやりたい人を募る範囲を拡張していかなければいけないなとは思っていました。実証実験は、敢えて一番難しいところとして首都圏の大学生を狙ったという意図がありました。この距離が、伝承地に近づくにつれて、集落外の人を取り込める確率は上がっていくのだらうと思っていて。まずは一番難しいところでノウハウを築き、あとは少しずつハードルを下げていくという形で、今後私のところは進めていければと思っています。

**宇都宮：**ありがとうございます。

**久保田：**もしほかの方でも、今の次世代、子どもに対してというご質問に対して、ご意見がありましたら、お聞かせいただければと思います。やはりコロナの問題は、大人にとっては1年間やれないのは仕方ないねで済みますけれども、子どもさんの1年というのは大きいので、これからの育成、継承にも大きな問題になってくるのではないかと思います。ほかの方よろしいですか。

**中川：**神楽には役とかがあると思うのですが、最低何歳から参加が可能なのでしょうか。宇都宮さんお願いします。

**宇都宮：**基本的には何歳というのは決めておりません。僕が所属している市山神友会では、慣例的に

小学校1年生ぐらいになったら始めてみようというのはありました。しかしながらコロナに関係なく、今年ぐらいからどんどん子どもたちが少なくなっていたので、うちの息子が今保育園の最後の年なんですけれども、やりたいという本人の意向もあったので、皆さんにうかがったところ、もういいんじゃないか、やらせてみるよという言葉も頂いたのでやらせてみました。保育園児にしては、25分間という長い時間の演目を覚えるのは苦しいかなと思ったのですが、彼らには難しいという概念がないと思ったのでやらせてみたところ、親ばかりですけども、よくやってのけてくれたなと感謝しているところなんです。でもこうやって、少し習い始める年齢を下げていく、あるいは少しずつ地縁者以外にもすそ野を広げていかないと継承はできないのではないかなと思っているので、従来の良いところは残しつつも、新たなやり方を模索して頑張っていく必要があるなと思っています。

**中川：**ありがとうございます。少しだけ付け足していいですか。私たちのところに、小学校1年から入ってくれている子とか、今年新たに入った小学校2年生の男の子がいます。オンライン練習の飲み込みの早さは、子どもたちのほうが格段に上です。遠隔で覚えるスピードも本当に早いんですよ。なので、大人が思っている以上に、子どもたちはオンラインでも対応できるというのも考えて、進めていくといいと思います。

**宇都宮：**ありがとうございます。

**久保田：**それでは、終了時間が迫ってまいりましたけれども、これは聞いておきたいということがありましたら、ぜひどうぞ。

**田仲：**すみません、今の話の流れでの質問なのですが、私はじゃんがら念仏踊りとは別に、三匹獅子舞を子どもたちに教えるということをしていまして、去年からは小学校1年生も交ざってやっているんです。ただ、ボキャブラリー、こちらが使う言葉を1年生なので理解できないところがあります。たとえば、体重をかけるとか、重心を移動させるなどという、普通に使う言葉で、小学校高学年ぐらいなら分かる言葉も、やっぱり1年生、2年生ではなかなか分からなくて、どのように伝えていったら良いのだろうという悩みがあるんです。皆さんはそういうところをどのように埋めているのか、お聞かせいただければと思います。

**久保田：**ではどなたでも。

**中川：**それに関しては、すごく今いい時期だなと思うのが、なんでもかんでも「鬼滅」と言うイメージができて、腰落とすですよ。なので「鬼滅の刃」がとても使えます。お勧めです。

**久保田：**宇都宮さんは、息子さんに教える時はどのようにされているのですか。

**宇都宮：**親子で伝えると、やっぱりこっちも本気になり過ぎて、すぐけんかになるんです。なので、僕の幼なじみが副会長としてやってくれているので、彼にいろいろ託してやってもらっています。それに何となく聞き耳立てていると、やはりボキャブラリーは少なく、僕ら世代も「くるっと回れや」とか、そんなことで終わってしまいましたね。だから子どもたちは分かっていないんですよ。それなので、逆に映像を見せてあげたほうが早いんですね。ずっと何回か繰り返し見てると、何となく体にしみ込んでくるんでしょう。気付いた時にはやるようになっていました。

**久保田：**なるほど、分かりました。ありがとうございます。

### 3. コロナ禍を乗り越えていくために

**久保田：**最後に皆さんにお聞きしたいこと、非常に大きな難しい質問になるのですが、これも2つ挙げさせていただきますので、適当にアレンジしてお答えいただければと思います。

まず今年のコロナ禍で、祭りや民俗芸能が各地できなくなっています。こうしたコロナ禍、またポストコロナの時代において、祭りや芸能をどうやって続けていくことができるのか。あるいはいったん休んだけれども、再開できるのか。それをするためにはどうしたら良いのか。これについてのご意見をお聞きしたいです。

それから2つ目としまして、今回のコロナ禍を経て、新たに見えてきた希望であったり、新たな発見について、まとめて最後におうかがいできたらと思います。

それでは、先ほどの順番で、まず吉田さんからお願いいたします。

**吉田：**祭りを継続、再開できるのかというよりは、しなければいけないんだろうなというのが率直なところなんです。そうするためにはどうしたら良いのかという点は、私の団体の場合だと、公演やるとどうしてもそれなりの人数が集まってしまうという認識がみんなにあるので、告知も何もしないで、まずはオンラインという形から、自分たちでできる範囲での公演活動を再開していくというところがスタートであると思います。幸いにとにかくあれなんですけれども、祭りの神事はできる範囲で今も継続していますので、あとはそこにどうやって公演活動を再開していくかというところに、知恵を絞る時期かなと思っています。

コロナ禍を経て見えてきた希望と言いますか、民俗芸能の演者として見えてきたことがありました。私もそうだったのですが、研究を始めたり、神楽ができないこういう状況になるまで、自分の大償神楽というものが、どのような価値を持っていて、どういうものであるのかを、自分の言葉であまり説明できなかったんです。ただ舞を見て、教えてもらって、舞って、楽しいねで終わっていました。

それが、自分にとって神楽がどういう価値があり、地域にとってはどういうもので、どのような役割を果たしているのかを考えることができるようになりました。それをいろいろな方に伝えていくことで、自分たちの舞っているものが、なるほどこういうものかというような、腹落ちできるような形を考える時期になったのかなと思っています。そういうところも意識しながら、民俗芸能の活動の幅を広げていける時期、チャンスをもたらしたととらえて、コロナ禍を逆手に取って、活動を続けていければ良いなと考えております。

**久保田：**ありがとうございました。続いて宇都宮さん、お願いします。

**宇都宮：**僕たちは今年、コロナ禍の中で祭りを継続できた側の人間として、逆に苦渋の決断をされてやめなければならなくなった団体の皆さんに経験をお伝えしていく責任があるのかなと感じています。熱意だけではどうにもならないということは、さきにお伝えしたとおりです。そして、それぞれの団体でやれることから、少しずつそれぞれのやり方で活動を継承していきましょうということも、今後の活動に向けての指針だと思っています。僕たちの団体だけで盛り上げることは絶対不可能だと思っています。皆さんと一緒にやっていくことで、初めて国にある全ての民俗芸能という側面から、地域あるいは日本という大きな組織を盛り上げていくことができるのではないかと思います。

そして最後、コロナ禍を経て見えてきた希望について、一番感じているのは、それぞれ個人が個人のままで生きていかない、他人事として思わずに自分事として捉えることの重要性を、それぞれが気付けたということが、一番の大きな希望なのかなと感じています。その個人の集合体というのは、家族もそうでしょうし、神楽という側面から見れば、神楽の伝承団体だと思います。この集合体を集めて、集めて、集めまくったところの先に、地域繁栄を見るのではないかと思います。そのためには、一人一人が地域のことを自分事として捉えることが、とても重要なのではないかと思います。それに気付けたこの1年は、大きな大きな財産になるのではないかなと確信しています。以上です。

**久保田**：ありがとうございます。それでは田仲さん、お願いいたします。

**田仲**：これは私も含めてですが、私の周りではコロナに対する深刻度は、そんなにないかなと思ってるんです。今年はコロナだからできないけれど、コロナが収まったらできるから、とりあえず来年やろうとか、収まったらできるというのが前提になっていて、やらないという考え方は、今のところ私の周りではないんです。ですので、できることをやっていく。できないことはできない。ただやるための対策を、しっかりやっていくべきだろうというようには思っています。

今これだけオンラインやリモートなどが増えつつあるなか、民俗芸能にとっても絶対に視野に入れておいたほうが、今後の継承の選択肢が1つ以上に増えていくのだろうなと思います。ただ、実際私の周りでオンラインを芸能に取り入れている人がいるのかというと、いないこともないのですが、非常に少ないです。たとえば、Zoom 会議を芸能のメンバーでやりましようと言った時に、拒否をされる割合のほうがまだまだ大きくて、スマホ1つでできるのは知っているのですが、そこに踏み出すのは、日常的に何か仕事でやっているとならば行けるんでしょうけれども、必ずしもそういう職業の人ばかりではないので、正直もう少し時間はかかるのかなと思っています。ただ今後のことを考えると、乗っておいたほうが絶対に良いとも思っているんです。ですので、そういうノウハウは、皆さまから教えていただきたいなと思っています。あと、そういう私が知ったノウハウを、私から仲間たちに伝えていきたいなとも思っています。

また、ガイドラインを策定されたとおっしゃっていましたが、今回の内郷じゃんがら会議もそうなのですが、そこで話し合われた、こういう問題に対してはこういう解決策があるのではないのかという積み重ねへのアクセスが、担い手の皆さん誰もがアクセスできるような仕組みがあったら、よりやりやすくなるのだろうなとは思っています。難しいとは思いつつ、一步一步、一つ一つクリアしていければなと思っています。以上です。

**久保田**：ありがとうございます。それでは十川さん、お願いいたします。

**十川**：今、田仲さんもおっしゃっていましたが、舞手のほうの深刻度は、本当に全然というほどなくて、「今年は仕方ないやん。また来年やろうよ」ぐらいなものです。コロナ禍が過ぎ去ったポストコロナの時に、お祭りをどういうように再開するであるとか、継続するかというのは、まあ特に何も行動を起こさなくても、起こっていくのだろうと僕自身も考えています。

今回、僕がコロナ禍を経て思ったことは、まさにその部分で、実際の伝承をしている僕たちと、本当の伝統的な文化財として捉えている方のギャップが、すごく大きかったなというふうに感じています。僕たち、ここでこういう討議なので難しい話をしますが、実際自分とこの獅子に帰ったら、「まあまあ、来年は来年で考えたらええやん」ぐらいのことにしか思ってません。獅子舞も400年、なんだかんだ続いてきている中には、いろいろな災難とか災害とかもあったと思うんですけれども、それを何とかして現在まで残っているというところを、もうちょっと僕らもおおらかに考えたら良いのではないのでしょうか。あまり保存、保存と言うと、ちょっと引いてしまうような部分も出てくるので、「まあ来年楽しもうよ」とか、「この楽しいことを、またみんなでするようにしようよ」ぐらいのところをみんなで話し合えると、きっと自動的に継続していくのだろうなというように思っています。

今回このコロナ禍で、やっぱり僕も保存ということについて考えましたが、どちらかというと何かをするということではなくて、今日のこの機会のように、地域を超えたり、芸能ジャンルを超えた方々と保存について考えられたということが、一番重要だったのかなというように思っています。ありがとうございます。

**久保田**：ありがとうございます。それでは最後に中川さん、お願いいたします。

**中川**：祭りの継続や再開についてですが、祭りイベントは全然ものが違うと思います。お祭りをどのようにして続けていくかという考えから対応していたら、再開というか、やることは全然可能だと思います。

それに対してイベントは、もう別問題。お金が関わってきたりと本当に別問題なので、それは難しいのかなと思うのですが、オンラインの利用がものすごく進んだり、オンラインのライブ配信の面白さが、いろいろな方がたくさん試してくれたおかげで、さらに今後どんどん面白くなっていくと思うんです。それなので、動画で記録したものが流れているだけではなく、オンラインのライブ配信だから面白いというものが、今後増えていくと思います。

また、子どもたちも本当にオンライン慣れしていますので、こういう民俗芸能を継承している子どもたちのサミットが行われたら、相当面白いのではないかなと思っています。以上です。

**久保田**：ありがとうございます。今皆さんのお話を聞いていると、やはり現実に関わっておられる方は力強いというか、いろいろな困難を乗り越えて民俗芸能というものが続いてきていることが前提になっているので、皆さんのお話、非常に力強くうかがうことができました。

ただ一方で、コロナ禍うんぬん以前に、そもそも、もはや続けられないんだと言っているような民俗芸能、あるいは行事、祭りというものもたくさんあって、そういったものがコロナをきっかけに今年やめて、そのままずっとやめてしまおうかと言っているところも、確かにあるようです。その辺りも、地域の問題ではありますけれども、今後どのように考えていけば良いのかという課題ではありますね。

今また冬になって感染者も拡大しているので、決して声高に祭りをやりましょう、行事をやりましょうとはなかなか言えない状況にあるかと思います。また、この「祭り」という言い方をしてしまいますと、大規模な人がたくさん集まるイベント的な祭りもあるので、それと一緒にされてしまい、すべての祭りが危険なものだと思われる傾向もあります。地域の小さな行事をも、全部祭りという言い方で括してしまうと、祭りだからやめておこうというような話につながりやすい面があります。こうした言葉のイメージにとらわれず、それぞれの場所でのリスクを冷静に考えながら、また再開できる、あるいは継続していけるようなことを、考えていったほうが良いのではないかと思います。

ですので、これまでのご発表、それから今日の話でもありましたように、まず「やめておこう」という話ではなくて、「やろう」ということから出発して、「ではどうすればいいのか」を考えるとところから始めてみてはどうかというような提案を申し上げたいと思います。その結果やめたり、中断するというのであれば、それはそれで仕方がないことですが、あるいはまた別の形で、何か代わりにやってみようというアイデアも、もしかしたら出るかもしれません。このコロナ禍だからこその、新たなチャレンジということもあるかもしれません。そうしたことを、ぜひこれをご覧の皆さま、今日のお話を参考にそれぞれの地域で考えていただければと思います。本日の総合討議、また登壇者の皆さまのご発表には、そのヒントがたくさん詰まっていたかと思います。

これから祭りや行事をどうしようと悩んでいる方は、たくさんいらっしゃると思いますが、みんなの知恵を集めて、それを参考にして、「それでも祭りをやろう」というスタート地点に立てることを願っております。

これで総合討議終わらせていただきたいと思います。ご登壇の皆さま、どうもありがとうございました。これで終了とさせていただきます。



## アンケート集計結果

1. 視聴者 総数（有効なユーザー登録者数）170 名

2. アンケート回収率 45 名／回収率 26.4%

3. アンケート集計結果

### (1) 回答者内訳

所 属	伝承者	行政機関	教育機関	博物館	企 業	研究者	学 生	その他
(名)	3	25	3	3	3	4	2	2

### (2) 満足度

#### ①満足度

	非常に有意義	有意義	有意義ではない
(名)	34	11	0

#### ②満足度の理由（自由回答・主な意見）

- ・テーマが時宜にかなっていた。
- ・実際に他団体、他地域の状況を聞ける機会が得られないため、非常にありがたかった。
- ・行政、伝承者双方の意見が聞けた点がよかった。また、それぞれの報告がオンラインで十分に時間があり、理解が深まった。
- ・会計的にも厳しい状況下で、今後の活動を考えるうえでのヒントを沢山いただいた。
- ・コロナ禍における各地の現状を相互に比較参照できるような試みとして非常に有意義だと感じた。
- ・様々な最先端の取り組みの事例を紹介していただく機会をいただき感謝しています。例年も参考になっていますが、今回の企画はひときわ素晴らしかったと思います。
- ・オンラインで視聴することができたため、自分の都合のつく時間に学ぶことができ、ありがたかった。
- ・コロナ禍において、やるかやらないか、何をしたかという結果のみでなく、どのような検討を経てそういった判断に至ったかという過程をお伺いでき、今後の取り組みを考えるうえで参考になった。
- ・前向きな取り組みを知ることができた。一方で、後ろ向きな意見も対比としてあると理解が深まると思う。
- ・無形民俗文化財とコロナ禍というテーマは、今重要なテーマだと考えます。それについて一定の蓄積をオンラインで誰でも視聴可能な形式で発信したことは、非常に有意義なことだと思いました。

#### 4. アンケート抜粋

##### (1) 今回のテーマに関して、ご意見やご感想などありましたらご自由にお書きください。

- ・大変時宜に合った良いテーマだと思った。また、何人かの伝承者の方々が共通しておっしゃっていた、「今回のコロナ禍について、伝承者は楽観的（いずれ収まると考えている）なのに対し、研究者の方が悲観的に考えているように思える」という話はとても印象的であった。考えてみれば、民俗研究や芸能研究の歴史よりも、多くの民俗芸能の歴史の方がよほど長いのであり、感染症の流行やパンデミックを伝承の過程で幾度も経験しているはずである。そんな当たり前のことに改めて気づかせていただいた言葉であった。
- ・支援する立場と実践する立場の双方から発表があり、より実態に近い内容が明らかにされていたと思う。また、博物館/資料館の取り組みにも焦点が当てられており、よかったと思う。
- ・今回報告いただいた事例は、地域の中でその活動目的に存在意義があり、伝承していく意欲がある人々の報告であったため、コロナへの対応も前向きと感じました。

当館がある練馬区域には、かつての農村地域で大切にしてきた行事なども都市化に吞まれながら、細々と残っています。「文化財」登録や指定とは関わりなく、地域の各集団や各家庭で受け継がれているものなど、コロナ禍を経て大きく変貌していくであろう、一部のものは急速に失われていくだろうと感じました。

- ・コロナ禍における各地での模索やガイドラインの策定、長い目で見て災禍を乗り越えて継承してきたという伝承者の感覚と研究者側のギャップ、オンラインでの練習や中継の難しさや可能性など、多岐にわたる論点が出てきて非常に興味深かったです。社会学やメディア論の研究上の関心からも考えさせられましたし、自分が研究で関わっている祭礼や民俗芸能の伝承者にも見てほしい、また伝えたいと思えるものでした。

矢田さんが述べられているように、山鉾屋台行事のように観光政策交通政策なども関わりステークホルダーも多い祭礼の場合は、さらに変数が多く複雑な問題を抱えると感じました。また最後に田仲さんが仰っていますが、ガイドラインに関する解決策のアクセスが芸能団体からできると負担がある程度は縮減されるというのは重要で、誰が管理運営するのかは難しいでしょうが、そうした場ができればと思います。

- ・これまで疫病退散を願っておこなわれてきた伝統行事が、コロナによって実施がかなわない状況となり、一種の「矛盾」を感じていたが、皆様のご報告によりこれを共有できたこと、コロナにおいても継承しようとする取り組みの事例に希望が感じられた。
- ・コロナ禍で十分調査に出かけることができないなか、各地での取り組みを聞くことができ、参考になりました。
- ・それぞれの文化財について情報伝達能力に格差があります。これは文化財を統括する行政側に問題があると考えます。
- ・逆にリモートであれば所在地に関わらず全国的な発表会なども開催可能なポテンシャルがあるかと思います。
- ・東京讃岐獅子舞のオンライン活用については、たまたま成功した事例であると思われるので、これを是とするのはいただけない。無形文化遺産に関するオンライン活用については、もっと深い調査研究が必要と思われる。無形文化遺産の本質的な部分（神事・意義等）を失うことの

ないよう配慮を要する。

- ・団体さんによっては、今年できなくても来年やればよいと案外楽観的に考えている、というお話は印象的でした。私の調査でもそのようなお話を聞いたことがあります。しかしながらそうした考えは、エネルギーのある、あるいは今後の活動に見通しのある団体に限ったことのように思えます。継続したくても困難と考える団体さんの中には、対策情報や他団体事例の情報を得る機会も知らないまま諦めてしまう方々もいるかもしれません。

以前も協議会ご担当者様に少しお話ししたことがありますが、今回紹介のあったような先駆的な取り組みの情報を、本当に知ってもらいたい団体／人にどのように伝えていくかが課題と感じます。

今回は特に実践的な情報も多いため、全国の保存団体の方々にとって意義深い内容に感じます。そのため、youtubeなどにあげて、より多くの方に見てもらうことを考えても良いのではないかと思います。ネット上で公表するには様々な問題があるのかもしれませんが、動画を拝聴し上記のことを強く感じました。一部の意欲ある団体だけでなく、疲弊した団体が存続する契機ともなることを願います。

- ・今回の新型コロナの影響が大きい地域が都市部に多いため、地方と都市のコロナの対応度の差を感じた。当方は、埼玉県秩父地方ということであり、生活圏は地方だが、芸能を行う際には都市部からの人の動きがある場合が多く、県としての要請も強い。最後の話題で出ていたイベントと祭りの違いもあるが、具体的な感染症対策のガイドラインが欲しいと感じた。
- ・コロナ禍のもと民俗芸能が実施に至るプロセスが、神事的性格の強いもの、比較的イベント性が強いものそれぞれの特性に応じて語られ、感銘を受けました。いろいろな芸能が各地で根を張ってきた状況も知ることができ、存続の危機に瀕しているものも多いとは思いますが、日本という地域の豊かさ、深さ、多様さを再認識することにもなりました。伝承者の将来展望からも、各地域充実の核となるものの一つはやはりこうした住民自身が行う民俗芸能（あと、祭祀や神事なども）なのだろうという確信も裏付けられた気がして、大いに有意義でありました。
- ・今回、ご報告のなかでも、コロナ禍を乗り越えるだけでなく、むしろ健全な伝承のためのステップアップの機会とする可能性が示されたと思います。

特に周防大島の動画コンテンツ（宮本常一チャンネル）の充実と発信は、既成概念にとらわれない様々な素材を対象にすることと、その生産数の多さには目を見張るものがありました。情報の物量作戦ともいうべき発想は、興味深く拝聴しました。

花巻市地域おこし研究所の取り組みは、過疎に直面する地方都市ならではの、堅実かつ有意義な取り組みだと感じました。京都市でも、人口減少を防ぐことを目標に掲げていますが、視点はどうしても都市部に注がれています。京都市には国指定重要無形民俗文化財「久多の花笠踊」を伝える地域など山村僻地がかなり存在するのですが、花巻市のような全市的な取り組みには至っておりません。無形民俗文化財だけの振興ではなく、「地域おこし」とからめた取り組みを行政として真正面から取り組む事例は、他の地域でも学ぶ点が多いと思いました。

東京讃岐獅子舞のオンライン練習、オンライン奉納の事例は、ひとつの可能性として大変参考になりました。京都の祇園祭でも、綾傘鉦で数か所にわかれた演者の実演をオンラインで組み合わせた祇園囃子の配信をおこなわれましたが、練習においても活用できるという事例を示していただいて、刺激になりました。

それぞれのご報告が、試行錯誤のなかで実際に取り組まれたものでしたが、どこでも通用するモデルの構築には、まだ時間がかかると思います。何よりも、各地域のオンライン環境、特にそれに携われるだけの、ある程度の技量を持った人材の確保が急務ですね。

## (2) コロナ禍での影響を受けた無形民俗文化財、あるいは新しい試みをおこなっている無形民俗文化財の事例をご存知でしたら教えてください。

- ・私の住む地域（※編者注 岐阜県郡上市）でも、例年通りの方法での祭礼・芸能はほとんどが中止されました。一部の保存団体では今回の協議会で言及されたような、規模や方法を変えるなどの工夫がされましたが、遠く離れた他県の具体的な事例を知ることができたのは、大変参考になりました。

- ・古河神楽保存会では、会員の研修をネット上で行った。

また、「子ども神楽発表会」を他の子ども神楽の団体と合同でオンラインイベント（ユーチューブ）ライブ配信する機会もありました。

- ・本町内（※編者注 宮城県遠田郡美里町）での事例は把握しておりません。
- ・兵庫県では、来年度、京都府に続いて、無形民俗文化財の登録制度を創設します。
- ・私の勤務する地域（※編集注 滋賀県守山市）では、管見の限り、すべての無形民俗文化財に中止や規模縮小など何らかの影響があった。さらに来年以降にも影響を及ぼす可能性が高い。

滋賀県甲賀市の水口曳山祭では、地域の有志グループが、お囃子の練習における感染防止対策のマニュアルをつくるなどの活動をされている。

- ・私どもが継承している「御船謡」は、約 370 年の歴史の中で戦時中を除いて毎年巡行奉納してきました。演奏については 18 人の演奏者が譜面がなく口伝によるものなので、芸事は目と口と感性で読み取る実際の練習と本番による真剣勝負でした。また、山車に乗って演奏するので、山車の操作や曳き手など神社総代や伝統組織、地域有志、現役高校生、あわせて 50 人以上の支援が必要です。

関係者の covid19 からの安全確保を鑑みて 2020 年の巡行奉納は練習を含めて完全に中止としました。我々の会にはお医者さまや救急隊員など医療に関わる会員もいるので世間のお祭り関係者以上に神経質になり決断も厳しくいたしました。それでも、古い神社総代など中止決定に理解されない方が多く今でも苦慮しているところです。

2021 年は関係者と相談をしっかりとしながら、どうしても開催できるかを模索していこうと考えているところです。冒頭に申し上げたとおり、口伝ですので芸の風化が懸念されるからです。今年 95 歳になられる「御船謡」歴 72 年の方は演奏中に死んでもかまわないと言われるほど命をかけて取り組まれています。

謡・法螺貝・和太鼓・三味線を幅 2 メートル・長さ 8 メートルの山車の上で 8 月 3 日の真夏に紋付肩衣袴姿で終日市内を演奏して回ります。狭い中での肩を寄せての正座・大きな声を出すための飛沫、法螺貝の飛沫など 3 密と熱中症との闘いです。370 年間の歴史をどこまでアレンジできるのか、頭をいためています。

- ・本町（※編者注 徳島県美馬郡つるぎ町）では軒並み季節の伝統芸能が中止された中、地元の雰囲気あって開催している全国の取り組みが聞けて令和 3 年は前向きに各団体と交流したいと思えました。

- ・長野県南佐久郡小海町親沢集落の人形三番叟。
- ・滋賀県高島市「朽木古屋の六歳念仏踊り」ではオンラインによる継承が試みられました。
- ・影響を受けた無形民俗文化財：「烏山の山あげ行事」、「三箇塙の天祭」。

新しい試み（模索中）：「烏山の山あげ行事」現在の課題や改善点などの洗い出しを行っており、新しい試みを含め模索中です。

- ・当市（※編者注 埼玉県朝霞市）の指定無形文化財 2 件ともコロナ禍の影響が大きい。

三匹獅子舞である「溝沼獅子舞」は、疫病払いの獅子舞でありながら感染拡大防止のため奉納舞を中止しており、保存会のほうでも疫病払いができないことを気にされている。

もう 1 件の「根岸野謡」は練習会は再開したが、発表の場が失われ、モチベーションの維持に大きく影響している。これまでは「教育委員会の依頼なら頑張ってみるか」との声も聞かれたが、今年度はそういった場が全くなく、また学校への出前授業もできない状況となっており、コロナ禍が無くなった後に活動が維持できるか、文化財保護行政側から見て非常に不安である。

一方で、伝承者・運営者とも高齢化が進んでいるため、安全配慮をしても無理はさせられない、というジレンマもある。

- ・①山形県最上郡鮭川村の鮭川歌舞伎保存会。

保存会の若手(20～30代)が一念発起し、6月14日の定期公演の日に無観客で撮影を行い、山形県内でいち早く動画配信による公開を実現した。

- ・②山形県最上郡真室川町によるスタディツアー（真室川町教育委員会）

大人向け社会科見学事業「真室川スタディツアー」をネット配信とし、町内の無形民俗文化財について紹介。視聴後にアンケートにメールで回答すると修了証が郵送される。

- ・影響を受けた文化財は、その度合いにもよりますが、いくつも思いつきます。（中止・延期など）そうした事例は枚挙にいとまがないようにも思いますが・・・。
- ・民俗芸能に取り組む小学校は、今年度の中止の影響を大きく受けました。一学年抜けると次年度の継承が不安です。
- ・農村歌舞伎について、従来の化粧道具の共有など上演するための課題解決方法がわからず、昨年3月以降正式な公演ができてなく、見込みも立っていない。
- ・堺市においては、国選択・府指定無形民俗文化財「上神谷のこおどり」及び市指定無形民俗文化財「石津太神社のやっさいほっさい」について、奉納の実施ができませんでした。「こおどり」については、後継者養成事業を例年よりも規模を縮小しながら実施されましたが、来年度以降の奉納について不安を覚えられていました。
- ・様々なイベントや祭事が中止となり、多くの無形民俗文化財が影響を受けています。令和2年における国指定無形民俗文化財「阿蘇の農耕祭事」について、工夫しながらも行ってきた神事等について記録したものを、令和2年度末にHP上で公開予定です。
- ・東三河では春～夏に開催される祭礼行事の多くが中止となりました。情勢を確認しながらですが、今年の豊橋鬼祭は無観客での開催となるそうです。
- ・静岡県指定三熊野神社三社祭礼囃子、同三熊野神社の地固め舞と田遊び、国記録選択三熊野神社大祭の衾里行事（掛川市）は、感染対策を十分実施して開催できないか前向きに検討中。
- ・本市（※編者注 静岡県静岡市）では、令和2年度はコロナウイルスの感染対策のため市内に伝承されているほとんどの無形民俗文化財が中止されました。各保存団体が来年度の実施に

向けて模索している中で、今回各地の取り組みを紹介していただき、大変参考になりました。静岡県指定無形民俗文化財「清沢の神楽」では、令和2年度に地元の保存会が映像を作成し、YouTubeにて公開しました。

- ・出演予定のイベントの中止と、それに伴う保存会の収入減。祭事での踊りの奉納中止（神事のみ実施）など。【国重要無形民俗文化財「大村の郡三踊」】
- ・夏や秋以降の民俗芸能は中止や規模を縮小しての開催が多いが、新たな取り組み等は承知していない。（※編者注 高知県高知市の方からの情報）
- ・コロナ禍で、都会から地方へ移住する人たちが増えている事はご存知の通りであるが、島根県では移住を希望する人たちに、オンラインで、地元の石見神楽を見てもらう催しを去年の夏に開いた。移住者に、事前にその土地の文化や生活習慣を知ってもらうための取り組みであったが、これは、無形民俗文化財の新たな担い手を掘り起こす可能性を秘めていると感じている。
- ・当市（※編者注 石川県小松市）の行事も中止になったが、人が集まり密になる部分にどう対応するかが同じ課題としてある（人数限定が難しいなど）。
- ・京都市内でもほとんどの無形民俗文化財が中止または規模縮小に追い込まれました。滋賀県の矢田さんが報告されているように、規模が大きな行事ほど、その社会的影響を考慮し、早めに中止の決定を下す傾向にあったかと思います。
- ・当町（※編者注 千葉県山武郡芝山町）の県指定の無形民俗文化財は、披露するイベントが全て中止になってしまいました。私がプライベートで関わっている無形民俗文化財は、地区内でも色々意見がありましたが当番組がやらないとしたため、中止となりました。
- ・京都市内でも、多くの行事が中止されるなか、様々な工夫もありました。祇園祭において神輿の巡行に代わってご神霊の渡御、山鉦巡行に代わる櫓を奉持しての徒歩巡行、お盆の六斎念仏の棚経では実施に向けたガイドラインの策定とその徹底、五山送り火の規模縮小による点火、そして、対外的には「中止」としながらも関係者に向けては事前申し込み制かつ人数制限などを設けた「練習発表会」を開催するという手法もありました。

これらの対応は、主催者・伝承者の開催したい気持ちよりも、それ以外の地域住民の反応、とくに子供を持つご家庭や老人世代に配慮し、また、マスコミの報道のされかたとその反響を予測し、いかに観客が集まらないようにコントロールするか、という点に気を使われたと思いました。一時期、「開催」と表現することが、世論の支持をまったく得られないような切迫感があったように思います。

京都市には、市民から各種の祭礼行事を強権的に中止させてほしい、といった要望も多数寄せられていました。しかし、京都市では市民一般にコロナ対策の注意喚起をおこなってききましたが、個別の伝統行事に特別な中止要請などはしていません。むしろ、京都市の独自制度、「京都をつなぐ無形文化遺産」に選定した「京の地蔵盆」のように、ウィズコロナの時代に合わせた工夫をしていただくよう、提案をした例もあります。地蔵盆に関しては、京都府立大学の前田研究室と連携して実施等の動向調査も実施しております。

2020年の秋に祭りシーズンが終わったところから、いかにして安全に「実施」すべきかという課題解決に向き合う素地が固まりつつあるように思います。

### (3) 無形文化遺産の伝承の保存・活用全般に関して問題や具体的なお困りごとなどありましたらご自由にお書きください。

#### 【担い手・後継者不足】

- ・当市は都市近郊の住宅地であるため、地域に密着している市民の割合が少ないため、見学者等の推移・状況を見ていると、興味はあるけれど伝承に携わろうという市民は非常に少ないと思われる。また、伝承者・運営者も生業をしながらとなるので、一般市民に向けた日程・時間帯での練習会等の企画・実施がとても難しい。
- ・本町内の指定民俗無形文化財である神楽も風前の灯です。再開・復活の旗振り役は誰がどのように担っていくべきか、様々な事例を知りたいと思っています。
- ・現在、感染を恐れて年配者は団体内で集まることにも消極的であり、若い人との意識の乖離が生じています。今後オンライン利用への意識などでさらに世代間のギャップが深まることを危惧します。
- ・少子高齢化と過疎化により、担い手不足が深刻であり、今後数年以内に活動できなく芸能がある。
- ・阿蘇市では、主とする生業の変化（農業後継者の減少等）や地域社会のつながりの希薄化によって、活動を停止している無形文化遺産が存在します。近年において、同様の状況ながらも活動が復活した事例があればぜひご教授願います。
- ・後継者の確保、過疎化と高齢化での継続が大きな課題となっています。
- ・人が集まっての活動が中心だが、十分な感染防止策には費用も人手も不足しているため、活動停止に至っている。
- ・神楽の団体が解散したいと申し出があり、保存団体のメンバーの一部で保持するために、新たに会員集めからはじめようと思っていた矢先のコロナ禍に、普及イベント中止となり、時間との勝負という感じがしています。地元人がいないわけではないので、自治会など周囲を巻き込んだ保存会結成が出来るものなのか悩みどころです。
- ・地域（集落）自体に人がいなくなっており、伝承が難しいという声は聞くが、対応が難しいと感じる。
- ・共通の課題だが、担い手不足に対する、外部人材の受入れは理解を得られるのか。
- ・次世代への継承、地域の温度差、価値の伝承。

#### 【活動資金、道具の不足】

- ・伝承活動の予算不足。（今ある伝統文化をしっかりとした形で、次代の方々に受け継いで頂きたいと念願している。しかし資金がないため活動が十分に推進できず、断念することもあります。）
- ・衣装や道具などの新調・修理の際に必要な材料がなかったり、それを加工する技術がなかったりすることに困っている。このコロナ禍でそれが進行することを懸念している。
- ・謡・法螺貝・和太鼓・三味線を幅2メートル・長さ8メートルの山車の上で8月3日の真夏に紋付肩衣袴姿で終日市内を演奏して回ります。狭い中での肩を寄せての正座・大きな声を出すための飛沫、法螺貝の飛沫など3密と熱中症との闘いです。370年間の歴史をどこまでアレンジできるのか、頭をいためてます。

また山車も炎天下での使用のため補修が必要なのですが、貧乏所帯のためできていません。昨年、山車後輪の車軸が折れていたため大規模修理を会独自でしました。神社からは1円も支援していただけませんでした。古い総代が自分たちで稼げ、自分たちで手出ししろという始末です。前輪も同様のことが考えられるので修理したいのですが、厳しそうです。神社祭礼の御初穂では赤字になるため当会で神社会計を補填しながら、なおかつ保存会の日頃の外部での大会等での演奏謝金で本会計を回していました。しかし、covid19で大会がほぼなくなり収入が0円となり万策尽きています。

幸いにも、後継者問題が現在のところないのが救いです。

保育園や小学校への出前授業など未来へのお手伝いをしているところですが、活動内容とは裏腹に金銭面で苦勞しています。

- ・和紙漉き技術の伝承や道具類、原材料の確保について近い将来必ず問題になるかと思います。
- ・山形県指定無形文化財「本場米琉（白鷹板締小紺）」の工程で必要になる紺板の原材料「イタヤカエデ」の安定供給。

### 【現状把握・記録作成における問題点】

- ・府指定無形民俗文化財「堺の手織緞通」は、堺式手織緞通技術保存協会が主体となって保存継承をおこなっていますが、お祭りのように地縁的なものではなく、同業の企業さんで構成されています。そういった無形文化財の、保存継承事業や保存会維持の事例などを詳しくおききしてみたいです。
- ・無形民俗文化財の伝承について、休止だけではなく、簡略化、実施内容の変更などが発生している。こうした変容記録をどのように記録していくかも課題。

また、使用する道具についても生産者が廃業し入手できなくなる事例が発生している。

- ・兵庫県では文化庁の「祭り・行事調査」を2017年度-2019年度で実施しましたが、無形文化遺産の現状を把握するための行政機関や研究機関のマンパワーの不足を痛感しました。今回の協議会でも話題になっていた社会状況による継承の不安がコロナ禍で加速するなか、無形文化遺産の保存と活用についての仕組みづくりの難しさを感じております。

### 【その他】

- ・①少子高齢化による後継者不足。令和元年度に市街地に住む若者を対象に神楽の体験見学会を行いました。そのときだけの参加となってしまいました。後継者不足により、祭りの日程を短縮する団体も出始めています。②今年度の実施に向けて、各団体から新型コロナウイルスの感染対策ガイドラインを求められていますが、団体によって実施形態が異なるため提示が難しいです。③神楽面や衣装の修理を依頼できる業者・職人の情報が乏しいです。④SNSやオンライン会議ツールを活用した取り組みを行いたいところですが、高齢の継承者が多く、実践が難しいです。
- ・文化財保護法改正により無形の文化財についても保存活用計画の策定が可能となりましたが、具体的に取組まれているところがあるのかを把握しておりません。そうした情報があればぜひ知りたいと考えています。
- ・現在は、各保存団体に、このコロナ禍を無事乗り切ってもらい、収束後に活動を再開してもら

うことが最大の関心事になります。

- ・当町は成田国際空港の機能強化によって移転する地区があり、その地区の民俗文化財等が今後どうなっていくのか心配しています。

#### (4) 今後、この研究協議会で取り上げて欲しいテーマやその他のご要望などがありましたら、ご自由にお書きください。

##### 【新型コロナ感染症関連、またはポストコロナを見据えて】

- ・コロナ禍はいましばらく継続すると思われるので、来年もこの間に積み重ねられた経験・実績・反省・可能性といったことがテーマになり得るのではないかと。また、そのことが（今回の登壇者の方もおっしゃっていたことだが）将来のパンデミック、あるいはさまざまな災害に向けての大切な「備え」となるのではないだろうか。
- ・このテーマはまだ研究が始まったばかりで今回の発表でも、論文・文献の引用は少なかったように感じました。一定の研究が出てきたときに、また行っても良いのでは無いかと思います。
- ・来年度もコロナ2年目の各地の対策や事業について取り上げていただきたいです。
- ・今回のコロナ禍は、民俗文化財を含めさまざまな事柄に影響を与えていると思います。今後、コロナ禍を経て変わったこと、変わらないことの確認も必要だと思います。
- ・研究者や専門家が心配している、伝承問題に課題を抱えている保存会が、これを機に完全休止にならないか心配。こうした、ごく一般的な保存会をどのように支援していくのが、改めて課題であることが分かった。

各地で十分な検討の末示されたガイドラインは他地域の事例でも有効でありそうなので、こうした事例についてHPなどで確認できるようにしていただけるとありがたいと思う。

- ・行政からの財政支援について、コロナ対策としてどの程度なされたのかを伺ってみたいと思いました。
- ・政策とのかかわりがもっと知りたかった。
- ・コロナ禍の影響による、来年以降の祭り行事の状況も知りたいと思いました。
- ・全国的に民俗芸能保護団体が直面している課題であると思いました。各団体にも身近に見てもらえるような媒体での情報発信があればよりよいなと感じました。獅子舞、神楽などジャンルごとに自由な掲示板のようなものがあれば、心強いなと思いました。
- ・今後のコロナの状況がまだ見通せない中ですが、コロナ禍後の中長期的な影響（保存団体の存続への影響、活動方法の変化等）についても注意を払っていく必要があると感じました。
- ・コロナ禍が収束した後、振り返って総括するような機会を設けていただければありがたいです。
- ・今後復活していくためには、行政としてどのようにかかわり、支援していけばよいのか、知りたいと思っています。地元の方々の意欲をどうすれば喚起することができるのか、なかなか思いつかずに苦慮しております。
- ・コロナというテーマは、常に非常事態の無形文化財にとって親和性の高いテーマであったと思う。欲を言えば、まもなく東日本大震災10年になるので、コロナと震災10年というミックスのテーマでも聞きたい内容であった。そういう意味では、いわき市の取り組みの話は、とても興味深く聞かせて頂いた。
- ・これまでの研究協議会もそうですが、今回のご報告について、また後日、その後の展開につい

での報告をお聞きしたいと思います。

### 【今後期待するテーマ】

- ・文化財の種類ごとに協議会を開催してはいかがでしょうか。より具体的な問題点の共通理解ができるのではないのでしょうか。
- ・無形文化遺産継承のための取り組み（民間、NPO など多様な組織での取り組み）。
- ・伝承できない無形文化遺産に対してどのような対応をとれるのかというテーマを取り上げて欲しい。
- ・無形文化財におけるクラウドファンディングの活用について。
- ・無形文化財における人材の育成及び確保について。
- ・伝承者、行政、博物館等の具体的な取り組み例を引き続き共有できると良い。
- ・都市近郊部での無形文化遺産の状況や伝承の事例など取り上げていただきたい。
- ・獅子舞や神楽など一つの芸能をテーマに全国での比較や討論があればおもしろいと思いました。
- ・地域のなかでも特色があり注目される芸能とそうでない芸能が存在する場合、地域（特に行政）が地域全体の芸能をどう支援しているか。
- ・東日本大震災で結局どのくらい復活したのか量的な調査の結果が知りたい。
- ・沖縄・奄美特集を考えてみてください。琉球の御嶽で行われる祭祀の中には、過疎化や生活環境の変化により中断、休止、廃絶しているものが少なくありませんので、これまでも取り上げられたかと思いますが、最新情報によるテーマ設定で、一度、協議会の開催をご検討ください。
- ・集落に人がいなくなる現状で、伝承をどのようにやっているのか知りたいと思う。
- ・東日本大地震10年、熊本地震5年という節目を2021年は迎える。災害と無形文化財というテーマで各地の取り組みを聞いてみたい。
- ・祭りや行事で使用される道具や資材の原材料を調達するための新しい取り組みがあれば、それに焦点を当てて取り上げていただければと思います。
- ・オンライン配信の具体例や、後継者育成のプログラム、芸能の動きや映像などによる記録保存の仕方などを希望します。また文化庁が文化財保護法を一部改正し、登録制度を導入するようです。この制度により、民俗芸能団体をどれだけ支援できるのか、そのように利用していったらよいのかなど取り上げて欲しいです。
- ・特に行政としては、事業のノウハウに興味があります。
- ・映像記録撮影事業について、近年の事例について知りたいです。
- ・これからの時代における行政の関わり方。
- ・改定文化財保護法（文化財保存活用地域計画）と無形文化遺産。

### 【協議会のオンライン配信への評価と要望】

- ・なかなか外部の会議に出席する余裕などは、業務中ではないのですが、オンライン配信という気軽にいつでも視聴ができる手段を設けていただいたことで、今回、参加することができました。コロナ禍での苦肉の策であったと思いますが、それにより、多くの人にイベントに参加する機会を作って頂いた事に感謝します。私自身も博物館職員としての活動の意味を考える時

間となりました。今後も、継続してオンラインでの配信を希望します。

- ・オンラインでの開催は大変ありがたいので、引き続き検討していただきたい。
- ・リモートでの協議会、出席できなかった際には大変に助かります。今後も続けていただけたら有り難く思います。
- ・例年旅費が計上できない都合上今回はじめてのこの会に参加して今後も参加したいと思った。できればオンライン配信を続けてください。
- ・無形民俗文化財とコロナ禍というテーマは、今重要なテーマだと考えます。それについて一定の蓄積をオンラインで誰でも視聴可能な形式で発信したことは、非常に有意義なことだと思います。
- ・多方面からの話を聞いてよかったです。長時間でも、好きな時に聞けたので便利でした。
- ・テーマが時宜にかなっていた。また、オンライン開催ということで、あまり実感の湧かない会議になるのではないかと思っていたが、登壇者の皆さん、特に伝承者の方々の熱量がきちんと伝わってきたので驚いた。思うに、人文系の研究発表やシンポジウムは意外とオンラインにマッチするのではないだろうか。

また、地方在住だと年によって協議会に参加できたりできなかったりするのだが、今年はオンライン開催であればこそ、こうして参加することができた。実際、コロナ禍になり学会や研究会がオンライン開催に切り替わって以降、これまで仕事の都合で足が遠のいていた東京や京都の学会にも参加できるようになり、最新の研究情報に触れることが可能になった。もちろん、実際のリアルな会議に参加できることが一番良いのであるが、今後はリアルな会議に加え、ライブ配信、あるいはオンデマンド配信の併用をご検討いただけると大変有り難い。

- ・自分のスケジュールに合わせて、メモを取りながら視聴できて良かった。
- ・オンラインであったため、出張せずに内容を共有することができた。項目ごとの動画であったため、業務に支障なく閲覧が可能だった（ただし、データが重く、閲覧が困難であった）。
- ・振り返って再度確認のための視聴が可能なのが良かった。



第 15 回 無形民俗文化財研究協議会報告書

Report of the 15th Conference on the Study of Intangible Folk Cultural Properties

## 新型コロナ禍の無形民俗文化財

Intangible Folk Cultural Properties amid the COVID-19 pandemic

令和 3 年（2021）3 月

Issued in March, 2021

### 編集・発行

独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 無形文化遺産部

〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43 TEL 03-3823-4925

Edited by the Department of Intangible Cultural Heritage,

Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

Independent Administrative Institution National Institutes for Cultural Heritage

13-43 Ueno Park, Taito-ku, Tokyo 110-8713 JAPAN